
狐印の冒険譚

白瀬しらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐印の冒険譚

【Nコード】

N1136V

【作者名】

白瀬しらす

【あらすじ】

頭でっかちで世間知らずな子狐っぱい魔獣が異世界ファンタジーな世間の荒波に揉まれる話。

1 ・深夜の出会い（前書き）

- ・頭でっかちで世間知らずな子狐っぽい魔獣が異世界ファンタジーな世間の荒波に揉まれる話
- ・ストーリー仕立ての設定資料集のようなもの

1・深夜の出会い

薄暗い森の中、ざわざわと湿気を含んだ重たい風が葉や枝を揺らしている。いや、それだけではない。耳を澄ませばまるで何かが噂話でもしているかのような声ならぬ声が聞こえてくる。鬱蒼と生い茂る背の高い草むらの中から時折聞こえる、酷く興奮したかのようないきいと耳障りな高い声は胴も脚も短い、ずんぐりとした体型を持つ小さな魔獣が出すものだ。苔に似た緑色の毛を全身に生やし、顔面は石で潰されたように醜い。精一杯威嚇しているのだろうが、元々臆病でまともな攻撃手段を持たないおとなしい種であるため、今ここを警戒しながら進む武装した人間達にはほとんど無視に近い扱いをされている。

森、奥深く。この人間達の中でも特に目立つ全身鎧を着た大男は木々の僅かな合間から覗く翳り始めた空を見やると、苛々とした様子で溜息をついた。

「つーか、ホントにこんなところに五位の魔物が居るのか？ 無駄足だったら承知しねーぞコラ」

「ぶちぶち言わない。これも仕事よ」
「へいへい」

深い色のローブを着た美しい女性が呆れたように男を窘める。彼女の服装はこのような整備されていない森を歩くにはいささか不釣り合いに思えるかもしれない。しかし、このずるずると丈の長い衣装が彼女にとって一番安全なのである。それというのも彼女のような一般的な魔法使いは体力が少なく、重い鎧など着ていたらあつという間に敵の餌食になってしまうことは予想に難しくない。なのでこの、魔力を流すと硬度が変わる特殊な繊維が使われたローブを着て

いるというわけだ。慣れれば夜着よりも動きやすいともつぱらの評判で、欠点と言えば値段の高さくらいのものだろつ。

「愚痴が言いたくなる気持ちもわかるよ。ここ、湿気でベタベタするし」

「軽装でコレなんだからなあ」

「そつなのよね」

剣を腰から下げたマントの青年と弓矢を背負つた少年も口々に不満を言う。彼らとは対照的に頬に大きな傷のある無口な男は油断なく周囲の気配を探っている。ローブの女性も先程は無駄なおしゃべりを止めた側だったものの、彼女自身も不平不満を言いたかつたということもあり、一行はなんともグダグダな雰囲気ですらに奥へと進んでいった。はつきり言つて、彼らは完全に油断していたといつてもいい。

それから少しして、彼らは野営の準備をしていた。それなりに開けた場所を見つけ、かつそれほど遠くないところに湖があつたためである。多くの魔獣は湖のような動かない水を嫌い、その周囲には寄り付かないのだ。さて、簡易式の寢床をこしらえて薪を囲む彼らのあいだには『多分無駄足なのではないか』というけだるい雰囲気の流れていた。

「今日も見つかんかつたな」

「こんだけ探して見つかないならさ、もう帰つてもいいよね」

「こら」

「はいはい、頑張りますよーだ」

彼らはここらではかなり名の売れた冒険者である。全員まだ若者と称される年齢で、人数こそ五人と少ないものの、それぞれの卓越した技巧といい、連携の取れた動きといい、シルバー級も近いと噂されている。何より特筆すべきなのはリーダーである女性魔法使いだ。彼女はシルバー級を飛び越してゴールド級の冒険者たちからもひっきりなしに誘いが来るほどの腕前を持ち、しかも博識で性格もよく上品で美しいときた。そんな彼女にメンバーの男達は首っ丈というのは完全な蛇足である。そんな彼女と弓使いの少年が実はデキているというのはもつとどうでもいいことだろう。

簡易的な食事も終わり、それぞれが思い思いの時間を過ごしていた。魔獣の出るところでそんな危険行為、と思われるかもしれないが、この森は級を持たないような新米冒険者向けのダンジョンに指定されており、本来ブロンズ級の彼らは入れないところである。上級冒険者が弱い魔獣の出るダンジョンに通い続ければ生態系も壊れてしまうし、なにより下級の冒険者たちの仕事がなくなる。

ならばなぜ彼らがここに居るのかというと、先に述べたとおりここに五位の魔獣が出るといふ噂が流れているからだ。魔獣は上から順に零位から七位までに分別されており、ついでに言うところ以下は魔獣は魔物と称され家畜としても扱われている。零位と一位はプラチナ級、二位と三位はシルバー級といったように一つの級に対し二つの位が当てはめられているのだ。そしてこの森に出現する魔獣は最高でも七位とされていたのだが、ここ数年犠牲者の数が増加しており、その中にアイアン級の冒険者も含まれていたことから彼らに依頼が舞い込むこととなったのである。知り合いが殺されているというのも理由の一つだ。

深夜、ローブの女性が起き上がり、少し離れた草陰に向かった。

俗に言う、お花を摘みに行くというやつである。事を終え、皆の待つ場所へと戻る途中、彼女は何かの気配に気が付いた。瞬時に思考を切り替え身構える。杖を持つてくるのを忘れたことに気が付いたが彼女にはこの場を切り抜けられる自信があつた。いざとなつたら叫び声を上げれば火の番をしている青年が駆けつけてくれるだろう。

そうして僅かに緊張しながらも油断せずにいたところ、がさがさとわかりやすい音を立てながら一匹の魔獣が現れた。女性でも簡単に抱えられそうな大きさ、暗闇でも輝くような大きな銀灰色の瞳、鼻先から腹まで雪のように白く、背中などは薄っすらと青みがかっている。足の先が靴下を履いているかのように白いのがなんとも言えず愛らしい。どこかの誰かは『子狐』と呼ぶような、可愛らしい魔獣である。その魔獣は彼女の前で恭しくお辞儀のような真似をしてみせた。そして呆気にとられた彼女の前でさらに驚くべきことが起きた。

「やあやあどーもごきげんよう！ ワタクシ白雨と申します。このような辺鄙なところで貴女のように美しい方に出会えるとは思いませんでした。人間の言葉で言うとな青天の霹靂とでも表せばいいのでしょうか、いえいえそんなありきたりな言葉では我が胸の衝動の半分も伝えられません！ とりあえず、お近づきのしるしにこの花を貴女に」

「あ、ありがとう……」

なんと魔獣が喋り始めたのである。魔獣は話し終えると後ろを向き、綺麗な赤い花を上手に指の間に挟みこみローブの女性に向かって差し出した。思わず受け取った女性は赤い花を見てまたもや驚いた。これは上級回復薬の原料となるレシュプリケーだ。これだけでもしばらく生活していけるほどの高値がつく。

「えっと、何をしてるんだ？」

すると突然寝ずの番をしていたマントの青年が現れた。彼は心配半分下心半分で彼女のことを気にしてやってきたのだ。そんな彼が目にしたものは、暗闇の中で花を差し出す青白い魔獣とそれを受け取る思い人。本当に、なにをしているのだろうか。

魔獣は人間のようにポンと手を打つような仕種をしてみせ、首をかしげた。

「そつえば、お願い事があるのでした」

ところ変わって野営地である。五人と一匹は焚き火のそばで話し合いをしていた。

「どうにも胡散くせえな」

「ま、そうでしょうね」

全身鎧の大男が唸るように言ったが小さな魔獣は気にも留めないようなあっさりとした口ぶりで答えた。

魔獣の話はこうである。ここ数年、余所からやってきた大きな『虎』が我が物顔でこの森を荒らしまわっている。なので人間にそいつを追っ払ってほしいというのだ。確かにその『虎』がやってきた時期と犠牲者が増えだした時期は重なる。しかし彼らが話している

相手は人間ではなく魔獣。すぐさま信用しろというのも無理がある話だろう。

そんな冒険者として一般的な考えを持つ全身鎧の大男とは違い、マントの青年と弓矢の少年はこのみょうちきりんな話に乗り気となつてしまっている。傷の男は何を考えているのか全くわからない。リーダー、つまりは責任者であるローブの女性は考える。

「流石のワタクシでも普段なら人間に声をかけるなどということはいたしません。ですが今は非常事態、なりふり構ってられませんよ、ええ。それとですね、ささやかですが報酬をご用意させていただきますました」

「報酬か」

「そうですとも！」

白雨と名乗った魔獣は鼻先でローブの女性の持つ赤い花を示した。心なしか、自慢げである。

「そちらのレディに差し上げた花を、そうですね、あと二本ほどでどうでしょうか」

「はあ？　んなしよばいもんで礼になるとでも思ってたのかよ」

もちろん全身鎧の大男はあの花の価値を知っている。これも交渉の手段の一つだ。

「おやまあお気に召しませんでしたか？　ならばワタクシからは以上ということで帰らせていただきます。このままあれの食事に毒を混ぜ続ければそう遠くないうちに死んでくれるでしょうね。相手も知恵は回らずともなかなかの実力者、もしや貴方様は臆病風に吹かれたのやもしれませんが、口が堅いワタクシは言いふらしたりは

しませんのでご安心くださいまし。ではごきげんよう、夜分遅くに失礼しました」

自らの命が関わることなだから魔獣が焦って報酬を増やしてくるだろうという男の考えとは裏腹に、魔獣は実にあっさりと背を向けて迷いなき足取りで森に戻ろうとする。これに慌てたのは他のメンバーである。

「待つて！ その条件を飲むわ」

「そうですか、それは僥倖。ワタクシも貴女方が依頼を受けてくださると信じておりました！」

「よく言うよ」

ロープの女性の声を聞くや否や、方向転換をし両の前足で頬の辺りを押さえてみせる魔獣のその変わり身の早さに弓矢の少年は思わず小さな声でつつこんだ。そしてその声を魔獣は無視した。

一呼吸置いて、魔獣は先程からじいつと見つめてくる傷の男に視線を返した。男は重々しく口を開く。

「ハクウといったか」

「はあ、少々発音が違いますがその通り、ワタクシは白雨と申します。それでなにか？」

「道案内を頼みたい」

「ええ、ええ、勿論です。ワタクシそのためにわざわざ皆様の前に姿を現したのですから」

姿を現さず誘導する、という手段もありましたがそんなものは義に反するというもの、罷か何かと疑われるのもいい気分ではありませんし、少々危険ですがこのようにワタクシ自らが案内させていた

だこうと思ひましてね。では準備が出来次第出発いたしましたでしょうか。そう言つて魔獣はふさふさとした尻尾を揺らして見せた。薄暗い森の中で白い手足が良く目立つ。

獣道らしい獣道を進む。道案内役として先頭を進む白雨は地表に飛び出した木の根を跳ねて乗り越えた。それなりに名の知れた冒険者である彼らにとつてもでこぼことしていて歩きにくい。少し先に見えるゆらゆらと揺れる尻尾を追いかけるようにして、五人はひたすら深い霧の奥へと進む。霧もやに包まれた獣道を青い炎がぼんやりと照らしていた。

「この青白い炎は何なんだ？」

「灯りです。我々の仲間の中にはこういうことが得意な連中もありまして、あの『虎』が夜でも困らないようにと命令してくるので仕方なくやつてるのです。まったく、夜目が効かない『虎』なんて馬鹿げた話ですよ」

振り向かずにいるため表情はわからないが、どことなく不機嫌そうに白雨は言う。そんな彼の揺れる尻尾を見ながら全身鎧の大男は考える。『虎』を倒したあとのことだ。彼はろくでもないことを考えていた。この珍しい魔獣をどうするか、だ。

人の言葉を解し、見た目も悪くない。捕まえれば貴族連中に高く売れるだろう。今は駄目だ。リーダーは許さないだろうし、報酬も受け取つてない。報酬を受け取った後にしよう。そうだ、捕まえたらあの花が生える場所を吐かせるのはどうだろうか。そうすれば自

分だけでも大金持ちになれるぞ。彼女も振り向いてくれるに違いない。

この男の思考を知れば白雨は『取らぬ狸の皮算用、いやいや狐の皮算用ですかねえ』と嘲笑するだろうが、しかし彼は彼なりに考えていた。ろくでもないかと表現したが彼の考えは冒険者としては当たり前のことであり、むしろ僅かなりとも白雨、つまり魔獣を個として認識している他の四人のほうがおかしいのだ。この世界で暮らす人間たちは普通、魔獣を心あるものとは考えない。それは魔獣が人を襲うものであり、血縁がある個体同士でも殺し合いを行うこともあるからである。

そう、言われているのだが、ここだけの話、魔獣同士の縄張り争いは人間が居ないときは簡単な威嚇だけで終わる。食料なんぞ何もなくても転がり込んでくるため、わざわざ怪我をしてまで広い縄張りを維持する必要はない。つがいの相手を探すときだけは取っ組み合いの喧嘩をすることもあるが、それでも殺し合いとまではいかない。

話が変わるのだが、この世界にはダンジョンと呼ばれる魔獣たちが暮らす場所がある。基本的に彼らは生まれた場所から動かない。ならば何故冒険者と呼ばれる連中がわざわざ危険地帯に踏み入るのかといえば、単純に、儲かるからだ。今から数百年前の話、平民に生まれたからには平民として死ぬ、それが当たり前だった。その常識を覆したのはある一人の平民の男である。彼はダンジョンから持ち帰った古代の秘術書を用いて大国の主になってみせたのだ。まあ、彼についての話は今回はここまでにしておこう。

話が逸れたが、とにかくダンジョンの中には植物だか動物だかよくわからないものがあちらこちらに存在し、そしてそれは多種多様

で、ある種族は細長い葉を持つ植物らしきもの、またある種族はへその緒がどこかと繋がっている動物らしきもの、とそれぞれの魔獣に対応した種類のものを食べる。さらに、それらの食料は同種のなかで共有のものとしているため殺し合いなどは起きないのである。そもそも戦闘中の二匹が両方とも魔獣、というわけでもないということに人間は気が付かない。その存在のことは魔獣たちが徹底的に隠しているからだ。

ここで場面は五人と一匹に戻る。ぽつぽつと冒険者からの質問を受けて、沈黙。それから一刻も経たぬうちに先行する白雨が立ち止まった。彼は何かを確かめるように地面の匂いを嗅いでいる。顔を上げて真剣そうな面持ちで冒険者達を見たが、どうにも鼻先についている土が緊張感を欠いているように思えて仕方がない。

「ああ、もうすぐですね、このまま真っ直ぐ進めば『虎』がいびきをかいて寝ているでしょう。しかし、油断してはいけませんよ。寝たふりです、あれは臆病なことに食料を集めるために護衛が減る時間帯は寝たふりをしているのです。普段は最強を名乗っているくせにね。でかいなりして小心者なんですよ。いつそのこと普通に起きていたらいいのに」

護衛はワタクシがどうにか引きつけておきますので、あれのことはお任せします。終わったらまたここに来てください。ではご武運を。そういつて白雨は音もなく暗闇に消えた。話の内容はともかくとして、最後まで鼻に土が付いたままだったのは白雨なりのボケのようなものだったが、別段面白くもなともなかった、というか場が白けるばかりだった。彼には笑いの才能はないのだろう。そんな彼を見送った後、冒険者達は気を引き締め慎重な足取りで奇妙な青い光が照らす獣道を進む。虫の声も聞こえない、静かな夜だった。

2・ひとつのおわり

冒険者たちが『虎』と激闘を繰り広げているあいだ、鼻に土をつけたままだった白雨はもそもそと物陰で顔を洗った。戦況は冒険者たちの圧倒的優位であり、軌跡でも起こらないかぎりは『虎』の勝利はなさそうだ。冷静に現状を観察しながら、白雨は複雑な気持ちで成り行きを見守っている。

前回の話では主人公のはずがまるでモブキャラクターかなにかのような扱いだっただが、何を隠そうこの物語の主人公は『白雨』である。ふさふさでつやつやの気品のある毛並みが自慢の年若い、というか十も生きていないくらいの幼い魔獣だ。幼少時は色々あったが、今は魔獣生活を前向きに楽しんでいる。

ここで唐突にネタばらし。実はこの白雨こそが森の騒動の元凶である。ここで実際に大勢の冒険者を殺していたのは彼だ。理由はある、あるのだ、そう、あるのだがしかしそれは被害者や遺族にとっては知る由もない。『虎』にとってもまたしかり。

さて、この冒険者たちが『虎』に負ければ白雨が美味しくいただく予定だったのだが、これはどう見ても人間側の勝利しかありえない状況だ。

白雨はじつと戦闘中の一匹と五匹を眺めている。護衛を引きつけるうんぬんは何だったのかって？ そんなのは全部嘘だ。他の種族ならともかく、この『虎』は群れを作らない、例の平べったい顔の魔獣の突然変異種なのだ。身体の大きさや膨大な食事量から、基本的に臆病な同種族の連中に嫌われていた彼と親しくしていたのは白雨くらいのものであり、『虎』は白雨のことを友達として慕っている。

た。今も慣れないながらも必死で戦いつつ、白雨が助けに来るときを待っている。

しかし白雨は動かない。白雨は彼にとっては重要な理由があるにしても、客観的に見たら何の罪もない友達を自らが引き起こしたことに巻き込んで殺そうとしている。そのくらは簡単に出来るあたり、彼は実に人間らしい理性的な魔獣だと言える。

暗い暗い森の奥、耳をつんざくような断末魔が響く。白雨はぱちりと一つ瞬きをして、とりあえずさつき人間達と別れた場所へ向かうことにした。『虎』のことは今は何一つとして考えていない。

「『虎』の討伐、ご苦勞様でした。さてさて、とりあえず、皆様の野営地へと向かいましょうか。どうやらお疲れのようですし、ワタクシは太陽が真上に昇るとき、もう一度来ることにいたします」

分かれ道の目印でもあった切り株の上、白雨はびよこんとお辞儀をした。ご苦勞様などと上から目線なのはキャラクター作りという名の仕様である。冒険者たちは何も言わない。いや、正確には疲れと眠気で何も言えないだけだ。白雨の足取りは軽く、冒険者たちの足取りは重く、五人と一匹は元来た道を戻る。結局、彼らが野営地に辿り着いたのはすっかり夜が明けたころのことだった。

白雨は冒険者たちのもとを離れ、再び例の『虎』の眠る地へと向かった。森を照らしていた青い炎はすでに消え去っている。あれは白雨が作り出した人間のための幻影だ。つまり、五人と一匹は暗闇の中を進んでいたのだ。つまりは『炎があるのだから明るく見えるに違いない』という思い込みにより、人間たちは本来まともに見えないはずのダンジョンの夜をやり過ごしたのである。

激闘の痕が無数に存在する空間、白雨はひっそりと投げ捨てられた死体を見て首をかしげた。毛皮も剥がされていないし首も取られていない。彼らは迂闊なことに依頼を達成した証拠を持ち帰らなかったのだ。白雨は少し考えて、彼らに死体の首を届けることにした。そのためには、まず首を刎ねなくてはならない。

白雨は氷の刃を用いて首を刎ねた。そして切り口から血やら何やらが零れないように焼いた。ついでに死体の余った部分も焼いた。黄緑色の巨体は見る間に黒い炭の塊となった。もう一度切り刻んでまた焼いてから土に埋めた。墓標はない。

怪しげな青い炎が揺らめく。これは幻影ではない。白雨はその、ふわふわと浮かぶ十個ほどの狐火を尻尾の中にまとめて仕舞い込んだ。ことは全部、人間がいなくなっただけだ。

ここでいきなり数時間後。日はすでに天上でその存在をこれでもかと言わんがばかりに主張している。要するに人間の言葉でいえば正午、つまりは約束の時間だ。

これだけ日が照らしているのにもかかわらず、森の中はうすら寒い。一部寝不足で目の下に隈を作っている者もいるが、とにかく町に戻る準備を終えた冒険者たちが待つ場所に、白雨は森の奥から悠々と歩いて姿を現した。ずるりずるりと少し目玉の飛び出した『虎』の首を引きずっている。そうして冒険者たちが立つ場所、そこから少し離れたところに青白い魔獣は黄緑色の首を転がして居住まいを正した。その頭部は宙を空虚な瞳で見つめており、ざらざらとした

紫色の長い舌はだらりと口の端から零れ落ちている。

「遅くなりまして申し訳ございません。言い訳をさせていただけるのであれば、貴女方の話ではワタクシどもとは別口の依頼を受けていると聞き、それでは依頼達成の証拠となるものが必要なのではないかと愚考したわけでありまして、それならば、と少々仲間たちの力を借りてこれを選んできたのですが、もしや不要でございましたか？」

「いや、助かった」

冷静に答えられたのは傷の男だけである。他はみな、小さくて可愛い非力そうな魔獣がこれまた大きな酷い形相の『虎』の首を引きずりながら現れるという衝撃的な光景に多かれ少なかれショックを受けていた。そんな彼らを気にも留めず、白雨は傷の男に約束の赤い花を二輪差し出して別れの言葉を告げた。その声を受けた冒険者たちは混乱の中でも大きな『虎』の首を忘れずに抱え、ダンジョンの入口を目指して歩き始める。その姿を青白い魔獣は無感動に見送った。じわりと魔獣の影が滲む。

獣道を黙々と歩き続ける冒険者一行は疲れもあいまって雰囲気は重い。そんな中で空気を変えたのは全身鎧の大男だ。冗談を飛ばし明るく笑って用を足すためだと言って仲間たちから離れた。もちろん嘘だ。彼は白雨を捕まえるために元来た道を戻る。目標はすぐに見つかった。土の上ではよく目立つ、青白い毛並みの小柄な魔獣は湖の畔でぼんやりと水面を眺めているかのように見えた。これを好機とみた男は巨体や装備に似合わない素早い動きで音もなく忍び寄り、勢いよく襲いかかる。それでも白雨は動かない。

捕まえた、と思った。でも、それは、本当に？

またも場面は変わる。今回の依頼で四人組となつてしまった冒険者たちは黙々と歩いている。思い返すのは深夜の戦いで亡くなった全身鎧の大男のことだ。彼は五人の中でも年かさで、村では次期村長として扱われていた。しかし血氣盛んで自己顕示欲の強い彼はその立場を弟に譲り出奔した。

ローブの女性とマントの青年、弓矢の少年は昔から仲の良い幼馴染だった。彼らは大男を追うかのように村から飛び出して、それなりに苦勞しながらも冒険者業を続けていた。そしてある日、冒険者ギルドで単身ながらも活躍していた彼と偶然の再会をする。大男を仲間に加えてますます彼らの立場は強固なものへとなつていった。ただ一人同じ村出身ではない傷の男は、下手を打って死にかけていたとき彼らに助けられたことで仲間となつた。

大男は、少々目先の欲望に弱いものの、面倒見のいい剛毅な男だった。彼の明るさに皆が救われた。そんな彼は『虎』との戦いで帰らぬ人となつた。彼は『虎』の攻撃を受けて谷底に落とされたため、形見はない。レシュプリケーの花を三本も拾えた幸福も、それが彼の死によつてもたらされたものならばそんなものはいらないと叫びたかつた。それでも冒険者たちはまっすぐ歩いた。何も考えずに歩いた。何も考えなくなかつた。彼らの胸の内では、冒険者になりたてのころに聞いた、冒険者という職業の危険さを説いたギルド長の言葉がぐるぐると回り続けていた。

ところかわって湿地地帯、大男に襲われたはずの白雨はというと、彼は叩き割った頭蓋の中身をのんびりと啜っていた。決して美味しくはないが不思議と食が進む味だ。そう、それはまるで『ジャンクフード』みたいな。脳みそ、心臓、脊髄、肝臓。記憶にある、人間の重要そうな臓器は大抵喰らった。美食家を自称する白雨は胃腸の類は口にせず、残った部位はその辺に放置しておくことにする。これらは他の魔獣が片付けてくれるだろう。剥いだ殻、もとい鎧は適当に磨いて仕舞い込んでおこう。何かの役にも立つかもしれない。

口元を濯いでからもう一度、白雨は赤く染まった水面を覗き込んだ。波打つのをやめた水面は彼の幼い顔立ちを映している。ついでに毛づくろいを終わらせた白雨は例の湖に移動して、静かに前足から水面に沈んだ。彼にとっては当たり前のことだが、水底に白雨の姿はない。

ここは水底、正確には水の鏡の向こう側、人間側からすればダンジョンの中核、本来の意味は『いのちのぼしょ』のひとつ。天に日は無く、かわりに月が光を放ち、地面は透明で足元には空が見える。

「終わったんですね」

「勿論さ。そのくらい、出来て当然だよ」

くわあ、と音が聞こえそうなくらい大口を開けて白雨は欠伸をした。彼の周りには青い炎が浮いている。そしてその炎はゆらゆらふ

らふらと、白雨の会話相手である『山羊』の背後にある大樹の洞に分散しながら吸い込まれていく。そのたびに大樹全体が淡い黄緑色の光を放ち、ひとつ、ひとつと新しい花が咲く。これらはやがて実を結び、いずれ母の胎に還る。

魔獣に寿命はない。毒も効かなければ身体的な病気もしない。心を病むことや、ダンジョンの外に住む魔獣は飢えて死ぬことはある。寿命がない、しかも魔獣同士で争わないとすれば個体数は増加する一方かと思われるが、実際は滅多なことが起こらない限り一定の数を保っている。その理由はこの『いのちのばしょ』にある。

いのちとはなんだ。いきるとは、しぬとはなんだ。その答えのひとつがここにある。魔獣にとっての命とは世界だ。世界の欠片、わかりやすく言い換えると『魂』が器に入っていれば『生きている』し、逆に抜け出していればそれは『死んでいる』のである。たとえばその器が肉の身体であるか土の身体であるかなんて関係がなく、どれも平等に『いのち』でしかない。

個体数を調整する理由、それは世界の欠片である魂、つまりは元々の素材の量が限られていることにある。

この大樹は世界の枝の一部だ。『いのち』を生み、『いのち』を壊し、また新しい『いのち』を生む。普段魔獣たちが食べている植物だか動物だかよくわからないものはすべてこの大樹の末節であり、この食物を通して個体数の管理が行われる。具体的には生殖行動の抑制だ。一つのダンジョンに一本だけ存在し、ダンジョンの管理者たる主、これを魔獣たちの言葉で奥守という、ついでにいうとこの森では『山羊』だ、その奥守の一族が常に気を配り皆が穏やかに暮らせるように大樹の世話をしている。数の調整に人間を使うこともあるがそれは使い方の難しい手段、しかし今回の件はそれを使わず

るを得なかった。

『虎』となった魔獣がいる。彼は、彼らは、不幸にも胎の中にいるときに冒険者によって母親が殺された。生まれる前に死ぬはずだった胎内の兄弟たちは突然変異を起こし、『いのち』を繋ぎ合せ一つの個体となった。そして彼は母親の死体の中から生まれたのだ。

彼が死ななければならなかった理由はその食事量にあった。兄弟全員併せて六匹分、を遙かに通り越して六十匹分。それも朝昼晩と一日三回。言っておくが、単位は彼と同じ種の魔獣が一日に食べる量だ。つまりは一日で合計五百四十四匹分の食料を消費するのだ。食料の再生なんて追いつくわけがない。小さいころはそうでもなかったのだが、つい先日になるとこのありさま。このままでは彼の同種が絶滅してしまう。だから彼は死んだ。殺された。

魔獣同士は殺し合いが出来ない。本能的に止めをさせないようになっている。『虎』の元々の種族は魔獣の中でも最下層に位置するが、『虎』自体には六匹分の可能性があり、また白雨はこの森では最も戦闘能力に優れているとはいえ、まだ生まれてから数年しかたつておらず、加えて例の『虎』とは友好関係にある。友達に裏切られた怒りで別種に進化されるのも困る。そうしたことを踏まえて彼らは人間を使うという手段に踏み切った。

「……申し訳ございません」

「いきなりなんなの」

「白雨さまに、あの子を殺すように誘導させてしまつて」

「そつか、そのことね。だいじょうぶ、わかつてる。最初から全部わかつてたんだ。誰かがやらなくちゃいけないことだつてこと。んで、それがオレだつたつてことも。この森で人間と会話できるのつてオレぐらいだし」

あいつも人間じゃ行けないところに巣を作るからそこだけはちょっと面倒だったけど、あいつも人間も笑えるぐらい簡単にオレの作戦に引っかけたしてくれたから楽っちゃ楽だったよ。そういつて白雨はなんでもないように笑う。実際はどうであれ、上に立つ者が動揺するわけにはいかない。白雨は精一杯見栄を張っているが、ひとりになったあとで泣くのだ。

「陽樹」

「はい」

「これが旅立ちの試練だったんだろ」

白雨は自分より遙かに大きい陽樹を真っ直ぐに睨みつけた。白雨は陽樹の膝くらいの高さしかない小さな魔獣だ。しかしそれは彼らの上下関係を覆すことにはならない。現に白雨の視線は、殺気は、そして神気は陽樹に畏敬の念を抱かせるには十分すぎるものであった。陽樹は三皇の一族が目覚める場面に立ち会わせられた僥倖に感謝した。そしてある種の喜びに打ち震えながらかすれた声で言った。

「仰るとおりです」

「ということは、これからオレは旅にでなくちゃいけないわけだ」

「そうなりますね」

「目的は知識の蒐集、彷徨える魂の回収、及び『招来の書』の搜索」
「はい」

これでいいんだよね、と白雨は頷いた。そしてもう一度、自分に言い聞かせるように目的を声に出して言った。沈黙が広がる。

「ところで迎えっていつ来るの？」

「そうですね、ざっと二週間後ですか」

そんなにかかるのかと驚く白雨に、あの冒険者たちが町に戻らないとランクの低い冒険者はこの森に入れないということを陽樹は言っ
て聞かせた。この森から一番近いギルドは成人した人間が休憩を挟み
つつ歩いても三日もかからないくらい近場にある。二週間という
のは討伐完了の情報が入るところに伝わり、この森の封鎖を解
くための書類などを作成し、さらにそれを本部に送るまでの時間だ。
その二週間を、白雨はこの森をすべて知るために使うことにした。
森で過ごしているあいだ、一度として『虎』のことを忘れたことは
なかった。

3・先行き不安

人間がシुकレクビスの森と呼ぶダンジョン、入り口から少し歩いたところにある教会に白雨は居た。彼は今、十に満たないくらいの人間の子供の姿をしている。少し釣り目がちの意志の強そうな銀灰色の瞳、薄青色の髪は肩につくつかないかといったくらいの長さで切りそろえられており、水干のような衣装を身に纏った、黙っているだけでも気品が滲み出る、文句なしの美少年だ。そんな彼は不機嫌そうに細い眉を顰めている。美人が怒ると怖いとはよく言われることだが、その例に漏れず白雨の周囲の雰囲気はどうにも息苦しいものとなっていた。そんな彼の横で、着物を身にまとった陰のある美しい女性がおろおろとしている。

「……迎えはまだ来ないの？　もしかして、寄り道してるんじゃないだろうな」

「確かに彼は少々素行に問題が見られますが、流石にそれはないかと」

「問題？」

「のんびりやなんです。それも、超がつくくらいの」

「えーと、ほんとにそいつで大丈夫？」

こんな重要な日に遅刻するような相手だ。白雨の疑問も尤もである。

「まあまあそう仰らずに。念のためもう一度、設定を確認しましょう」

「……なんか誤魔化されてる気がする。べつに、いいけどさ」

それでは改めまして、と人の姿を取っている『蛇』は居住まいを

正した。その拍子にネリアウルジュ教の聖者であることを示す烏帽子がずれる。

「こほん、それではあなたのお名前は？」

「ハクウ・テーテ。迎えが来てからはハクウ・テーテ・カフカ」

ハクウが個人名、テーテはネリアウルジュ教の修道士であることを意味し、最後のカフカはこれからやってくる男の家名となる。ハクウ・テーテは魔獣の襲撃によって両親をなくし教会に預けられた哀れな子供、そういう設定で白雨はある商人の養子という形で人間のところに潜り込むのだ。たったそれだけの、じつによくある話である。

「確認ついてもさ、新しく覚えなくちゃならないのは名前くらいのものだろ」

「まあ、そうなんですけどね」

『蛇』は首をすくめた。そして手持ち無沙汰に聖書を弄んでいる。

ここで唐突にこの大陸の宗教について説明しよう。ここではマーシラクエルト教という一神教とネリアウルジュ教という多神教の二つが一般的だ。主に武断派の王侯貴族やほとんどの冒険者はマーシラクエルト教を信仰し、逆に穏健派の王侯貴族ならびに平民の多くがネリアウルジュ教を信仰している。

マーシラクエルト教は人間の英雄を偶像化し、かつ、魔獣を絶対的な悪とする宗教だ。この宗教の信者は積極的にダンジョン、つまりは魔獣の巣に侵入してくる。正直鬱陶しいことこの上ないが、しかし悪である魔獣というわかりやすい標的があるために信者の数はじわじわと増えていつている。たしかに移動型の魔獣は人の住むと

ころも通過するが、後述するネリアウルジュ教の教会があるところは避けて通るのだ。つまりは魔獣よけの魔方阵があれば襲われる心配はない。

だというのに、マーシラクエルト教の熱心な信者はやたらにダンジョンへの襲撃を繰り返し、その結果仲間が殺されて、また魔獣への憎しみを燃やす。負の連鎖だ。冒険者の事情は少し異なり、マーシラクエルト教に入信もしくは改宗するとダンジョン攻略時に支援が受けられるため、半分以上はその支援を目的としている。

一方、ネリアウルジュ教は自然崇拜の流れを汲む、魔獣とはほどほどに距離を取り続けようという宗教である。すでになんとなくわかるような話で恐縮だが、この教団のトップは人に化けた魔獣であり、魔獣たちはネリアウルジュ教というツールを使い人間に干渉しているのだった。この教団は異端という名の科学者を消し去り、文化レベルを中世あたりに設定している。その理由は『わからないことが多いほうが自然への畏怖を忘れない』からである。自然、つまり世界への畏怖は祈りとなり、形のないものが形を作り、やがては世界の欠片を生み出すことに繋がる。つまりはよくわからないことが魔獣たちの魂を作り出しているのだ。

突如、静かな教会にノックの音が響く。待ち人來たれり。白雨と『蛇』は扉を見た。ぎい、と音を立てて扉が開く。そこに立っていたのは右の目元に泣き黒子のある桃色の髪を持つ色男だ。しかしその色男は本人には似つかわしくない地味な衣装を身につけ、気が抜けたような、なんとも幸せそうな表情をしている。よく見れば頬は薄っすらと赤く、呼気には酒精が混じっている。明らかに酔っ払いだ。危なげな足取りで二人のもとにふらふらと近寄ってくる。

「すみませーん、おくれましたあ」

「ちょっと遅すぎじゃないの。約束は朝、もう昼も過ぎてるよ」
「ああ、人間の話に付き合ってたらつい」

ほやーんとした雰囲気で答える迎えの男に、白雨はおもわずいらついた。ひとを待たせといてなにやってんだよ。

「ほ、ほら、まずは白雨さまに自己紹介なさい」

「ああ、そうでしたねえ。ええっと、僕は土岐有司です、あれ、人間の姿をしているときの名前はなんだっけ、うーん、たしか……そうだ、ネイアです、ネイア……」

「……ネイア・リチット・カフカです。白雨さま」

うんうんと唸っても名前が出て来ない。結局『蛇』が代わりに彼の名前を言うまですっと悩んでいた。

「リチットってことは商売やってるんでしょ？　こんなんで大丈夫なの？」

「だいじょーぶだ、もんだいないー」

けらけらと楽しそうに笑うネイアとは対照的に、半目となった白雨はぺしりとネイアを右手で叩いた。その拍子に獣の耳が飛び出るついでに尻尾も。三角の朱色の耳、しゅつとしたしなやかな尻尾、それらはすべて、彼が『猫』の一族であることを示していた。

「……駄目だろ、これ」

「それはあ、他でもない白雨さまに触れられたからですよー。いやん」

「えーと、そうなの？」

白雨はネイアではなく『蛇』に尋ねた。この『猫』に話しかける

気力はなかった。

「そうですね、白雨さまは天狐族でいらっしゃるので」
「あ、そうか。こういうのも『嘘』に引つかかるんだ」

白雨は納得して頷いた。天狐族は嘘を操る一族である。左手で嘘を作り出し、右手で真実を照らし出す。また、月を尊び、日々に疲れたものに悠久の眠りを齎す、いわゆる死神のような役割も担っている、世界の探求者だ。

「これからしばらく人間の中で暮らすんだから気をつけないと」

「流石白雨さま、ご立派な心がけです」

「こんなの、別に普通のことだよ」

「じゃーそろそろ行きますかあ」

「おまえ、ほんとに……いや、もういい」

あまりにも空気を読まないネシアに白雨は諦めた。こうしてこの日、魔獣のなかでも三皇族と称される三種族、その一つである天狐族の中でも特に優れた能力を持つ、月乃宮家の跡取り息子である白雨はちよっぴりおとなになった。

「まあ、有司だっけ。しばらくのあいだ、よろしく頼む」

「はい、よろしく願いされましたー」

「……今からでもチェンジって可能かな？」

「残念ながら……」

世界なんてものはわりとこんなもんなのである。

白雨、いや今の名はハクウだったか、ともかく彼らは走っていた。理由はない。あえて言うならハクウが生まれて初めて草原を見たためにテンションが二次関数ばりの勢いで急上昇したからである。真っ白な雪原に足跡をつけたがる子供のごとく、ハクウはぴょんぴょんと跳ね回っていた。時折なぜかムーンサルトも交えながら、それでいて速度も落とさず、そりゃあもう嬉しそうに音もなく走っている。本当は変身を解いて四本足で走りたいがそこは流石に自重した。しかし速度は自重していない。

「ちよっ！ まっ！」

「ええーなにー？ 全然聞こえないよー！」

教会に住む子供たちが作ったハンカチやポプリなどが大量につまっている荷物を背負いながらも笑顔で走り続けるハクウ。彼はまだ十年も生きていないのだから年相応というべきであろう。そのうしろでネイアは青い顔をしている。お酒を飲んでから全速力で走るとか、ねーよ。こども特有のよくわからない行動に振り回された彼は、ついに立ち止まって吐いた。それに気が付いたハクウはバックステップでネイアのそばに戻ってくる。

「はは、悪い。つい、月も出てたからさ」

「悪いと思うならおんぶしてください」

「嫌だ」

「じゃあ横抱き」

「死ね」

「そんな、ひどい」

ネイアはしなを作りながら青い顔で言った。完全にどや顔である。

どうやらボケられる程度の元気は残っているようなので、ハクウはネイアを背負いながら近くの村へ向かった。背中を空けるために荷物を前に回したところ、荷物が邪魔で真っ直ぐ前を見れない。それでもハクウは諦めずに歩いた。訂正しよう。全速力で走った。ジェットコースターばりの勢いで走った。その結果、彼らは夕方ごろに教会を出たものの、それから一刻も経たないうちに大きな農村にたどり着いたのである。

どうやら門は閉まっているようだ。無理もない、すでに日は落ちていて。よく見れば、門番らしき人影がある。とりあえず、ハクウは人影に話しかけてみることにした。まったくもって、ネイアは役に立たない。

「すみません、今から村に入らせていただくことは可能でしょうか」
「こんな時間にどうしたんだ、見ない子だね。ん、その、きみが背負っている人は……」

もしかして、というような雰囲気だ。おそらくネイアの知り合いだろう。彼の瞳には親しげな感情が浮かんでいる。こういうときこそネイアの出番だと思っただが、しかし奴は意識が飛んでいるために、かわりにハクウが答えることにした。

「義父です。ネイアさん、えつとネイア・リチット・カフカという名前だと聞きました」

「ああ、ネイアくん。となると、きみが彼の新しい家族なんだね。はじめまして。ところで、彼は大丈夫なのかい？」

「駄目ですね。酒が回ったみたいです」

一番駄目なのは頭だと思ったが、ハクウは口には出さなかった。村の入り口で門番をしていた中年の男性はなんだか困った顔をして

いる。

「ネイアくんが養子を迎えると聞いてね、ついお祝いに、と酒をすすめてしまったんだ」

「そうだったんですか？ 約束の時間は朝だったのに、全然迎えに来てくれなくてちよつと不安になってしまいました」

複雑そうな顔をしてと笑って見せれば、男性は善良な人物らしく、自分も悲しそうな顔をした。自分がネイアに酒を飲ませたせいで悲しい思いをさせた少年と話しているのだから、まあ普通の人間の反応である。

「ごめんなあ。ところできみはいつごろからあの教会にいたんだい？」

「赤ん坊のころからだと聞いています。両親は魔獣に襲われたらしくて……」

しゅんと暗い顔を作る。男性は地雷を踏み抜いたかのような慌てぶりではばらなくなにか言いたそうにしていたが、やがて深々と頭を下げた。

「本当にごめん。なんだか悪いこと聞いちゃったな」

「いえ、全然覚えてないので平気です。ところでなんでそんなことを？」

「あの教会できみに会った覚えがなくてね」

あたりまえの疑問だ。ハクウは三日前に初めて教会に足を踏み入れた。だからそんな質問も想定内。初めてダンジョン内でアイテムを販売する小人役をやったときに怖い人に追い掛け回されたから、シスターが心配して外に出さなかったのだと答えた。ハクウは幼い

ながらも美貌と呼べるだけの風貌を持っているため、すぐに彼も気が付いたようだ。

「それからずっと、教会の中で生活していましたから」

「……いや、それでも一度も会わないってのはおかしい。私は礼拝の時間に教会に来たことがあるが、きみの姿はなかった」

「はは、いやですね。ちゃんと思い出してくださいよ。オレたち、会ったことありますよね」

言いながらハクウは左手を強く握り締めて相手に視線を合わせる。目の前の男性は一瞬虚ろな目をして、そしてすぐに何かに気が付いたかのように、『そうだね、そうだった、忘れてたよ。年を取るって怖いなあ』と言って苦笑いした。

「ええと、そういえば、きみの名前を聞いてなかったね」

「ハクウ・テーテです。……今日からは、ハクウ・テーテ・カフ力ですけど」

「ハクウくんか、いい名前だね」

「ありがとうございます。あの、それで、その」

「ん？」

「あーもう、無理だ、落とす」

どさつ。ハクウはネイアをまるで落としたかのような動きで放り投げた。重いんだよ馬鹿。

「お水、ここに置いとくね」

「何から何までありがとうございます」

「元はと言えばうちの父さんがお酒を飲ませすぎちゃったせいだし、気にしないで」

「それでも、ありがとうございます」

「礼儀正しいのね。それにかっこいいし、将来が楽しみだわ」

今のうちにつばつけとこうかしら、なんて楽しそうに笑いながらそばかすのある少女は部屋から出て行った。あとに残されたのはベツドの上でぐったりしているネイアと、枕もとの椅子に座って黙々と黄色い果実の皮をナイフで剥いているハクウの二人である。

「ほら、これ食べたら具合よくなるぞ」

「いやや……リトリピーネってすっぱいもん……」

「ずべこべ言わずに食べよ」

問答無用といわんがばかりにハクウはネイアの口に皮をむき終えた果実をぶち込んだ。成人男性が語尾にもんをつけるのは許されるのだろうか、いや許されない。許されないのだ。今回ばかりは魔法の呪文、『ただしイケメンに限る』は通用しない。

「んで、これからどうすんの」

「あー……とりま首都行きーの、図書館行きーの、旅に出ーのってかんじ？　みたいな」

「まともな言葉を使えよ。別にいいけど。でも図書館が、それぐらいすでに母さんが行ってるんじゃないの？」

「のんのん。王立じゃなくて私立のやつがつい最近建てられたんですよ、マジで」

甘いな、といわんがばかりに首を振ってネイアは説明を始めた。ちよくちよく脱線しながらもなんとか話を誘導し、聞き取った内容

を要約すると、先月、リジリプシーズ公爵が趣味で集めた本を一般向けに開放する施設を作ったということらしい。入場料がいくらかかかるものの、なかなか専門的な技術書やマニアックな娯楽小説も収監されているとか。

「なんていうか、趣味に走ったものが多いってことかな」
「現公爵は主流派からずれてるんですよね」

そういうところ、嫌いじゃないぜ、きりつ。自分で効果音を言うなよ。そんなぐだぐだな雰囲気で月乃宮白雨、もといハクウ・テ・テ・カフカの旅は始まったのである。

4・人間の村

ハクウの旅の二日目は、土下座した男を踏み潰すことから始まった。別に踏もうと思っていたわけでもなんでもなく、朝起きてベッドから降りようとしたところに男がひれ伏していたというだけの話である。踏み潰した生暖かいものの感触を嫌うように飛びのいたハクウは、何も言わずにスルーしようかと思ったがやっぱり気を取り直してネイアが土下座している理由を聞いてやることにした。

「ネイア、いきなりなにしてんの？ 流石のオレでもドン引き」

「申し訳ございませんでしたあ！！」

「何について謝ってるのか、さっぱりなんだけどな」

「そりゃもういろいろです」

猫耳もへんにやりとさせながら延々と謝り続けるピンク頭の男に、ハクウは一つため息を吐いて許すことにした。そもそも呆れてはいるが別に怒っているというわけでもないのだし、こうして土下座されている姿を人間達に見られるのも気まずい。

「ほら、もういいから。耳も尻尾もしまつて。もうすぐ人間がやってくるよ」

「ありがとうございます！」

まったくもって、駄目な忍者である。

「ネイアはさ、なんで有司って名前を使わないの？」

そういえば、と明らかに今思いついたような顔でハクウは尋ねた。現在二人は部屋に持ってきてもらった朝食を食べている最中である。ユーシってのはそんなに目立たない名前だと思うけど、とも付け加えながらサラダを突つつく。ハクウにも見覚えのある黄色い葉っぱだ。これはちよつと苦くて酸っぱい。大人味である。

「それはですね、実は僕、三回目なんです」

「ふーん。でも三回とも同じ名前でもいいんじゃないかな」

「確かにそうなんですけど、こういう偽名って、なんだかわくわくしてきませんか？」

オレはそうは思わないなあ、と興味なさげにしながらも、ハクウはさりげなくネイアの分のサラダを取り上げた。どうやら気に入ったらしい。三回目、というのは『とある人間の一生を演じること』を三回繰り返ししているということだ。ネイアの場合、彼の親族が立ち上げたカフカという一族のなかですでに二回分の人生を終わらせていて、今回もまたカフカ家の子としての人生を生きている。

カフカ家は表向きは行商人の一族である。これは老いで死なない魔獣がどこかに定住するとなると色々誤魔化しにくいことが深く関係している。本質は先も述べたとおり、忍者だ。彼らは各地の人間の情報を集め魔獣たちにそれを伝える、メッセンジャー的な役割を果たしているのだ。

魔獣の強さは基本的に魂の濃度に比例し、その中でも特に濃密な魂を持つのが三皇族と呼ばれる三つの種族である。月を尊ぶ天狐族、

太陽を崇める天狼族、海に帰依する天狸族の三種だ。彼らは魔獣たちの巢を主な生活の場とし、神の僕として様々な奇跡的なことに関わっている。そのように強大な存在であるため、三皇族は個体数が少ない。

また、彼らとは対照的に人間のそばで暮らしているのは地猫族だ。彼らは魂の密度は三皇族や奥守たちよりもいくらか魂の密度は小さいものの、かなりの知能を持ち、そしてなにより多数である。地猫族はその類稀なるコミュニケーション能力と変身能力を生かし、内側から人間をコントロールする技術に長けている。そのかわりというてはなんだが他の魔獣と比べると戦闘はあまり得意ではない。以上の四種族は種族固有の食料を持たず、様々なものを食べて生きているのである。だからこそ人間社会でも生きていけるのだが。

「ところで、もう酔いは抜けたんだよね」

「ええもう綺麗さっぱり。白雨さまに荷物を持たせてしまつて申し訳ございませんでした。今すぐしまいますから」

サラダのない食事を終えたネイアは、昨日は酔っていたせいで上手く発動できなかった反転収納の術を使い、教会の子供たちが作った品々をしまった。この術は身体の内側、とはいっても実際に体内にしまうのではない、に異次元的な空間を創造し、その中に様々なものを収納できるというものである。このときに使用するスペースは、人間の場合本来魔法回路があるべきところであり、この術を使うにはまともな魔法を使うことを諦める必要がある。もちろん、我らが魔獣はデメリットなしで使える。人間がなにかものを異空間に隠したとしても、魔獣にとっては隠しているうちに入らない。

ハクウがこの術を使わなかったのは、彼がテーテの名を名乗っているからである。修道士、いわゆる僧侶は魔法職に分類される。そ

んな職業についているのに反転収納の術を使えるなんてことに気付かれたら面倒なので、彼は荷物をふつうに背負ってきたのであった。

ハクウが人間には出せない速さで走ってきてしまったことも理由の一つだ。ネイアが村から出てきたのは太陽がすっかり昇ってしまったあとであり、時間的なことを考えると村の人間たちはネイアが教会に泊まってくるだろうと思われていた。人間の足では二刻ほど進んだところにシुकレクビスの森はあるのだが、魔獣は裏道を使えるために村を出てから教会につくまでのタイムラグは半刻ほど思っている。しかし彼らの考えとは裏腹に、ネイアたちはその日のうちに帰ってきたのだ。そこでハクウは『ネイアが約束の時間になっても来ないので、ハクウも森から出てしばらく歩いてきていた』という設定を採用した。

魔法回路の抽出はネリアウルジュ教の大教会で行われている。すでにご理解いただけたと思うが、そもそもこの術は人間の力ネを抑えるために、魔獣が使っている術を人間が使える程度にまで性能を下げることで作り出した魔法である。

つい最近までは戦士職は生存維持に関わる魔法回路の基礎だけを残し、それ以外のものは取り払うのが一般的だったが、研究の結果、今まで取り除いていた部分の六割程度が身体能力の活性化に繋がるということがわかり、今では荷物運びのための専用職をダンジョン攻略メンバーに組み込むことも少なくない。

頬に小さな鍵穴のような模様を新たに一つ浮かばせたネイアは几帳面にベッドの片付けをしている。その姿を横目で見つつ、自分も着替えながらハクウは言った。

「とりあえずアーキトレクの首都、アークフィナンドを目指そう」

「あ、その前に、この村で品物を買って入っていいですか？」
「わざわざオレに聞かなくてもいいよ。おまえは商人なんだから、仕事しないわけにもいかないしね」

それじゃあ父さん、今日も一日頑張りますよ。なーんちゃって。
ハクウはそういつて笑いながら小さくお辞儀をした。本日もいい天気である。

こうして人間の住む村の中を歩いていることに、ハクウは不思議な気持ちを感じていた。人間は脆い。だからこうして建物を作り、その周りを柵で囲い、一箇所に密集して暮らしている。食べ物も、普通の魔獣とは違って一種類のものを食べて生きていけるわけではない。こうして見ただけでも、すぐそばの畑には背の高い植物が花をつけているし、向こう側の家では老婆が青々とした葉物を籠の中に収穫している。足元を駆けていく体毛のない四足の家畜化された薄桃色の魔獣はどうやら脱走してきたらしく、捕まえてみたら後ろから走ってきた若い男に感謝された。別段、ハクウに思うところはない。魔獣が人間を食べるのだから、人間が魔獣を食べるということもある意味で当たり前だと考えている。

「お、ネイアじゃないか。横に居るのは隠し子かなんか？」

「昨日家族になったばかりなんだ、あんま余計なこと言わないでくれよ」

「初めまして、ハクウ・テーテ・カフカです。つい先日ネイアさん、じゃなくて、えっと、と、父さんの子供になりました。ここに居るのはあと数日ですが、よろしく願います」

ハクウを連れてネイアが民家を回っていると、そのすべての家でハクウは好意的な扱いを受けた。今話しかけてきた赤ら顔の男も気安い言葉をかけてくる。ハクウは森の中では月乃宮家の跡継ぎとして常に傳かれてきた。そんな彼が人間たちにある意味で下に見られているというのは面映いというかなんというか。そういった感情を胸のうちに宿しながら丁寧に乗ると、この村の人間たちは決まっ
てこう言うのである。

「坊主はお堅いねえ、もつと気を抜いて生活したほうが楽しいぜ」
「心配いただけるのは嬉しいです。でも、会う人会う人が、なんていうかこう、新鮮で、やっぱりちょっと緊張するけど、オレ、今とつても楽しいんです」

楽しい。そう、楽しいのだ。ハクウは自分で言った言葉に納得した。知識としてあっても、ハクウがハクウとして実際に体感するものとは全然違う。開けた場所で見える月、踏みしめる青い草、外の空気、肌に触れる麻の布団、生き物の生活の匂い、食器同士がぶつかり合って立てる音、そしてなにより冒険者以外の人間、ありとあらゆるものが溺れてしまいくらいの衝撃を伴って彼に押し寄せてきた。今だってそうだ。だからハクウは押しつぶされないように、いろんなものを取りこぼさないように気を張るのだ。

ハクウがにこにこしながら言うと、男はなぜか頭を抱えた。

「なんでこんない子がネイアの息子なんだよ……いや、今からでも遅くない。坊主、汚れる前にこいつから離れるんだ」

「そういつ扱いは傷つくなあ」

ネイアは笑顔で男を捕まえて両のこめかみに拳骨をぐりぐりと押

し付けた。いわゆるウメボシの刑である。乱暴なじやれあいを続ける二人を見ていることしか出来なかったハクウがぼんやりしていたところ、男の妻に雑穀の粉を使ったクツキーをご馳走になった。そして男の妻はいい年してマジ喧嘩となりかけたネイアたちを一喝、そしてそのまま流れるように正座でお説教をしたのだった。その光景を見てハクウは『母上もそうだけど、やっぱり女のひとつてすごい』と思ったかどうかは定かではないが、男の妻を見る視線に僅かに尊敬の念がこめられていたということは動かしようのない事実なのである。

ようやくお説教タイムが終了したところ、そのままなぜか村の男たちの宴会にネイアは引きずられていった。ネイアが余計なことを言わないかと心配になったが、この程度の大きさの村にいるならば特定の個人の周囲の音くらいは常に拾えるし、いざとなれば全員の記憶を誤魔化せばいいと思い直してハクウは村長の家で野菜やパンなどの肉を含まない夕食をいただいた。ネリアウオルジュ教の信者は魔獣の肉を食べないのだ。そのへんは色々察してくれると幸いである。彼が村長の家にいるのは先の赤ら顔の男が村長の息子だったからだ。男の妻は宴会の料理を作るのに忙しいらしく、ハクウはここに預けられたのであった。

「……それにしても、ハクウくんはまだ小さいのにテーテの名を持つてるのだね」

「オレ、いろいろあつてずっと教会の中で絵を描いていたんです。そしたらいつの間にかに」

夕食後、穏やかな表情で話しかけてくる村長に、ハクウは少しだけ嘘をついた。教会の中ではなく森の中で片手間にやっていた手抜き作品を教会に送りつけていたのである。それでも素晴らしいといえる程度のクオリティーの作品を作り上げる彼の才能には恐ろしいものを感じる。ちなみに彼が今までに作り上げた作品は軽く千を超え、その作品群の中の一つ、人間と魔獣の一生をテーマにした作品である『生命の木』は現在とある大教会に飾られているほどであり、その功績を認められてハクウはティーテの称号を得たのだった。

「ふむ……よかったら、ハクウくんの作品を見せてもらえないかな」
「ありがとうございます！ あ、でも、出来上がった作品は全部父さんが持つてるんです。あの、今からでも簡単に何か描きましようか？」

「おや、いいのかね？ ならばお言葉に甘えようか」
「出来上がりが楽しみね」

上品に笑う老夫婦のそばで、ハクウは斜め掛けの鞆の中から小さな台紙と筆を何本か、そして様々な色の絵具が板の上に乗せられたパレットを取り出し、水の容器を用意してからさらさらと花の絵を描き始めた。思い浮かべるのは小さな植物だ。丸っこい形の葉のふちはギザギザしていて、茎には短い白い繊毛が生え、山吹色の花弁はくるりと球形を描き、僅かに見える真紅の雄蕊が目を惹く、ハクウにとっては馴染みの深い食料である。かじるとなんとなく甘酸っぱい。観賞用植物として西方の国々の貴族のあいだで高値で取引されていることは、ハクウにとってはどうでもいいことである。わりといいもの食べてたんだなと思うかもしれないが、食べると美味しいということには変わりがない。これからも見つけたら食べるつもりだ。

「慣れたものだな」

「それでも毎日やってましたからね」

言いながら筆を洗い魔法で台紙を乾かす。ハクウはこの大きさの絵ならば十個は同時に作り上げることが出来る。並立思考や空間把握、複数の物質の同時操作などの練習も兼ねたものだったが、それはこの年の人間の子供が出来ていいようなことじゃないのでやらずにいた。

筆が滑る微かな音、時折水音。おだやかな空間には絵具の匂いが広がっている。年季を感じる木製の机の上には刺繍の施された綿のテーブルクロスが皺一つなくぴしっと広げられ、中ほどにはこれまた木製のトレイの上に陶器製の花瓶が置かれている。安楽椅子に腰掛けた村長はパイプをふかしながら、村長夫人は食器の後片付けをしながら、二人は優しい目で絵に集中するハクウを見つめている。

想像していただきたい。小学二年生くらいの少年が真剣な顔をして絵を描いている場面を。思い通りの色ができたのかぱっと表情を明るくさせたり、絵具が滲んだのか慌てて拭う姿を。ハクウはちまちまと小さな手を動かして、頬に絵具がついているのも気にせず、楽しそうにしているのだ。おもわず和んでしまっても仕方ない光景と言えよう。

ハクウの作品はあれから半刻もしないうちに出来上がり、村長夫婦もそれを気に入って買い取ってくれた。そしてそのまま今夜は村長の好意で家に泊まらせてもらうことになったのである。ネイアが酒で暴走している声を聞きながら、ハクウの旅の二日目の夜は更けていくのであった。

5・新米冒険者

三日目はネイアの看病と村の中の搜索で終わった。酒を飲ませると面白いからといってガンガン酒を飲ませるのはどうかと思う。アルコールハラスメントだ。略してアルハラ。一個人で動いているときならともかく、ネイアはハクウの義父となつたのだからその辺は考慮していただきたいものである。村の男たちにも謝られたし、今度からはハクウが代わりにきつちりと断ることにする。この日も宿代は免除された。

四日目になって、森から帰ってきた一部の冒険者たちと共にキトエラルツエへ向かうことが決定された。キトエラルツエは穩健派たるキュヴァルゼ侯爵の居城がある、立地的な問題で他国からの侵攻の心配がないことから観光地として発展してきた町だ。もつとも彼らにとつては主要なギルドが全て揃っている事のほうが重要なのだが。

それはともかく、明日の早朝に村を出るのでこの日に品物を買っておくことにした。春作物の収穫の時期より早かつたため農作物は少量、数種の薬草を漬け込んだ薬用酒が数本とあまり商品を仕入れられなかったものの、もともとネイアは契約の確認のために村に來たわけであるから商売での儲けは期待していない。

ネリアウオルジュ教の教会は、その教義により多くの教会がダンジョンのそばに存在していることもあり、そこで暮らす子供たちのために様々な食料を定期的に送る契約がネリアウオルジュ教の大司祭と各国の王族のあいだで結ばれている。そしてその契約がきちんと履行されているかを確かめるために、商人ギルドのメンバーが二ヶ月に一回各地を回るのだ。もちろんこれも魔獣の差し金である。

別に魔獣は人間を嫌っていない。特に子供は無邪気だから好きだ。だから魔獣は武器も魔力も持たないような子供には攻撃しない。その性質を利用してネリアウルジュ教の教会で暮らす子供たちはダンジョン内で冒険者相手に回復アイテムを売っていたりする。彼らは冒険者の獲物にならないために、魔法を使えなくする代わりに装備者の意志、もしくは命に関わると判断された攻撃を受けそうになると自動的に教会内に転送されるというアイテムを身に着けている。これには『のろい』ではなく『まじない』が掛けられているので強引に奪うことは不可能である。

ちなみにこのアイテムはネリアウルジュ教の教会で異教徒にも結構な値段で貸し出しが行われているが、幾分値段が値段であるため普通の冒険者は使わないことがほとんどだ。それを知ったとき、命が金で買えるのだから迷う必要はないのではないかとハクウは思ったが、下手すると五人組のシルバー級冒険者が級に対応する平均的な護衛依頼を五個完遂したときの報酬と同等だと聞いて考え直した。それにあまりにも安いと人間を食べられなくなってしまう。それはちよつと困る事態かもしれない。

五日目。ついにこの村を離れることになった二人は護衛役の冒険者たちを待っていた。中身はともかく優男の商人と美少年修道士の二人旅なんてどうぞ襲ってくださいと言ってるようなものだ。ネイアが最初村へ来たときは森の封鎖を解くという指令書を持ったマーシラクエルト教の信徒とその情報を聞いた冒険者たちについてきた。

ギルドに登録している商人には現在地を報告する義務があり、なおかつ常に護衛をつけなくてはならない。これは商人の保護だけでなく冒険者への仕事の提供も兼ねていて、その代わりと言っては何だがギルドを通した依頼の場合、依頼料金の自己負担額は最高で三

割、少なくとも六割程度とかなりリーズナブルなお値段となっている。それはともかくとして、これから共にキトエラルツェへ向かう三人の冒険者たちは普通の人間なのでたった二日といってもハクウにとつては気の抜けない旅になりそうだった。

ハクウが意気込んでいると彼らが泊まっていた宿とは違うところから約束の相手が現れた。三人ともまだ十台の半ばくらい、どう見てもこれから級の獲得を目指しているかのような風貌である。しかしリーダーらしき少年の胸に輝くのは、彼らがアイアンの級を持つ証である鉄製のバツジだ。どうやらつい最近手に入れたものらしく、掌のような形のアーネシアータの葉を模したそれはぴかぴかと冷たい輝きを放っている。仲間同士話しながら近寄ってくる彼らに二人は挨拶をすることにした。ネイアは昨日あつたばかりの相手だが、ハクウにとつては初対面だ。

「あ、昨日ぶりですね。キトエラルツェへ向かう道中、よろしくお願います」

「ハクウ・テーテです。よろしくおねがいます」

「げ、子供連れかよ。そんなこと一言も言つてなかったぞ」

リーダーの隣を歩いていた目つきの悪い軽装の少年が、ネイアに続いて挨拶をしたハクウを見て嫌そうに眉をしかめる。今にも文句を言い出しそうだったが、しかし冷静そうな雰囲気リーダーの少年はそれを片手で制して少し困った顔でネイアに話しかけた。

「そちらの方に合わせるのでしたら計画を改めねばなりませんね。こつというのは契約の前に言っていただかないと困ってしまいます」

言外に追加料金を払え、ということを含ませながら苦笑いする。それに対し、ネイアも慣れたものでにつこりと少年達を見下ろしな

がらその言葉を切り捨てた。

「その心配もごもつともだとは思いますが、この子は生粋の森育ちなので体力には問題ありません。でもまあ、そうですね、もしもこの子のせいで遅れたりした場合は料金に色をつけることもやぶさかではありませんが」

「いえ、日程に支障がないのであれば構いません。ではさっそく出発しましょう」

リーダーの少年はさらりと、それでいて『どうせ料金を上乘せしなくてはなくなるのに馬鹿なやつ』というような嘲りの視線も隠しながら、先陣を切って歩き出したのだった。

「……そろそろ休憩時間ですね」

「あれ、またなんですか？　んーと、じゃあオレ、向こうの木でも調べてみようかな」

リーダーの少年の言葉を聞いて、飛び跳ねるようにしてハクウは草原の中の開けたところに一本だけ生えている細長い木へと元気に駆けて行った。そのまますると木の上に登りなにやら葉の形などを確認しているようだ。しばらくして、なんとなく満足したのか気の上から飛び降り、軽い音を立てて見事に着地した。ぴよこぴよこと歩いてネイアのもとに戻ってくる。

「品種名はワリスデンドス、樹齢はおよそ二百、状態はやや栄養不足気味、しかし土壤自体は肥沃、土の状態を見るに移動性の魔獣に

根を齧られた可能性があります」

どこことなく満足げにハクウはネイアに報告した。別に意味はない。そしてもう一度ワリスデンドスに近寄り、今度はぐるっと木の周りを円で囲み魔法陣を描き始めた。栄養吸収補佐、回復促進、魔獣及び人間よけ、遅効性の状態安定の陣もついでに組み込んで、最後の仕上げに幹に護符をぺたりと貼り付けた。

少し離れて呪文を唱える。ハクウとワリスデンドスの木のあいだに青い文字が浮かび上がり、光の帯となってくると幹から葉の一枚一枚まで巻きついていく。最後にはずっと光が離れて消えたあと、ワリスデンドスはすっかりもとの瑞々しい薄緑色の葉っぱを真っ直ぐに広げていた。その光景を見ていた三人目の弓使いの少女は目をきらきらと輝かせて、メンバーの中で唯一の大人であるネイアの服の裾を引き今の光景について尋ねるのだった。

「あのう、今のあれってなんなんですか？」

「おや、ご存じないのですか。あれはネリアウォルジュ教に伝わる特殊魔法のうちのひとつですね」

酔っ払うとかなりアレだが、現在は素面で外見は一応色男であるネイアがにこやかに返すと、少女はネイアのようなタイプの男に慣れていないのかぱつと頬を赤く染めた。そこに例の目つきの悪い少年が見るからに不機嫌そうに割り込んでくる。わかりやすい嫉妬だ。

「そうやって派手な魔法で気を引いて一般人を洗脳してんだろ？
リヌミイも騙されるな」

弓使いの少女に忠告して、それからくるとネイアのほうを向き鋭い視線を走らせる。対してネイアはあっさりと笑った。少し大げ

さに肩を落としてみせる。

「随分な言い様ですねえ。わかりきったことを説明させていただと、ネリアウオルジュ教では『傷ついたものには分け隔てなく癒しを与えるべし』とされています。この教えに則り彼は行動したわけです。貴方がおっしゃったような意図は彼にはありません」

「はん、どうだか。だいたい旅の途中で魔力を無駄遣いするとか馬鹿じゃねえの」

「どうやら完全にネリアウオルジュ教への知識がおりでない様子。冒険者の常識ですが、テーテの名を持つ者がパーティメンバーに居る場合、魔獣の出現率は低下します。魔獣の強さによって低下率は異なりますが、この辺りの魔獣ならば一割にも満たないでしょうね。つまりそもそもの戦闘回数が減少するため、魔法を使う機会も極僅か。ならば余った魔力をどう扱おうが当人の勝手かと」

あきらかなネリアウオルジュ教への侮蔑にも、あくまで飄々とした態度を崩さないネイアに少年は苛立ちを隠さなかった。彼はさらにその勢いのまま言葉を続けようとしたが、それは再びリーダーの少年に止められることとなる。今の今まで黙っていたのは彼もまた嫉妬していたからだ。

「ジェヤ、君はもう黙れ。ネイアさん、先程からうちのものがご無礼を」

「ま、若いつていいねってことにおきましようか」

僕にもそんな時期があったような、なかったような。ネイアはウインクをしておどけてみせた。途端に空気が緩む。ぴりぴりとした緊張感のある雰囲気は霧散しこれでこの話はおしまいかと思いきや、しかし現実はその甘くはなかったのである。

さて、本日すでに二回も発言を遮られた少年、ジェヤはというとリーダーの言葉を聞いてしばらくのあいだ黙りこくっていたのだが、さあそろそろ出発しようというところで彼は顔をあげてリーダーの少年に怒りをこめたようなぐつと低い声で唸るように言った。

「エノム、いい子ぶるのも大概にしておけよ」

「いい子ぶるとかそういう問題じゃないだろ？ 大体さっきから何なんだ、苛々しすぎ」

やれやれと言わんがばかりに首を横に振ってみせる。その冷静さが気に食わなかったのか、ジェヤはますます激昂してしまい大股でエノム少年に近寄ると彼の襟首を掴んで睨みつけた。

「昔っからおまえのことが気に入らなかったんだよ！」

「……そうだとしても、今言う意味がわからないな。だからお前はリーダーに相応しくないんだ」

エノムはジェヤの吐き捨てるような言葉にも冷たく対応し、かつピンポイントでわかりきっていたはずの特大地雷を全力で踏みつけた。そもそもジェヤが腹を立てているのはそのせいなのである。

剣使いエノム、槍使いジェヤ、弓使いリヌミィ。彼らはとある冒険者たちが作った村で幼馴染として生まれた。その村はニファルエルゼ山という名前のダンジョンからそう遠くないところにあり、そのダンジョンにはシुकレクビスの森よりも位の高い魔獣が生息している。幼少の折よりそこで訓練を続けていた彼らにとって、このシुकレクビスの森での魔獣の生体部位採取依頼とはただの旅行みたいなものでしかなかった。

三人は彼らの両親たちがパーティを組んでいた縁でそれこそ生ま

れたところからの付き合いであり、特にエノムとジェヤは競い合うようにして腕前を見る見るうちに上げていった。ずっとライバルとして切磋琢磨してきたのである。そして二ヶ月前、彼らはシルバー級冒険者であり、師匠つまりは親方でもあるジェヤの父に認められて冒険者となったのだ。しかしジェヤの父がリーダーに指定したのは息子であるジェヤではなく、その息子のライバルであるエノムだった。腕前は五分、いやむしろジェヤのほうが上である。なのに何故だ。

父親に対する怒り、リーダーに選ばれたエノムへの嫉妬、自らの努力が認められなかったという悲哀、自身の戦闘能力への不安、リヌミイへの思慕も理由のひとつだ。エノムとジェヤは小さいころからリヌミイに恋をしていた。だから父に選ばれたエノムにリヌミイも取られるのではないかという恐れが彼の中で渦巻いている。その感情のうねりが他の想いも巻き込んで、今まさに大きな嵐となるうとしている。

少年二人が今にも武器を取り出そうとしている雰囲気の中、このこと能天気現場にやってきた我らが主人公はこの状況を見てさらっと言った。

「喧嘩？　ならさつさと殴り合えばいいんじゃないかな」

空気を読んでいない。でも一周回って空気を讀んだ発言のような気もする。周りを置いてきぼりにしながらもハクウは魔法陣を描きはじめた。戦意向上、防御力向上、音声遮断、血迷って殺人事件が起こらないように任意発動タイプの戦闘妨害、血の臭いで魔獣が寄ってきたら困るので消臭効果も追加した。あとはちよつと素直になる系統のあれそれを仕込んで終了。ものの五分でこの完成度。

ハクウに背を押されて魔法陣の中に踏み込んだ少年たちはしばらくまごまごとしていたものの、想いを寄せている少女の心配そうな視線を受けて逆に吹っ切れたらしく戦闘を始めた。少し早いがテントの準備を始めたネイアと、宿屋のお姉さんからもらった平たいお菓子を齧りながら体育座りで少年たちを眺めているハクウのことは気にしないことにしたらしい。

剣と槍が一瞬だけぶつかり合っては離れる。槍という武器の特性上、常に相手との距離に気をつけねばならない。しかも相手は剣使い、内側に入られたら仕舞いだ。幸いと言うべきか、エノムの剣筋は良く知っている。そして彼の剣は通常のものよりも長身で厚い。突きのために先端部のみが鋭く設計されて他の刃の大部分は磨かれておらず、斬ることよりも叩き潰すことを念頭に置いた、まだ身体が育ちきっていない少年には向いていない武器だ。だからこそこうして槍の柄と真っ向からぶつかり合えるのだが、その重い剣を軽々と扱いこなし僅かな隙を見計らって鋭い突きを交えたりと多彩な攻撃を繰り返すエノムも武器に負けない立派な使い手と言える。

ジェヤがエノムの剣筋を知っているということは、エノムもまたジェヤの動きを知っているということである。ゆえにさけるしよける。いつもの勝負で負け越したのは単純に体力の差だ。エノムは生まれるのが少し早く、また母親に似て体格にはあまり恵まれなかった。常に冷静であることを心がけているのはそのせいだ。

力が足りないのならば技術や知恵で捻じ伏せる。それを念頭に置きながらも力への渴望は忘れられず、こうして身体に不釣り合いな武器を振り回すに至ったのである。幸い才能はあつたらしく、エノムは見事に冒険者となることを認められたのだ。

確かにジェヤを差し置いてリーダーに選ばれたことはジェヤからの嫉妬を含んだ視線が気にならないくらい嬉しかった。しかしジェヤはエノムにとって兄のような存在である。そんなにも親しい人から向けられる険しい視線は重圧として押し掛かり、いつしかそれは苛立ちにも似た感情へと変化していった。その感情は今、火をつけられて彼の中でごうごうと音を立てながら燃えている。

少年達は戦う。ただひたすら自分のために。少女は見守ることしか出来なかった。ちなみにネイアは夕飯の下ごしらえをしていた。ハクウはというと監視を少女に任せてその辺の影へと急いでいた。名目はお手洗いである。

6・血と汗と涙

結局少年達の戦いは日が落ちるまで続けられた。最後のほうなんかは武器を持ち上げられなくなったらしく普通に殴り合っていた。クロスカウンター。結果は引き分け、しかし彼らは不思議とつきりとした顔をしていた。ハクウの緩慢単体回復魔法で骨折や疲労の半分程度を取り除いたものの、いろいろとやりきった感のある少年達はまだ動けそうにない。というわけでここで野宿である。今日の予定進度の七割弱と、次の町までの道のりはちよつとばかり遠い。

「ネイアさん、その、ハクウさんも。なんというか、申し訳ございませんでした」

「すみませんでした……」

「ははは、別にそんな謝らなくてもいいですよ？ いやあ、青春ですなあ」

「オレから言うこともありません。なんにせよ、わだかまりがなくなつたみたいでなによりです」

このまま火種が燻り続けてたら、いざつてときに致命傷となりかねない状況でしたから、と何の含みもなくハクウは言った。その言葉にいかにも自分達が危うかったかに気が付いたエノムとジェヤはもう一度深く頭を下げて謝罪した。

夕食後、マーシラクエルト教の知識しかない冒険者三人組に対し急遽ネリアウォルジュ教についての講義をすることにした。このま

までは彼らは冒険者としてやっていけないと確信したからだ。

「まずはジエヤさん、貴方です」

「俺ですか？」

「はい。先程ネリアウオルジュ教を略して呼びましたよね。あれ、言った場所によつてはミンチです」

「そ、そんなに！？」

「区切りがないからわかりにくいかもしれませんが、ネリアウオルジュとは開祖様の御尊名であられるので」

ネリア・ウオルジュ。世界に衛生という概念を齎したことでも有名な彼女は非常に優秀な治療師であり、また数多の戦争を止めた平和の使者と崇められている。彼女はもちろん魔獣であり、現在も彼女の子孫が教皇として活躍している。衛生概念を広めた理由は『勇者がこの世界に幻滅しないようにするため』。そしてなにより一番重要なネリアウオルジュ教の教皇の勤めは勇者の召還だ。

順を追って説明しよう。まずは勇者について。勇者とは、この世界において約百五十年ごとに現れる魔王を倒すために召喚される異世界人のことである。喚ばれる人間は男女問わず毎回十代の半ばかり二十歳くらいまで、しかもあまり運動などをしていないような人間と、魔力だけはあるが正直不安を感じざるを得ない面子だ。なぜわざわざ異なる世界から御大層な儀式をしてまでたつたひとりのひ弱な若い人間を連れてくるのかと言えば、魔王は魔獣には絶対に倒せないように出来ているせいだ。長年魔獣が、それこそ本当に身体を張って育ててきた。それでもこの世界の人間はなぜか驚くぐらいに弱いので、未だに異世界からの貧弱な勇者が必要となっているわけだ。

魔王については後の項で語るとして、勇者が年若い人間である理

由は、複数存在する『勇者の条件』について説明すればわかることだろう。『勇者の条件』、まず第一に『戦闘を行える個体である』こと。だとしたらもつとちゃんとした戦闘経験のある人間を喚べばいいと思われるだろうが、別の条件でそれは不可能であるとされている。その条件とは、『喚ばれる人間に専門的な知識がない』ことだ。

どこかで説明したとおり、魔獣たちによって科学の芽はどんな小さなものであっても摘まれてきた。しかし人間の間に多大な影響力を持つ勇者によって巨大な科学の種が蒔かれてしまうと、それは魔獣たちの手に負えない速さで成長していつてしまう可能性がある。そうならないためにも余計な知識はないほうがいいのだ。

あまり運動をしていないこと、というのは向こう側の世界での自分の身体の動かし方に慣れていないほうがこちら側に来ても不都合が少ないからである。どうやら向こう側とこちら側では身体の動かし方が何かしら違っていろいろ、最初のころに喚びだしたいくつかの個体はその違和感に気を取られて命を落とした。

また積極的に運動を行わず、かつ専門的な知識を持たない個体の多くは娯楽小説などを好む傾向がある。この世界における魔法は想像力が肝要なため、向こう側では空想的とされていることに多く触れていることは魔法の成功率の上昇に繋がる。だいたい異世界からの勇者様は魔力が馬鹿みたいにあるためわざわざ直接戦闘を行わせる必要はなく、だったら最初からその圧倒的な物量で押しつぶす方向に切り替えたわけだ。そのほか、様々な理由が絡み合ってそういった連中が勇者として活躍する。

次は魔王だ。魔王とは魔獣の王様ではなく、凶鬼の中で最も強い突然変異個体のことを指す。凶鬼の多くは死の淵に瀕した魔獣が何

らかの強い感情によって魂の内側から変質した存在である。個体差はあるが、おおむね破壊衝動の塊とっていい。理性が存在していないのか会話は不可能で人間魔獣植物建物なにかれ問わず目に付くもの全てを破壊し続けるため、凶鬼を発見した場合は始末するといふ取り決めがなされている。凶鬼は魔獣ではなくなってしまうたからか魔獣でも対応できる。しかし魔王は凶鬼でありながら魔獣でもあるという厄介な性質を持つために人間の手を借りる必要が出てくるのだ。ここで勇者の出番である。

魔王退治という役目を終えた勇者は元の世界に戻るかこの世界に残るかを選択せねばならない。そして元の世界に戻るときこそ、ネリアウオルジュ教の教皇がその力を存分に発揮することとなるわけである。ここで使われるのが『送還の書』、ハクウの旅の目的の一つである『招来の書』と対をなす、『神の奇跡』の一種だ。その名の通り勇者を元の世界に召還するためのものである。『招来の書』は逆にこの世界に勇者を召喚するときに使われる。これもかつてはネリアウオルジュ教の管理下にあった。それが変わったのは、当時のネリアウオルジュ教の教皇の子供が『招来の書』をどこかで紛失してしまい、いつのまにかそれを人間に勝手に使われてマーシラクエルト教とやらを作られてしまったときである。

いずれどちらかの書は人間に託す予定だったから当時はそのまま放置していた。ある意味で人間への信頼の証でもあったが、このごろの人間はあろうことか『招来の書』を悪用し、戦力増強のために『勇者もどき』を量産しているらしい。その『勇者もどき』の正体についてはよくわかっていない。忍者たちの報告によると普通に魔力が割と多い人間にしか見えなかったという。詳細は不明、しかし勇者召喚の時期でもないのに異世界との道が開かれていることは確かだ。ならばそれを止める必要がある。だからこそハクウのような者たちが探しているのだが、腹立たしいことに未だに見つからない。

マーシラクエルト教が作り出した魔法形態は『感情を変換して適切な解を出す魔法現象方程式を強引に導き出して使用する』というものであり、おそらくそれによって魔獣に見つからない場所へ隠しているのだろうと推測されている。変換公式については説明が進んでおり、術者の使用時の各感情の割合がわかれば計算して隠蔽魔法を打ち破ることは理論上では出来る。でもそんなのは複雑すぎて無理だ。特にあまりにも強い感情は魔獣には理解できない。理解したら魔獣は魔獣ではなくなる。それこそ彼らが敵である『魔王』となるのだ。

ここでようやく話がネリアウオルジュ教に戻る。ネリアウオルジュ教、つまり魔獣の魔法形態は『魔法現象方程式の公式を理解し場面に応じた的確な公式を選択、計算して解を出す』というものである。この方式の利点はどんな状況でも一定の効果が見込めることにある。欠点として魔法現象方程式の完全なる理解及び計算が必要となることが挙げられる。

ネリアウオルジュ教は魔獣を開祖とするが、もちろん人間の信者もいる。これを解決するために魔方陣を普及することを決めたのは二代目教皇ワイエ・ウオルジュである。魔方陣は望んだ現象を引き起こす魔法現象方程式及び解を主軸とし、その補助を目的とした魔法現象方程式を組み合わせて、計算の手間を省き魔力を通すだけで簡単に使えるようにしたものだ。そのままでは教徒以外にも使われてしまったため、補助のほうに特定の称号を持つ者のみが使用できるという条件付けの魔法現象方程式が記されている。

称号について。簡単に言えば職業を表すミドルネームだ。ハクウというテーテで、ネイアでいうリチット。ネリアウオルジュ教では称号とは命名神が授けてくださるものであり、その伝達役として教

皇や司教が各個人に書類という目に見える形で知らせているのである。当然のことだがこの書類にも魔法が掛けられていて、書類を当人が受け取ると自動的に登録魔法が発動、情報が本部へと送られる。この称号を利用して与える情報や権利などを制限するわけだ。

ちなみに読み終わった書類は僅かに発光する陶器製の指輪となり、たいていの場合はチエーンを通してネックレスのような形で携帯されている。その指輪は受け取った当人が魔力を通すと強い魔獣よけの効果のある光を放つため、身分保障証としての役目も持つ。

紛失した場合は届出を出して罰則金を払えば再交付される。前の指輪や当人が死んだ後の指輪は消失するので盗んだとしても売れないし、光らない指輪を持っているということは泥棒なのだと宣言しているようなものであるため、首から堂々とかけていても特に問題はなかったりする。

「父さん、歴史についてはもうそのくらいでいいんじゃないかな。彼らには称号について話したほうが役に立つと思う」

「ん、やっぱりそう思うかい？ ジェヤくんなんか半分寝てるし」

「あー……こりやもう明日にでも回そうよ。歩きながらとかで十分間に合うだろうし、同行期間も伸びるだろうから」

ここまでの説明は第三者向けのものであって、ネイアが冒険者たちに語り続けていたのはネリアウオルジュ教の簡単な歴史である。魔獣でもちよつと引くくらいの長さを誇る歴史を面白い雑学も交え

ながら僅か一刻ほどに纏めたネイアの話術は賞賛されるべきものだが、いかんせん汗と涙と青春の殴り合いの喧嘩を繰り広げたエノムとジェヤはなんかもう頭がぐらんぐらんしている。見るに見かねて二人を寝かせることにした。しかしそうなるとちょっぴり問題が出てくる。

「ところで見張りはどうするべきでしょうか。夜は魔獣が活発化するから一応必要かと」

「二人の分も私がやります！」

「そういう意味のどうするではなくて、順番について相談したかったんですけどね」

ぶっちゃけて言うと高位の魔獣であるハクウやネイアがいるのでその辺のやつらはよって来ない。いや、挨拶しにくる可能性はあるが襲われる可能性はない。ついでに言うと、魔獣よけとは人間には秘密の話だが気配や匂い、魔力放出パターンなどを変化させて魔獣のそれに酷似させ、同類だと勘違いさせることで襲われないという術である。それはおいといて、なぜネイアがわざわざ夜間の警戒について触れたのかといえば単純に怪しまれないためだった。ネイアとリヌミイがあーでもないこーでもないかと相談しているそのとき、ハクウがびよこんと手を挙げてあつと驚く宣言をした。

「はい。明日の午前中、寝ててもいいならオレが一人でやりまーす」

「え、寝るの？」

「もちろん父さんはちゃんと運んでくれるよね」

ぐでぐでんな状態で全力疾走させられたことを思い出したのか、若干顔を引きつらせながらもネイアは頷いてみせた。リヌミイは反対していたが、そこは幼いながらも膨大な知識を持つハクウと長年

商人として生きているネイアがタッグを組んで説得にかかるわけなので年若い少女はすぐに騙されて、もとい納得していただけたのだ。これは誠意を持って話せばたとえ種族が違っても分かり合えるということにほかならない。じつにいい話である。

「おやすみなさい」

「おやすみ、気をつけるんだよ」

「なにかあつたらすぐに叫んでくださいね」

「了解です」

二人を眠らせたあと、ハクウは睡眠を深くする魔法を使った。移動型魔獣の少数の群れが近づいてくることに気が付いたからだ。ネイアが気をつけると言ったのは人間に魔獣と会話しているところを聞かれないようにという意味である。複合型遮断結界を張り終えたころに彼らはハクウのもとに現れたのだった。細長い耳に丸っこいからだを持つ草食系の中型魔獣だ。ハクウは首を傾げる。

「あれ、どうかしたの？ もう挨拶はしたよね」

「恐れながら申し上げます、その、私の妻が今夜急に産気づきまして、途中までは順調だったのですが現在は思わしくない状況なのです。なにとぞ、なにとぞお力をお貸し願いたく存じます！」

夕方ごろ、ハクウはトイレだと偽ってパーティのそばを離れたがあれは嘘である。高位魔獣は幼少時に不要物も栄養へと変換する魔法現象方程式を覚えるので、多くの長命魔獣は排出器官が退化してしまっている。要するにトイレには行かないということだ。実際に何をしていたのかといえば、空間移動魔法でちょちよつと草原内の魔獣の群れに挨拶してきたのである。

相手はいいとこのお坊ちゃまであるハクウに挨拶しに来させたこ

とに恐縮していたが、そのへんはハクウ側の時間の都合ということ
で説明した。そのときにこの魔獣の群れのところも訪れていて、そ
の彼の奥さんのおなかを触らせてもらったのだ。あつたかくて中で
何かが動いているのがわかり不思議な気持ちになったのをよく覚え
ている。ハクウが首を傾げたのは夕方見たときより群れの個体数が
減っていることも関係していた。

「じゃあ急がないと。場所はどっち？」

「あちらです！」

「よし、走るよ……あ、いや、やっぱり飛ぶことにしよう。まとめ
て移動したほうがいいよね」

言うや否や空中魔方阵を展開する。イメージをもとに座標軸を割
り出して空間移動を行うという、人間の魔法を見たところ魔獣が編
み上げた比較的歴史の新しい術である。複雑な魔法現象方程式を十
二個も解かなければ発動しない高度な術をあつさりといともたやす
く使いこなし、ハクウたちは飛んだ。

目的地に着くとすぐに皆が集まっているところに向かった。中心
に横たわっているのは夕方見たあの母親だ。魔獣の血のにおい、ひ
どい脂汗に荒い呼吸、声はかすれてしまっている。健診を開始すれ
ばすぐに難産の原因はわかった。ハクウが眉を顰めながら言う。

「あ、これまずい。なんかへその緒が妙に絡まって。腹開くか手
突っ込むかしないといけないな」

「手ですか!？」

「そう。幸いオレの手は小さいから出来る。開腹しても傷痕は残さ
ないから安心して。で、どっちにするの」

真剣に問いかけるハクウに、父親は母子が出来る限り安全なほう

でお願いしますと搾り出すような声で言った。頷いて、左手を母親の腹の上に置き右手を腹の中に入れる。指先に集中し一匹の子供の足を掴むとへその緒を途中で切り離して引きずり出した。へその緒の処置は他の魔獣に任せるとして、ハクウは母親と胎のなかの子供達を助けることのみに神経を使う。

母親には疲労回復や痛覚麻痺、精神安定などの魔法をかけながら、子供達には生命強化の魔法を使い全員が助かるようにして、へその緒だけを切断するように極狭い範囲を指定し分割魔法を行使する。奮闘のかいもあり、全部で六匹の可愛い赤ん坊が元気な産声を上げた。もちろん母親も無事である。ハクウはついでに他の妊婦たちの健診も行い、彼女達のために日持ちする栄養価の高い植物を渡して急いでキャンプ地に向かうのであった。夜明けが近いのだ。

7. ごくふつうの旅路

どうやら気付かれることなく帰還ができたようだ。結界は無事、パーティメンバーも全員無傷でそのへんに転がっている。地平線のかなたに見える白い光に目を細め、ハクウは息を吐いて背の高い植物を踏み潰して作り出した場所に無造作に座り込んだ。そうしてメンバーが起きても気付かないような位置に一つ、青い炎を浮かばせる。相変わらず何にも干渉できないようだ。それでもハクウはいつものように囁くような声で穏やかに話し出す。

「ちょっと危なかったけどセーフだ。無駄にどきどきした」

「……」

「それにしても、出産の手伝いをするとは思わなかったよ。初めてだけどちゃんとできてよかった」

「……」

「オレもあんなふうに生まれてきたのかなあ……母上も大変だったろくに。うん、やっぱり母上はすごいや」

「……」

「ねえ、きみはどう思った？」

「……」

「答えられそうにない、か。しょうがないね。でもオレはきみと話せるようになりたいよ」

「……」

「あ、ネイアが起きそう。今日は夜の月が見れなかったし、きみとちよっとしか喋れなかったから残念だ」

「……」

「それじゃ、またね」

わかっていても寂しいものは寂しい。指先で掠めるように触れて

から、僅かに揺らめく炎を誰にもわからないところにしまいこみ、ハクウはネイアを見た。意識が浮上しかけているらしくなんだか微妙にぴくぴくしているのだ。つつついてみると、ネイアはかっと瞼を押し開き上体を起こした。未だ覚醒はしていないようだ。

「朝……ですね」

「うん、おはよう」

「おはようございます……」

むにやむにやと呟きながらもてきぱきと朝食の準備を始めるネイアをよそに、ハクウは役に立たせる気は欠片もなかった冒険者たちを起こすことにした。紅一点のリヌミイはハクウが声をかける前に起きて、夜通し見張りをしていたハクウの心配をしてからネイアの手伝いに向かった。心なしか足取りは軽かったような。なんとなく桃色な展開の気配がする。

そして青春真っ只中の少年達、エノムとジエヤは野宿だということにもかかわらずぐっすりと寝ていたのだ。ついなんとなく乱暴にはたき起こしてしまったのは仕方がないことである。彼らは寝ぼけ眼で荷物を片付けていたが、ネイアとリヌミイが仲良さそうに二人で料理している姿を見て飛んでいった。単純というなかれ。

朝食も終わり、出発の準備が出来たころの会話である。

「というわけでオレは寝ます。背中貸して」

「はいはいりょーかい。僕は頭脳労働担当なんだけどな」

「俺としては、なにがなにやらさっぱりなんですけど」

少年達の疑問は放置してネイアはハクウを背負って歩き出した。

何かを説明している低い声が聞こえる。多分昨日の続きだろうと判断したハクウはうとうととまどろみながら暖かいものに頬を擦り付ける。背中の中ハクウに急に動かれてネイアは妙な声を上げて驚いた。そのせいで背中がはねる。

「……父さん気持ち悪い声出さないで」
「寝起きから酷いこと言われた……」

しょんぼりと肩を落として傷ついたことをアピールしてくるが、背中に乗っているハクウにとってはまたもや揺らされたようなものである。首に回していた左手でほつたをつねる。意外とやわらかい。

「携帯食料でいいからちようだい。あと水も」
「無理だって、両手は塞がってる」
「知ってる。もう下ろしてくれていいからさ」
「大丈夫？」
「大丈夫」

ならいいけど、と言いながらゆっくりと下ろされたハクウは軽く伸びをした。太陽はほとんど頂点に達している。時間通りだ。ネイアから受け取った、数種の穀物の粉を練り合わせて作った硬いパンを歩きながらじがじとかじる。パサパサしていて飲み込みにくいので水と一緒に良く噛まなければならない。

ついでに民家で貰ったドライフルーツも食べる。人間の携帯食

料はあまり美味しくない、今度美味しい携帯食料について研究してみようか。そんなことを考えつつ、ハクウはメンバーを見渡した。ネイアが延々話し続けていたので冒険者三人組の視線はこちらに向いている。少し考えてハクウはネイアに尋ねた。

「説明つてもう終わった？」

「あと一つ。最後はダンジョン内のネリアウオルジュ教について」

「じゃ、それはオレがやるよ。つい最近までダンジョンにいたからね」

「よろしく。僕もちよつと休憩したいし」

手をひらひらと振ってネイアは水を飲み始めた。喉が渴いていたらしく、ごくごくと飲んでいく。歩きながらだと口の端から水がこぼれるのでハクウは拭くための布を渡してやり、改めて三人の冒険者を見る。よく考えたらこの人間達とはあまり話をしていない。まだ十台の半ばくらいでそれでいて将来性を感じさせる、そんな彼らと繋がりを作っておくことは悪いことではなさそうだ。そんな打算的な考えを隠して、ハクウはにこにこ微笑んで見せた。

「というわけで、話はオレが引き継ぎます。ネリアウオルジュ教の小教会がダンジョンの内部に存在する理由については父から説明を受けたと思いますが、そこまでで何か質問はございますか？」

「ネイアさんが噛み砕いた説明をしてくださったので問題ありません」

なんというか、ぼくたちの村ではネリアウオルジュ教を悪く言うだけで誰も有益な情報を教えてくれなかったのだ。そういつてエノムは年に似つかわしくないような苦笑いをした。彼らが知らないのも無理はない。冒険者の中にはネリアウオルジュ教を疎む連中もいることは確かであり、彼らの周辺の大人は不幸にもそれに当てはま

っていたというだけの話だ。

ダンジョン内には教会が指定する人間立ち入り禁止の聖域が存在し、その付近では一切の狩猟及び採取が禁じられている。もしその聖域の中に狙っていた魔獣が入り込んでしまった場合は諦めるしかない。さらに聖域には希少な植物や魔獣が存在していて、聖域という制度を使ってネリアウルジュ教がそれらを独占しているのではないかという噂がまことしやかに流されているのだ。実際は数の少ない魔獣や妊娠中の魔獣、子供などといった非戦闘員を保護するための場所なのであながち間違いとはいえないところが悩みの種でもある。

「ならば続いて小教会の役割及び冒険者の方が利用可能なサービスについてお話させていただきます」

小教会の表向きの役割は孤児の保護やダンジョンの整備、回復所及び仮宿といったところだ。孤児でなくても複雑な事情があつて預けられる子供もいる。マーシラクエルト教にも孤児院はあるが、そこは孤児院とは名ばかりで子供を買い取って裏でこっそりと洗脳し冒険者に仕立て上げる場所である。洗脳していることは知られていなくても、マーシラクエルト教の孤児院出身者のほとんどが冒険者になることから、少しでも良識のある人々はこちらへ子供を預けるのだ。

教会で育ち十五歳を迎えた子供は聖職者になるかそれとも別の職業になるかを選ばなくてはならない。どちらを選んだにせよ、その子供はネリアウルジュ教の教徒である家に養子として入るのだ。十五歳以下の場合はその子供に何らかの才能が認められたときのみ裕福な家庭へ保護される。才能の困い込みだ。これを行うことで危険思想が広がることなくこの世界は今日も続いているというわけ

である。宗教外の危険人物については主に社会的に追い詰めて自殺させてきた。金があるのは実に有利といえよう。ちなみに最終手段は黒幕に相応しく暗殺者を送ることだ。

ダンジョンの整備は正確には道の整備である。司祭は魔獣が出にくくなるように設定された道がある程度ダンジョン内に張り巡らせている。実はこの道路は魔方陣の一部に組み込まれていて、これにより意図的に人間の意識外の進入禁止区域を作り出している。これでフォローできない場所は聖域に指定、別の魔方陣を使用して住居の保護を行っているのである。この不可侵領域には今の人間の手に負えないレベルの魔獣たちが住んでいるので、これは魔獣のためというよりか人間のための区分といったほうが正しいのかもしれない。

小教会の隣にある建物は回復所または仮宿として利用されている。建物の中には自己回復機能の向上効果のある魔方陣が設置されていてここで休憩を取る冒険者も多い。金銭を払えば食事も提供される。回復魔法についても同様だ。回復魔法の使用に料金が必要となることに不満や嫌悪の情を抱く冒険者もいるが、『そもそもこっちは魔獣とほどの距離を保ちましようって言うてるのにあんたら自分から魔獣と戦闘するようなまねして怪我してるわけじゃん。それって自業自得じゃね？』というのがネリアウルジュ教の見解である。

もともと冒険者の回復はやっていなかったのだが、冒険者ギルドからの嘆願を受けて料金を支払った場合は例外として回復魔法をかけているのだ。ネリアウルジュ教信者は無料とまではいかないが、それこそ格安で利用できる。また、司祭はダンジョンに近い村ならば二ヶ月に一度くらいのペースで定期健診を行っている。生活の質を一定に保つためには近隣住民の好感度は重要だ。

そして本来の役割は魔獣の居場所を人間社会に作ることと外界と

の通路を確保することである。前者についてはハクウがその最たる例と言えよう。後者は少々わかりにくいかもしれないので順を追って説明すると、まずダンジョンの一番外側はマーシラクエルト教の結界魔法で覆われている。そうして一箇所から二箇所特定の出入り口を作ることによって魔獣が他の場所から抜け出すのを阻止し、また冒険者の出入りも管理できるようにしているのである。ダンジョン内で強大な特別変異魔獣が現れたときは非常事態として一時封鎖、そして討伐隊が組織される。

大抵討伐は成功するのだが、稀に人間には手におえないレベルの魔獣が現れる。そんなときのための完全封鎖結界である。人間は出れるけど入れず、魔獣は出られない。こうなると困るのが人間に化けた魔獣だ。このダンジョンの中で生きていくのに支障はないがこんなところでネリアウオルジュ教関連の膨大な知識を有する存在を失うのはもったいない。だからこそ彼らが脱出するには別の道を確保しておかねばならないのだ。

そこで使われるのが池や湖といった動かない水である。この水の鏡を利用し背面世界に回り込み、再び別の鏡を通して表面世界へと出現するという方法でこの危機を乗り越えるのだ。この方法を使用するとその司祭の戸籍は使えなくなるのが欠点と言えば欠点である。書類上、その『人間』はずっとそのダンジョンの内部にいることになっているのだから。

人間向けのあたりさわりのない説明をしたハクウは息をついた。冒険者が利用できるサービスとは回復所や小人のことである。回復所についてはすでに先程説明したが小人については前の話で話題に出した。一応おさらいすると小人とはダンジョン内アイテム販売員だ。ダンジョン深部にいる小人ほどいいものを売っているが値段も割高となっている。

「と、まあこんな感じです。ご理解いただけましたか」
「なるほど……だからあれは……」

なにやら独り言を言い始めたエノム以外の二人は二、三質問をしたあと彼らなりに納得したらしく笑顔でお礼を言った。そしてジェヤトリヌミイは今後の旅の方針について相談し始めたのでハクウは暇そうにしているネイアのほうを向いた。ちょうどあくびをしていたようで大口を開けている。いまいちしまらない男だ。

「あんだけぐつすり寝てたのにまだ睡眠足りてないの？」

「十分足りてたけど、それでも眠いもんは眠い。一日十二時間は寝たい」

「それ寝すぎ」

言いながら二人とも油断なく辺りを見渡している。冒険者たちもそれらに気付いて武器を構えた。背の高い草が一際密集しているところからのそのそと見るからに汚らしい格好をした冒険者くずれの男達が現れる。周囲にも数人隠れて隙をうかがっているようだ。下品な笑みを浮かべていかにも悪いことを考えていますよ、といったようなものである。はつきり言って不快だ。眉をひそめて男達を睨みつけるハクウを一番の大男が品定めをするように上から下までじつとりと見つめてがらがら声で言うのであった。

「ありがちな台詞で悪いが、女と子供、それと荷物置いてけや」

それに対し先頭に立っていたエノムが答える。

「こっちもよくある言い方で悪いけど、断る」

そうかい、交渉決裂だな。そう笑って男達も武器を構えた。

「……聖職者と商人の組み合わせってこういうとき困るよな」
「まったくもってその通り」

真剣な面持ちの冒険者たちとは反対に、ハクウとネイアはのほほんと笑いあった。そのままハクウは飛んだ。まずはこそそと詠唱していた魔法使いの腹を蹴飛ばし別の男にぶつける。追撃、魔法使いの持っていた杖を掴んで二人まとめて串刺しにする。血を浴びて服が汚れるのはご遠慮願うところなのでハクウはすぐに二人の死体から離れた。一方であっけにとられていた男達へ冒険者たちが容赦ない攻撃を始める。ハクウたちが見込んだとおり、対人戦でも安定した動きを見せている。これならメンタルケアも必要なさそうだ。

「聖職者サマが人殺しなんてしてもいいのかよ!？」
「まあ聖職者っていうか、修道士っていうか、モンクっていうか」
「アリっちゃアリだよな」

盗賊たちの中の一人が叫ぶがハクウとネイアはどこ吹く風と言わんがばかりの態度である。ハクウは向かってきた細身の男の脚部を踏み潰しながら、ネイアは弓矢を扱っていた男の背骨をへし折りながらなんでもないような顔をしている。基本的に城や町、村の外での冒険者の生死に関しては自己責任なのだからこういう場合は別に殺してしまっても構わないのだ。

一応補足するとダンジョン内の道付近では人間同士の戦闘は不可能である。だから普通の商人はむしろ通り抜けが出来るダンジョン内の道を使ったほうが安全かもしれない。ただしダンジョンから町や村への道中で盗賊などに襲われる可能性は否定できない。なのでダンジョンの出入り口から村、村から町、町から城というような中

間地帯を移動するときのために商人は冒険者を雇うのだ。ダンジョンの門番に頼めば各ギルドへの依頼が可能なので個人で活動する商人たちはこのようにして生活しているのである。

戦闘自体はあっさりと終わった。罪を犯し冒険者を辞めさせられた証があるか、つまりは指名手配されているかどうかを確認したところ、特にそういったものがなかった。残念無念、骨折り損のくたびれもうけといったところか。そんなこんなで二日目は終了したのであったとさ。ちなみにこの日の夜はちゃんと冒険者たちが交代で見張りを全うした。

8・帰宅願望

「……ずっと気になってたんですけど、どうしてお二人ともそんなに戦えるんですか？」

「僕は小さいころから訓練してましたね。やっぱり旅の商人ってどうしても危ないことしなきゃいけないので」

「オレはシスターから色々と教わったんです。そう、色々、ね……」

「へ、へえ……？」

エノムの素朴な疑問に対し明るい顔で答えたネイアに、彼とは対照的に暗い顔でぶつぶつと呟きだしたハクウ。そんな彼に色々について聞くような勇気があるものはパーティ内には一人としていなかった。

ハクウが森で暮らしていたとき、戦闘訓練と称してあの『蛇』は容赦なく攻撃を仕掛けてきた。はつきりいつて天狐族は魔法タイプの種族だというのに執拗に近接戦闘を仕掛けてくるのである。当然変身魔法を覚えたばかりの昔のハクウは人型での通常魔法行使に慣れていなかったためぼっこぼこにされた。そのたびに傷や疲労を取り除いて強制戦闘再開。ようやく近接戦闘に慣れたハクウが詠唱短縮複合魔法を閃いて三日間に及ぶ虐待はようやく終了したのである。スパルタンも真っ青なレベルのお話だ。

その後も隙を見計らっては近接戦闘に持ち込もうとする『蛇』と戦っているうちに、いつしかハクウ自身も近接戦闘の手段を覚えていった。ハクウを殴り型にでも成長させたかったのかどうかはわからないままであるが、人間社会に出るのなら人型での戦闘に慣れていたほうがいい。確かにその経験は今回の戦闘でも役に立った。役

に立ったのである。だからあれは無駄なことではなかったのだ。そうに違いない。そういつてハクウは自分を慰めるのであった。別に泣いてなんかない。

三日目は妨害もなく予定通りに進んだ。観光都市、キトエラルツエに着いたのは空が茜色に染まるころのことである。本来防衛装置であるはずの城壁でさえつりとした光沢のある純白の魔鉱石で緩やかな曲線を描くように作られており、さらにその上に青紫色の複雑な紋様が芸術的に浮かび上がっている。

一際目立つのは中心部にあるキュヴァルゼ侯爵の居城だ。全体には象牙色の魔鉱石が、そして屋根や装飾部には赤紫色の魔鉱石が使用されている。城下町の建物の色も統一されており上空から見るとまるで一つの花のような形をしている。この町はまさに防衛機能を二の次にした完全に見た目重視の観光都市なのである。

そういつたことができるのも、このあたりに生息しているとされる魔獣は人間でも比較的簡単に撃破できる種族が九割九分九厘を占めることにある。残りの一厘は基本的にダンジョンから動かないので人間は安心して暮らしていける。気候も温暖で大きな農村や牧場を大量に領内に持つことが出来るわけだ。

そうすると高品質な食材を安定して供給することができ、その食材を使用した高級料理屋が数多く作られ、料理目当ての客が増加し、その客が泊まるための宿が必要となり、旅行者のための土産屋があちらこちらに現れ、その土産を生産する職人の保護も活発となる。海とも隣接しているし鉱山資源も豊富、ダンジョンだってあるとくれば材料に困ることはない。またキトエラルツエから少し離れたところには温泉街もある。まさに観光や休息に相応しい土地と言える。う。なので王侯貴族の中にもこの地に別荘を持つ者も少なくない。

唯一の欠点は王都から距離があることくらいだろうか。

人の出入りが激しい観光都市らしく門は複数存在しており、さらに運よく人の少ない日だったのか、彼らはそれほど待たされずに済んだ。皆を代表してネイアが兵士の前に出る。

「通行証を提示してください」

「これですね」

「はい、確かに承りました。ぜひこの町を楽しんでいてください。トックラ亭という野菜料理専門店がおすすめですよ」

笑顔で丁寧に対応した兵士の前を通り過ぎたあと、ジェヤはぼつりと呟いた。

「……なんか俺らだけで通ったときは態度違くない？」

「ここの領主様がネリアウオルジュ教徒だからじゃないか」

「貴族様が相手ならともかく、私たちはただの新米冒険者だからね……」

彼の呟きに呼応してエノムとリヌミイもぼやいた。そうしているあいだにも町を行きかう様々な服装をした大勢の人間とすれ違う。頭からすっぽりと帽子のようなものを被り顔を隠している男性や、逆に身体を覆っている布地の面積がささやかすぎて周囲の男性を振り向かせている女性、身体の線が出るような服を着ているのになぜか女性だか男性だかわからない人物。かつかつと硬質な音を立てて先を歩くネイアはハクウの左手を掴みながら問いかけた。

「ハクウは森から出るのは初めてだろ？ 何か感想は……」

「そっか、城壁の曲線は負荷を生み出すためのもので術式から生まれる力を抑えて均衡状態にしているんだ。となると……」

「わー……なんか自分の世界に入ってる」

人間などには目もくれず完全に魔法解析モードになってしまっている魔獣の少年に、思わずドン引きしたネイアは微妙に顔をひきつらせながら商人ギルドを目指すのだった。

大通り、この町の冒険者ギルドは商人ギルドの内部にひっそりと存在している。この付近のダンジョンは魔獣も弱くうまみが少ないこともあり微妙な立場にあるようだ。商人には護衛が付き物だが、キュヴァルゼ侯爵の意向もあり各村で生産された商品を運ぶ際には彼の私兵が使われている。届出を出せばそれに同行することも出来るため、税の徴収のときに彼の護衛軍に同行する場合のみ、特例として冒険者の護衛なしで通行できるのである。しかし、そんなことはハクウたちには全く関係がないのであった。賑わいを見せている商人ギルドとは反対に、がらんとした冒険者ギルドの受付嬢は暇そうに手元をいじっていたがネイアたちに気が付くとすぐさま姿勢を整えて笑顔を浮かべた。

「いらつしゃいませ」

「護衛依頼完了の手続きをおねがいますか」

「は、はい……」

出会って一秒笑顔でポ。かつてない勢いで受付嬢が頬を赤く染める。早い、早すぎる。慌てながらもいいところを見せようとすぐさま動き出す彼女をハクウは微妙な顔で見送った。

「この女つたらし」

「何もしてないのに勝手に好きだとかなんだとか言ってくるだけだつて。こっちも迷惑してるさ」

「……」

「なんだろう、こいつ殴りたい」
「同感」

ネイアが年下の少年少女の好感度をがくつと落としているあいだに書類の準備ができたようだ。ネイアとエノムが代表として報酬などについて話し合うこととなり、ジェヤとリヌミは今晚の宿を探しに行き、ひとり残されたハクウは別のテーブルで一休みすることに決めた。ついでに紙を取り出し絵を描き始める。

今日の題材は夕焼けの草原。あまり時間はないのでこの場では色はつけないことにした。ハクウが心の赴くまま線を走らせていると、ふいに覆いかぶさるような大きな影が現れた。顔を上げるとそこには小麦色の髪を自由に遊ばせた、実に精巧な顔立ちの男性が興味深そうにハクウの手元を見ながら立っているではないか。服装から見ても一目で支配階級だということがすぐにわかるほど上質な衣装を身に着けている。

「あの、なにか」
「ああ気にしなくていい。そのまま続けてくれ」
「と、言われまして」

困惑したハクウが腕を組んでいる男性を見上げていると、入り口のほうから何か大きな音が聞こえてきた。とぎれとぎれに聞こえてくる言葉によると今この建物の中に飛び込んできた女性はどうかやう人をさがしているようだ。思わずハクウがすぐそばにいる男性に目をやると彼は肩をすくめるのであった。

「やれやれ、もう時間切れか。じゃあな、また会おう」
「え」

ハクウの返事も聞かず、彼は人と人との合間をするすると通り抜けて建物を出て行った。そしてハクウのもとに話し合いを終えた二人が戻ってくる。

「エノムくんはもう少し感情を隠すようにするといいですね」

「善処します」

「ところでハクウは侯爵に話しかけられてたみたいだね。どう思った？」

「変な人」

向けられた問いに間髪入れずに答えるとネイアは笑みをこぼした。別に不快に思ったわけではないらしい。

「正直だね。まあ実際変な人なんだけど」

懐かしむような口ぶりで話す彼に違和感を持ったのか、エノムが恐る恐るといった体で尋ねた。

「ちょっと待つてください。もしかしてネイアさんは侯爵のお知り合いだったりするんですか？」

「小さいころに聖地で会って意気投合しまして。それからの付き合いなんです」

「そ、そんな人と普通に話してたなんて……」

「偉いのは彼で、僕じゃないです。だからそんな気にする必要なんてないですよ」

頭を抱えだしそうになったエノムを慰めて、ハクウとネイアは大会堂へ向かうことにした。ハクウの専用装備品を取りに行くのである。そしてこの町のネリアウオルジュ大教会は中心部、侯爵の居城であるキルリシート城のすぐそばに悠然と佇んでいる。

重厚な扉を開ければ、教会の中は人でごったがえしていた。聞けばちょうど礼拝の時間が始まる場所だったらしく、ハクウとネイアも長椅子に座りしばらくのあいだ祈りを捧げた。礼拝も終わり、そろそろと帰り始める人々の合間をすり抜け、ふたりは先ほどまで人々の前に立っていたこの大教会の主、テルジ奥斯・チーハ・ニスフェナンドに話しかけた。紫紺色の長い髪がふわりと揺れる。狩衣を身に纏った、優美な顔立ちの美しい青年だ。

「あなたがハクウさまですね。私はテルジ奥斯・チーハ・ニスフェナンド。ここで皆に教えを説いています」

「彼の専用装備品を取りに来ました」

「ええ、ええ。話は聞いております。こちらへどうぞ」

「テルジ奥斯さま、そのくらいわたくしが」

「いえ、私がやらなくてはならないことなのです。わかってくれま
すね」

「は、はい！」

そのままふたりを別室に案内しようとしたテルジ奥斯に助祭の青年が声を上げる。しかしテルジ奥斯はそれを断り青年に向かって笑いかける。彼は見事に固まってしまった。あれ、この反応さつきも見たような気がするぞ。嫌な予感を感じながらハクウはネイアとともにテルジ奥斯の後を追う。

しばらく歩いて、一つの大きな扉を潜り抜ける。部屋の中は落着いた雰囲気、調度品に囲まれていて、整然とした印象を受ける。しかしなぜか頭の中のアラームが鳴り止まない。そこは司教の私室らしく、防音設備もばっちりなのだとネイアがハクウに教えてくれた。なんか寒気までしてきた。テルジ奥斯はカーテンで窓を覆い隠し、天井の明かりをつけた。そして、彼はついに口を開いた。

「ゆーちゃんってば久しぶり〜！ やーん、その外装超かつこいいわあ」

「兄ちゃんは変わらないね。変わったほうがいいような気がするけど」

「あーら、アタシの美しさはすでに完成されているのよ？」

「あはは」

「……きつつー」

オカマだ。まごうことなきオカマだ。妙に高い声とくねくねとした動きが気持ち悪い。しかもネイアの兄らしい。ハクウは一步どころか十歩くらい引いた。

「ネイア……っていうか有司がメスなのにオスの格好を取ってる理由がようやくわかった」

「ちょ、違います！ これにはちゃんと別の理由があつてですね！？」

「言い訳はいいよ。オレ、別に差別したりはしないからさ」

「言い訳じゃないですから！？」

「大丈夫、わかってる。でも言い訳……じゃなくて説明したいなら聞いてあげる」

わかってるから無理しなくてもいい、そんな気持ちをこめたアルカイクスマイルを浮かべているハクウに対し、ネイアはしばらく口ごもっていたものの、ようやくといっていいほどの時間をかけてから話し始めた。曰く。

「男を騙して貢がせるのに飽きたから、今度は女に貢がせることにしようと思ったんです」

「はいアウトー」

「なんで!？」

「何でもクソもねーよ……」

「あらあら。白雨さまってば、悪い言葉を使いたい時期なのね。背伸びしてて、とおってもカワイイわ。食べちゃいたい」

「あんたもアウトだ」

だめだこいつら……。ハクウは渋い顔をした。片や男なのに女の真似をしていて、片や女なのに男の格好をしている。性別があやふやだ。温室で育てられてきたいけなちび狐であるハクウにはアブノーマルな世界への耐性がまったくない。現に彼は今部屋の入り口まで下がってしまっている。

「あらん、白雨さまは気が早いのね。まだ武器も何も渡してないじゃない」

「そう、今日はそれを取りに来たんだ。だから早く持ってきてよ」

「あるじゃない、コ・コ・に」

「……その、あんたの足元の箱のことか」

「イエース」

バチンとウイंक。ハクウとネイアはさつと避けた。慎重に近づき箱を抱きかかえるとすぐにオカマ男から距離を取る。……ここから全部成人男性の声。いやだわ、嫌われちゃったかしら。白雨さまは優しいから大丈夫、今は多分ちよつとびっくりしてるだけだからよかったわ、あんなにカワイイ男の子には嫌われたくないもの。ちよつかいだしちゃだめだよ。うふふ。駄目だってば。いけず、しばらく見ないうちにけちになったのね。けちでけっこーだ。でも合意なら構わないわよね。た、たしかに白雨さまは誰かのものじゃないから兄ちゃんの言うとおりなんだけど、でも駄目！ 残念ねえ。諦めて。ここまで全部成人男性の声。

……周囲の雑音を無視してハクウは箱の中身を調べた。一つは変形式の杖、もう一つは青い髪紐だ。杖は普段持ち歩くときにはブレスレット状にすることができ、髪紐は魔法使用時の魔力消費を微妙に軽減するものであり、テーテの称号を得たお祝いの品でもある。ハクウはそれらをすぐさま装備し、さつさと魔の巣窟から飛び出したのであった。

余談だが、大教会を飛び出したはいいものの町の宿屋はすでに満杯、泣く泣く大教会に泊まることと決定されてしまい、夕食の席ではテルジオスからのあつつい視線とその部下連中からの嫉妬の視線でまともに食事も摂れず、ハクウは眠れぬ夜を過ごしたらしい。そしてネイアは普通に食べて普通に爆睡していた。

9・目には目を

夜というものは案外あつけなく終わってしまうもので、それはつまりハクウの睡眠時間が非常に限られたものとなることと同意義である。高位の魔獣である彼にとつて睡眠は必要不可欠なものではないが、思考処理速度を上げるためには脳に適度な休息も与えなければならぬ。

町についてから数日の間、ハクウは教会でひたすら絵を描いていた。なんてことはない、ただの留守番である。ネイアがひとり町に出かけている理由は簡単で、お金持ちを相手にするのならばハクウはいないほうがよいからだ。彼の専門は宝石なので、当然商売相手もそれなりの財産を持っている。金があると人間変なことを考えるもので、たとえば商品を高値で買ってやるから一晩泊まっていけ、などと言われることも残念ながら少なくない。もちろん純粋な好意なんかではないのだった。

夜伽に指定される相手は商人やその家族のうちの誰か、趣味の非常に性質の悪い輩ならば数人まとめてといったような、契約を結ぶ商人は実にえげつない選択肢を選ばされるなんてこともある。そういったことも計算に入れて商売をしている者もいるという現実はいかんともしがたい。特にハクウとネイアは顔立ちが整っているため邪な考えを持つ者も現れるであろうことは予想に容易い。ネイアはともかくハクウは絶対に拒否する。拒否されると余計にちよっかいを出したくなるような連中もいないはずがない。ならば最初からハクウと会わせなければいい。よつてお留守番。

夜眠れないことに関しては結界を張ることで対処した。一番上だけでなくその部下もソツチ系なのでほぼ一日中部屋に閉じこもつて

いた。借りている部屋にはキッチンやトイレ、お風呂もあったので引きこもっていても生存面では怪しまれるような問題はなかったのである。時間があるからと大作を仕上げたはいいが、それを司教であるテルジオスのところに持ち込んだときの周囲の視線には流石のハクウも辟易したらしかった。

ずっと部屋に引きこもっているのもなんなので、今回依頼した冒険者三人組がこの日に別の町へ出発するのを知っていたこともあり、ハクウは彼らの見送りに行くことにした。エノムからネイアが貴族と友人関係にあることを知らされていたせいも、若干ジェヤの態度が丁寧になっていたりヌミイを見て、ぶつちやけ食料や画材を購入するついでだったということは言わないでおくことに決めた。世の中には知らないほうがいいこともある。

市を見て回った後のこと、重たい荷物を軽々と抱えながら少年は歩いていった。観光都市の名に相応しく、対して役に立たない様々ながらくたが露店に並んでいる。旅行の記念なんぞ魔獣には必要ないでもまあ、見ているうちになにかインスピレーションが湧くかもしれない。そんな思いであちらこちらの店を覗きながらふらふらと歩き回っていると、なにやらそのペナント店のすぐ横、そうそう、恰幅のいい髭の男の店の左斜め後ろのあたりだ、細い路地裏からなにやら怪しげな雰囲気が漂ってくるではないか。今はまだ何も起こってはいないのだが、もうすぐ何かイベント的なものが起こるような気がしてハクウはこっそりと奥に進むことにした。好奇心旺盛だということとは必ずしも良いことではないのである。

光あるところに影がある、なんて言葉があつたりなかったりするが実際問題光だけでは影は作られず、なんらかの物質が空間に存在しているときに初めて影は現れるものである。だから影ではなく闇のほうが正しいのではないかとハクウも考えたことがあるが、語呂というか言いやすさの問題だろうと自己完結した。

ようするにキトエラルツエは全体的に治安のいい町と評されているが、その中には悪い連中がたむろするような場所も少なからずあるということだ。水清ければ魚住まずという話なのかもしれない。

大通りの辺りとは違って湿っぽいにおいがする細い路地を水干姿の少年はひとりで進む。周囲の光景も民家から廃墟へと変わっていったというのにも関わらず、なぜか人の出入りがあるようで足元は意外なほど清潔に保たれている。

……なぜか、だなんて、かまとぶつてみたがすでにハクウはその理由を把握していた。遠くに見える無駄に大きな廃墟から染み付いた死や性のおいが恨みつらみを纏わせて地べたを這いずり回っているからだ。悪い遊びの犠牲者にはあとで黙祷を捧げるとして、次の犠牲者が出る前にお仕置きしてやるというのもおもしろいかもしれない。見張り役の青年二人を手際よく気絶させ、てきばきと縛り上げながら物陰に隠れて今日買い込んだ食料等を魔法で収納しておいた。帰るときに再び外に出しておかないといけないなあ。

中に入れば予想通り、貴族しか使わないようなものが無残な姿であちらこちらに投げ捨てられていた。あえて具体的な名称は避ける。洋服の一種だ、ということは表しておこう。おおかたおてんばなお嬢様が護衛も連れずにふらふらと出歩いて間抜けにもとっつかまったのだろつ。そのあとは多分、普通に家に帰されたと予測できる。

殺して面倒ごとが起きるのは避けたいところだろうし、この世界では婚前に子供がいるなんてことも珍しくないのだから。

まあ、子供が居ると結婚しにくくなるので大抵教会等に預けられるのだが、それはそれで魔獣にとってもプラスの影響なので基本的にはどうだつていいことだ。しかし、ハクウはまだ生まれてから数年も経っていない。そして天狐族がつかい相手や家族を非常に大切にすることもあり、無理矢理そういうことが行われているということに不快感を隠せなかったのである。合意でなければする意味がない。幼さゆえの純粹さが彼をその結論に至らせたのだ。

悪いことをし始めるとだんだんとそれに慣れてくるのか、もつともつと強い刺激がほしくなるものらしい。複数の男の気配や薬のにおいが扉の中から飛び込んでくる。とりあえず様子を伺ってみた方がいいが、残念なことに怪しげな雰囲気になってしまっている。

ハクウが着替えたり被る面を選んだりしているあいだに事態は急激に悪い方向へと転んでしまったらしい。僅かにもれ聞こえる声から推測するに、やはり合意ではないらしい。自己満足に過ぎない、世界中で行われていることのうちのたった一つだ。だから別にハクウは彼女を助けてもいいし助けなくてもいい。そして彼が選んだのは扉を開けて前へ進むことであつた。

部屋には六人ほどの男が薬の影響で虚ろな目をした少女の周りに佇んでいた。ぎりぎりセーフといったところだろう。男たちはハクウの存在に気付きなやら口々に叫んだり笑ったり嗤ったりしていたが正直言つてもいいことなので聞かなかったことにした。

よくよく見れば男たちの中には数日前に出会ったばかりの侯爵に似た顔立ちの青年も混じっている。どうせ残念なことに侯爵の関係

者なのだろうし、その周りの人間も貴族かもしれない。なので生け捕りにしなければならぬとは面倒だ。だからこそ、ハクウは入り口から一步踏み出して彼女の通り道からどいたのである。

跳ねて飛んで叩きつける。決して狭くない部屋を縦横無尽に駆け巡る。身の丈に合わない大きな杵のようなものを振り回しているというのに、彼女の技術はそれはそれは見事なもので一人として殺していないし血ですら一滴も流れていない。

彼女が敵の掃討を行っているあいだに、ハクウは攫われて来たのであるう少女から薬を抜くことに専念した。幸いと言うべきか、粗末な麻薬の一種だったため解毒に時間はかからなかった。ハクウが少女に外套を着せて楽な姿勢を取らせているあいだに男たちは全員捕縛されたらしく、現在この部屋でまともな意識を保っているのはハクウと例の彼女のみである。他に人が来る気配もない。だからハクウは軽く服装を整えて笑ったし、彼女もハクウに傳いたのだった。

「初めまして、『兎』さん」

「お初にお目にかかります、我が君」

「出会ったばかりなのに面倒ごとに巻き込んでごめん」

「いえ。むしろありがとうございます。この連続婦女暴行殺人事件について内密に捜査していたのですが、どうやらこちらの組織の内部にも協力者がいたようでした。なかなか捜査が進まず困り果てていたところでした」

「よくそんな無駄で無謀な手段選んだね、そいつ。よそから来た誰かには効かない魔法なのに」

ハクウが言っている魔法は『ターゲットが一定範囲内に近づくターゲット本人には聞こえない警戒音が発せられる』というものである。今回は警備隊一人ひとりをターゲットに指定していたのだら

う。手間隙かけてやるのがコレだとか本当に馬鹿らしい話だ。『
兎』は完全に前衛型なので魔法関連は不得意なのである。

「この町は大きな警備隊があるので余所からの干渉を受けにくいのです。そのおかげで団結力は無駄に強いので、今回の件では罪の庇いあいになっってしまうかもしれないのがいささか面倒ではありませんね」

「まとめて処断しちゃえば？ あともう楽にしなよ、姿勢も口調もさ」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えますね」

彼女はあっさりと立ち上がった。見たところ二十にも満たないような温和そうな顔立ちの少女である。ショートボブの髪は山吹色、たれ目がちな瞳は萌黄色、身長はあまり高くない、服装は白を基調とした警備隊の制服だ。

「処断しちゃえれば楽なんですけどね、やっぱり下流とはいえ貴族が混じっているとどうにもこうにもやってらんねーのですよ」

「あー……そりゃ面倒だ」

「どーせ保釈金ばーんと出して終わりですよ？ 絶対再犯するだろうし、まじふざけんなーってやつです」

「警備隊なんて貴族の子弟による正義のヒーローごっこだから仕方ないよ」

「むう、無駄に貴族多すぎです。今の十分の一になっただって誰も困んないんじゃないかと思うんですよ」

「それは言ってる」

ハクウが何気なく外を見ると空が橙色に染まりかけていた。教会の礼拝時間までには時間はあるがそろそろ戻ったほうがいいだろう。ハクウはそれを彼女に告げてこの場を立ち去ることにした。

「おつと教会に帰る時間ですか？　ならば今夜またお会いしましょう」

「教会……あ、いいこと思いついちゃった。この事件の犯人一同の処遇はまだ決めないでね」

「ほほう、なにやら名案を思いつかれたようですね。ならばそれについてもお聞かせてくだされ」

「いきなりキャラ変わりすぎだよ。じゃあまた夜に」

「てへ。本当は送り届けて差し上げたいのですが仕事があるので……すみません」

「いいよ、オレは大丈夫。それじゃバイバイ」

重たい荷物を取り出して背負いなおす。たったか町を走り抜けてあつという間に教会に滑り込むと、自室に荷物をおいて何食わぬ顔で礼拝に参加したハクウであつた。セーフ。

その日の夜。白雨は部屋から抜け出して教会の屋根の上に居た。せつかく月が出ているのだから彼らにとっては当然のことである。『兎』の少女も白雨を待たせることなく現れたので早々に儀式を始めることにした。時は金なり。

ふたりで屋根の上に立つ。月が彼らを照らし、星は囁き、心地よい風はこの夜を祝福しているかのようだ。白雨はほどよい高揚感の中で自然と微笑んでいた。緊張はない。

「よし、始めようか」

「はい」

消える。屋根が消える教会が消える庭が消える木々が消える家が消える人間が消える城が消える町が消える草原が消える魔獣が消えるそして最後に光が消えて残るは空と月と星のみだ。ふたりの足元に魔方阵が浮かび上がり月色の光を放ち始める。そして空から月の淡い光がふたりに注がれた。白雨が祝詞を、彼女が寿詞を唱え始める。

『汝、いかなるときも我が剣として在ることを誓うか』

『肯定。君の道を阻むあらゆるものを引き裂き討ち果たして御覽に入れます』

『汝、いかなるときも我が盾として在ることを誓うか』

『肯定。死して我が身が朽ち果てようとも全ての害から御身をお守りします』

『汝、いかなるときも我が命に従うことを誓うか』

『否定。道に迷われたのなら命に代えても先を照らして見せましよう』

『善哉。これにて我が問いを仕舞いとする。汝の名を名乗れ』

『星崎夕菜、風兔の血を引く欠片の一つ』

『我が名は月乃宮白雨、天狐の血を引く欠片の一つ』

『天よ照覧あれ！ここに契約は成った』

ふたりが声を合わせて月に叫ぶ。光が、落ちて、融ける。世界が、ねじれ、反転する。

瞬きもしないあいだに世界が戻る。ふたりは一時的に裏側へ移動していたのである。鏡のないところで行ったせい、ふたりともそれなりに魔力を消費していた。立つてる必要もないので屋根の上に腰掛ける。

彼が行っていたのは永久主従契約というものだ。三皇族にはそれぞれに対応する、従者となる種族が存在している。天狐族には風兔族、天狸族には水鼠族、天狼族には炎狗族。永い間綿々と紡がれてきた歴史ある関係である。永久主従契約とは読んで字のごとくなのであえて多くは語るまい。

主となる者と従となる者の組み合わせは各種族の長によって決められる。今回のケースでは月乃宮白雨に宛がわれたのが星崎夕菜だということである。魔法型の天狐族を支えるのは戦闘型の風兔族が最も適している。そして若い風兔の中で実力が抜きん出ていたのが夕菜だったのだ。彼女は白雨が生まれてから森から出てくるまでのあいだ、ネリアウオルジュ教会からの派遣という形でこの町の警備隊に勤めていたのである。

「終わったね」

「終わりましたねー」

「夕菜はこれからどうするの？」

「ご同行しますです。とりあえず今の仕事やめてくるのでちよっぴりお時間いただきたいわけですよ」

「もちろん待つて。あ、そうそう、仕事といえば今日のやつらだ」
「どうしてやつたらいいですかね」

「目には目を、歯には歯を」

「ほほう、つまり………どういうことだつてばよ？」

「あいつらは襲われる側の恐怖を知らないからあんなことが出来る

んだ。だから一回襲われてみればいいのさ」
「ほう！！　だからこの教会なんですね！！」

白雨は頷いた。初日の身の毛もよだつような経験から思いついたことである。

「さすが白雨さま、お見事です」
「そう思う？」

口調こそ自慢げなものだが、白雨の表情は引きつっていた。

「ガチホモの群れに放り込まれる女好き！　そして真っ赤な薔薇が散る！」

「……多分そういう意味だけど、あえて言葉にする意味がわかんないや」

白雨とは対照的に夕菜は異常にテンションが高い。

「なおかつ強制女体化及び妊娠出産とかまじ鬼畜外道！　そこにシビれる！　あこがれるウ！」

「そ、そこまで言ってたくない！？」

「被害者女性と同じとなるとそういうことじゃないですか！」

「それで生まれてくる子供が可哀想だろ！？」

「えゝ」

「えゝ、じゃないよ！　この馬鹿！」

夕菜の男のドリーム粉碎レベルのあまりにもえげつない台詞に白雨は叫んだ。それに対して彼女は敬礼しつつも一言。

「ありがとうございます！」

「な、なんでお礼なの!？」

「我々の業界ではご褒美です!」

「業界ってどこだよ!？ …… あーもう、嫌になってきた。リセツトボタンってどこかな」

その後、白雨は適当に夕菜をなだめて帰らせた。最後まで渋っていたがなんとかなったと信じた。後日こっそりと教会の地下室に運び込まれた青年達には黙祷を捧げておいた。いろんな意味で、帰れるといいね。

10．采は投げられた

教会の一室、あれから延々と絵を描き続けていたハクウはちょうど一つの作品を仕上げたところで一息ついた。相変わらずネイアが帰ってくる気配はないし、つい先日契約した少女も仕事の引継ぎに忙しいらしい。

護衛が主君のそばを離れててもいいのかと思われるかもしれないが、ハクウは幼いといえども三皇族である。たいていのことはその実力でねじ伏せられるのだ。つまりは生命を脅かされるような事態には遭遇しないということ、もしなにかあったとしても例の護衛の少女が同じ町にいるのだからすぐに駆けつけられるので安全だと言いつける。

ハクウは完成したばかりの絵を慎重に乾かして保護魔法を掛けたあと、椅子から立ち上がって伸びをしてそのまま窓に近寄り月を見上げる。そうするたびに気分が高揚してなんでもできるような気になってしまふのだ。今日もいい月夜である。だから少し遅い夕食はきつねうどんにすることにしたのである。おあげ食いたい。

本日の気温や湿度を計測し水と塩の量を決め、粉を振るうところから始めて黙々と生地を練る。生地を寝かせているあいだに魚介類や海草からだしを取りスープの準備をしておく。先日稲荷寿司を作った際に多めに作っておいた油揚げをしばらくゆがいて油を抜き味をつける。この油揚げは豆腐を作るところから始められたというところにハクウ少年の油揚げに対する強いこだわりを感じざるを得ない。生地をよく踏みつけてコシを出させ再び寝かせる。本来なら結構な時間が必要となる作業なのだが今回は魔法を使うことで熟成を早めたのである。

うどんにこだわりがあるひとにとっては邪道としかいえない。しかし彼がこだわっているのはあくまで油揚げであってうどんではない。なのでハクウは麵を手早く切って茹で、黄金色のスープが湯気を立ち上らせているどんぶりによさうのであつた。その上に油揚げを丸々一枚どーんと乗せる。薬味と練り物も忘れずに入れた。

食前の祈りを終えたハクウは出来上がったきつねうどんをまじまじと見つめ、醤油とだしの香りを確かめた後にそつとスープを飲み、太めに切られたうどんをすすった。咀嚼しながら味だけでなく口から鼻に抜ける空気も楽しむ。そして一言。

「だめだ、まだ母上の味には及ばない」

おふくろの味がきつねうどんというところとなんだかなあ、というような気分になるかもしれない。しかし天狐族に生まれた以上油揚げの魅力から逃れることは出来ないのだ。彼らの油揚げにかける情熱は尋常ではない。

この世界の最初期の勇者が作り出した油揚げを分けてもらった当時の天狐族は一口でその虜になった。勇者の『元の世界で食べた油揚げはもつと旨い』という言葉聞いた当時の天狐族はこぞつて大豆つばい植物を品種改良し、ついには本物の大豆を作り上げたのである。そして油揚げをより美味しくするという醤油なるものも大豆から作られることを知った彼らが取った行動はただ一つ、醤油を作ることであつた。

長い年月をかけて研究を進め、醤油と、ついでに味噌もこの世界に誕生した。目的は果たしたものの、彼らの情熱はそこで止まるような生半可なものではない。どの油を使うか、豆腐をどのくらいの

文字通り、ハクウは飛び上がった。そのせいでバランスを崩し椅子から転げ落ちてしまい、扉の外から声をかけられて再び飛び上がった。急いでおとなしくなった人魂をしまいこみ扉の外の人物に用件を聞いてみたところ、ハクウが作っていたきつねうどんのにおいのせいでおなかかすいてしまったのだという。正直知ったことじゃないという気分だったが、とりあえずおじやを食べさせて帰らせた。

片付けを終えてもう一回例の人魂を喚び出す。今度はいきなり叫びだすようなことはなかったのでまじまじと見つめてみるが特に前と変化した様子は見受けられなかった。なので話しかけてみることにする。

「えっと、どうかしたの？」

『あうう』

「あうう？」

『ふにや』

「ふにやー？ ……あれ、もしかしてそういうこと？」

『たゆー』

「記憶喪失による幼児退行ってやつ、なのかな」

『むうー』

目の前でうにやうにやとなにか意味のない言葉を発する人魂を見て、ハクウは考えこんだ。明かりを落とした室内で、青い炎が揺らめいている。この人魂は、昔ハクウが食べた人間である。

魔獣だけでなくダンジョン内で死んだ人間の魂もダンジョン内の『いのちのばしょ』で処理される。だからハクウはこの人魂を『いのちのばしょ』に連れて行ったのだが、どういうわけか何度やって

もエラーが出てしまい、どうしようもなくなったので臨時処置としてハクウがそばに置いていたのである。物言わぬ塊なれど何年も一緒に居れば興味が出てくるのは当然のことで、いつしかハクウは時折この魂に話しかけるようになった。

両親は多忙で、ハクウが生まれてからわずか三年で仕事に復帰した。しかし彼が両親の愛情を疑ったことはない。母親の胎の中にいた五年間で自分が大切にされていることをよく理解していたし、独り立ちのための準備期間を過ごす場所としてあの暖かい森を選んでくれたのである。森にいたときは一ヶ月に一回は二人から手紙だつて届いていた。しかしどうしても寂しくなることもあった。ハクウはいわゆるいいところのおぼっちゃまで、もちろん偉いということは見栄を張らなくてはいけないときもある。だからこそ何でも話せる話し相手を作ったのだ。

『ぶわー、ちえ』

「えっと、とりあえず、どうしよう。どうすればいいんだろう」

『うやー？』

「ああ、うん。だいじょうぶ。オレは痛いとかないから心配してくれなくてもいいよ」

『わう』

「んー？ ……これってオレが話しかけ続けたせいかなあ。でもこの状態で『いのちのぼしょ』に連れていったらこの子は輪廻に戻るかも」

『ちゅえー、ひゃう』

「そしたらお別れかあ。ちょっと寂しいような気もするね」

『ふあ……』

「あ、もう寝るのね。おやすみ」

動きが鈍く不安定になってきたので人魂を仕舞う。それからもう

いちど、昔食べたこの人間のことについて思い出す。たしか十代後半の女性だったような。それで、なんだか死にたがっていたような気がする。しかしこれ以上は霞がかったかのように曖昧で思い出せそうにない。

「駄目だ、思い出せない。本人が忘れたがってだからオレにまで影響があつたのかな？」

あえて言葉にしてみれば、なるほど、そんな気もしてくる。本来天狐族は人間の脳を食べることでその個体の記憶を吸収することが出来るのだが、今回の件ではその吸収を阻害するようなこの人間の強い意思が働いたのかもしれない。あくまで憶測に過ぎない、しかしそう考えると納得できる。

「でも、多分、この人間は欠片も魔力を持っていなかったような……？」

謎は深まるばかりである。結局その日は結論が出なかった。次の日は鏡を使って朝一で『いのちのばしょ』へ向かったが、やはりこの魂を還すことはできなかったなのであったという。

ハクウがネイアに再会したのはそれからだいたい一ヶ月も後のことである。そのころにもなるとハクウは周囲ともそれなりの関係が築けていた。絵を描くことで自らの実力を示したこともあり、嫉妬の中にも尊敬が混じるようになっていったのである。しかし結果を張ることを止めなかったのは当たり前のことだといえよう。

疲れたようにベッドに腰掛けるネイアに対し、ずっとこの部屋にいたハクウは部屋中に広げていた画材類を片付けながら尋ねてみた。

「そういえば、取引ってどうなったのさ」

「聞きたいですか？」

「あ、やっぱりいいや」

嫌な予感を感じ取ったハクウが速攻で拒否したのにもかかわらず、ネイアは口を開いた。

「美味しくいただいてきました。もちろん、一家まとめて」

実にいい笑顔である。こころなしに肌がつやつやとしている気がする。たしか処分したのならそれなりの騒ぎになってもおかしくないような連中との取引じゃなかったっけ、とか、取引相手だとネイアが言っていた一家のなかには十歳以下の子供も居たような気がするなあ、とか、この兄妹はこうやって成り上がってきたんだろなあ、とか色々考えたが、結局ハクウは何も聞かなかったことにした。世の中には知らないほうがいいこともあるって母上も言っていた。

「……ところで、僕からも質問があるのですが」

「ん、なに？」

「ハクウさまの背中にくっついてるそれ、なんなんですか？」

「ああ、スノーだよ」

ハクウの声に答えるように、座っている彼の背中に巻きついていく水色の髪の少女が意味のない言葉を発した。見たところ五歳くらいで、少女の顔は見えないものの同色の髪のせいでふたりは兄妹か

なにかのように見える。

「いやいやいや、名前を聞いてるわけではないんですけど？」

「色々あってオレが連れてくことになった」

「はしよりすぎて意味がわかりません！？」

「かくかくしかじか」

「なるほどなー……ってわかるわけないでしょうが！！」

「ぴゃ！」

「あーもう、急に大声出すなよ。スノーが驚いて泣き出しちゃったじゃん。ばか」

「それは、すみません。で、でもせめて事情を説明していただけないと困るのですが」

ハクウは少女をあやししながらネイアに語った。曰く、これは元々ダンジョンで死んだ人間の魂なのだが、ハクウがこれの身体を食べたときに上手く記憶の吸収がされなかった。多少疑問に思ったものの、この魂を還そうとしたらなぜか不可能だった。一時的な処置としてそばにおいて気紛れに話しかけたりしていたら自我が現れた。審議の結果、しばらく手元において調査観察するべしという指令が下されたのである。

彼女にヒトガタ——変身魔法で作り出す生きる人形、本来の身体と同調して自在に動かせる肉の鎧——を与えたのは、これから彼女と会話を続けて動向を見守る必要があるからだ。仮に人魂のままにしておいたら周りの人間にとってはハクウが何も無い空間に話しかけているように見えて怪しまれるであろう。

「一応、名前はいくつか提示した中から本人に選ばせたから縛りはそんなにきつくはないはず」

「あまりにも締め付けたら観察の意味がないですし」

「そういうこと。でもあれだ、この子、まっすぐに『スノー』のカードに飛んでつたんだよ」

「普通に考えたら元の名前がスノーに関係しているとかですかね」

「どうなんだろうね」

「わかりませんね」

ふたりで首を傾げる。

「それと、スノーについてはすでにテルジオスにも話してある。ネイアの養子にしておくってさ」

「兄に話したんですか？ って、まさかもう養子になってるとは…」

…

「まさかのふたりめ」

「ほんとにまさかですよ」

ネイアは布団にたおれこんだ。いつのまにかふたりの子持ち。こだけの話、ネイアは、いや土岐有司は子供が大の苦手である。ちよつとしたことでも壊れてしまうし、煩いし、なのになにわがわからないくらいかわいい。うつかり壊したくなってしまう。朋友の息子である白雨は元から精神年齢が高めなので平気なのだが、今回のスノーという子供はどう扱っていいのかさっぱりわからない。でも決まってしまったことは仕方がない。諦めよう。そんなネイアをよそにハクウは無事スノーを寝かしつけ、空いているベッドに運んでいる。

「あと、一ヶ月くらい前だったかな。風兎と契約したよ」

「あの子ですね」

「知ってるの？ 星崎夕菜ってひと。人間名はティユファダ・ルーキフラ・イニアストレ」

「そりゃ知ってますよ。有名です。人間のあいだでは『無月夜行』

とかって呼ばれてます」

「へー」

「暗闇のなかでも絶対に目標を殺さずに捕獲するんです。彼女は『なんか暗殺者っぽくてやだ』って言ってますけど」

「ふーん」

たれ目がちで背も低め、いかにも草食系っぽい彼女の見た目からは想像できないあだ名だ。しかしその実力は本物で、ルーキフラの中でも第三級の実力を持つエリートである。ルーキフラは『ネリアウオルジュ教の剣』に位置する騎士階級の一種で、その名の通り戦闘能力に秀でていることを示す称号である。また、騎士だけではなくが称号内での階級は七つに細分化されており、第三級の彼女の本来の称号は『イニスⅡルーキフラ』なのだが名前が長くなるからと普段は名乗らないだけである。ハクウも同じく、彼の場合は第四級に値するので『ウラスⅡテーテ』となる。

蛇足だが『ネリアウオルジュ教の盾』はレスデュア、両方の特性を兼ね備えた『聖騎士』はロネフィスとなっている。

「そのティーちゃんが一時的に警備隊に参加してるからですかね」
「ん？」

「侯爵が僕らのことを呼んでるんです」

「あらら」

「悪いことしてるわけじゃないからふつーにしていればいいですよ」

「それもそうだね」

「というわけで明日お城へ向かいます」

「いきなりかよ」

「いきなりです」

というわけで、彼らはキュヴァルゼ侯爵の居城へ向かうこととな

つ
た
の
だ。

11・愛なら仕方ない

侯爵との約束の時間は昼過ぎだということで午前中はスノーのために費やした。本人は赤ん坊のようなものだし、ハクウには女の子が旅をするには何が必要かなんてわからないので全部ネイアに任せることになったのは当然の成り行きであろう。有力貴族とはいえ相手はネイアの友人であるためそれほど身構える必要はない。スノーがハクウにべったりなのはむしろ一人で勝手に動き回らないという意味では好都合である。

いかにも女性向けといったようなかわいらしい服が並ぶ店の中、ハクウは微妙に居心地の悪い気分を味わっていた。今日は久しぶりに正装をしている。つまりは水干姿なのだが流行のお店っぽいこの場の雰囲気とはずれているので他の客にじろじろと見られるのである。ネイアはなんだかんだで着せ替え人形ごっこを楽しんでいるし、スノーも女の子なのできゅきゅとはしゃいでいる。周囲の視線に耐え切れなくなったのか、ハクウは壁際から離れて足早にネイアに近づいた。店内で一番目立っているのはネイアだがそんなことは関係ない。

「ねえ父さん」

「んー、やっぱり女の子にはピンクだよね、って、どうかした？」

「ここから歩いてお城に行くなら、もうそろそろ買い物やめたほうがいいと思う」

「それは大丈夫。あいつが迎えをよこすって言ってたからね」

「迎え？」

「そ。クルマだからまだまだ時間はある。あと一刻くらいで鐘が鳴るからそれまでに時計塔集合」

「ならいいんだけど。……いや、やっぱりあんまりよくないや」

「はは、女の子の買い物には時間がかかるものだよ」

ネイアは女の子って年でもないよなあ、とは一瞬思ったがすぐにその考えは丸めてゴミ箱に捨てておいた。こういうのは駄目な予感がする。スルーするべきだ。

結局おかいものタイムはハクウにとって非常に退屈な時間だった。ひとりで絵でも描いていようかと思ったが、彼の姿が見えないと泣き出すスノーのせいでその場を離れることが出来なかったのである。

「さっきの買い物、ほんとに旅に必要だったの？」

「超必要だった」

「そのわりにはやけにひらひらしてるもの選んでたように見えるけど」

「女の子のおしゃれは重要事項なんだ！」

「この旅を舐めきった発言。正直年長者としてどうかと思う」

「まあまあ。これから足も手に入るわけやしあんまり気にせんでもええやん」

「よくねーよ」

不機嫌そうなハクウとは対照的にスノーは色々と買ってもらったのでご満悦である。彼女は買ってもらったばかりの大人っぽい紺色のワンピースに身を包んで、ハクウの左手を握って楽しそうに手を振りながらスキップしている。まだ歩行に慣れていないらしく、時折バランスを崩しかけるので転ばないようにと手を引いているのだ。若干苛々としているハクウも流石にスノーに向ける顔は優しい。通

りの出店で買ってもらった棒状の甘いクッキーをはむはむと幸せそうに齧っている少女と、呆れながらも彼女の世話を甲斐甲斐しく焼く美少年。一部の特殊性癖を持つ連中にとっては絶景かもしれない。

「こら、ほつぺたにおべんとくつつけたまま歩かないの」

「むー」

「おとなしくしてて、拭いてあげるから」

「んにゃ」

「よし取れた。喉は渴いてない？ ジュースでも買う？」

「じゅーす」

「欲しいんだね、よし」

「あ、ちよつと待って。店主との交渉は僕に任せてちょーだいな」

ネイアがさらつと先回りしてフルーツジュースを二人分注文する。店主も今までのロリシヨタ組のやりとりを見ていたせいかな値段をおまけしてもらえた。そこであえて甘味が薄くて酸っぱいほうをスノーに渡す。先ほどまで甘いクッキーを食べていた彼女は当然一口だけ飲むが嫌がる。なので渋々といったふうにはクウが自分のジュースと交換してやる。スノーが喜ぶ。見ている人が和む。見事な連鎖である。

「はしやぎすぎて髪型崩れてるよ。ほら来て」

「うん」

「二つ結びでいいでしょ。そこ座りな」

ハクウは道端のベンチにさつと外套を敷いて、その上にスノーを座らせた。幼児特有の細くてサラサラした髪を丁寧にブラッシングし、背中を覆うほどの長い薄水色の髪に映える光沢のある赤いリボンで二つに結んでやる。手鏡を渡されたスノーは出来映えに満足したようでなにやらうんうんと何度も頷いた。一ヶ月前は鳴き声っぱ

いのを発しながら纏わりつくだけだったのに、いつの間にかにすごい進化を遂げている。

そばでふたりの微笑ましい光景を見守っていたネイアの横に、いつのまにか彼よりも幾分背の低い少女が腕を組みながら立っていた。正騎士の制服に身を包んだ山吹色の髪の少女が呟く。

「面倒見のいい兄と無邪気な妹……実に素晴らしい光景ですな」

「あ、ティーちゃんだ。お迎えって君？」

「おうともよ」

「わあ男らしい。でもまだ時間じゃない？」

「気にしない気にしない」

「いやいやいや、ふつー気にするって」

「だってネーさんほつとくと絶対遅刻するし。あとこれからご飯なんだけど、いつしよにどうかなってやつですぜ、兄貴」

「相変わらずキャラクターがブレまくってるね」

「そんなあたしが大好きです」

「おお、言い切った。ま、これから昼食だからお誘いに乗らせてもらおうかな」

「いやほーい」

「棒読みで喜ばないでよね」

再び外套を羽織りスノーと手を繋ぎなおしたハクウがとことことふたりに近づいていく。ネイアの隣に見知らぬ少女の姿を見たスノーはこそこそとハクウの背に隠れてしまった。色々好都合なことに人見知りするタイプなのだ。

「ティユファダ、久しぶり」

「お久しぶりです、我が君。ああ、あたしが貴方様に会えない日がどれほど続いたのでしょうか。涙涙の色のない日々の果て、ついに

こうして再び会いまみえることが出来たのはまさに望外の喜びと言えましょう。さっそくですが、この感動を歌にしたいと思います！」
「やめて」

「ちっ、仕方ねえな。ここらで勘弁してやるか」
「柄悪っ！ ほら、スノーもびっくりしてる」

言いながら背中にくっついていいる少女を剥がし、しっかりと捕まえて前に引きずり出す。いやいやしていたのを無理矢理、というのは少々罪悪感に駆られるものがあつたが、これは彼女のためにも必要なことなのだ。心を鬼にして、逃げられないように左手で抱えて正面を向かせる。

「こっちがスノー。たしか直接見るのは初めてだったはず」

「ほうほうこの子がそうなんですな？ いやー見れば見るほどかわいいつすねえ。あたしはティユファダって言うっす。オッスオッス」
「何そのノリ……まあいいか。スノー、ちゃんと挨拶できるね？」

「……スノー、です」

「はい、よくできました。これからこのティユファダおねえちゃんといっしょだから仲良くしてあげてね」

「うん」

「えらいえらい」

ぽふぽふと髪型が崩れないようにそつと撫でる。ハクウ少年は意外と子供好きなのだ。そしてティユファダはおねえちゃんと呼ばれたことにぶるぶるしながら喜んでいた。ネイアは抜かりなく録音していた。もちろん、ハクウの両親に送るためである。こうするとハクウの両親は喜ぶ、ネイアは儲かるとお互いにウィンウィンな関係になれるというわけだ。断じて盗撮などではない。

昼食後、彼らは時計塔そばの大きな公園に来ていた。遊具なんてものは存在しない恋人同士の定番のデートスポットで、夜にはライトアップされる噴水もあるおしゃれな雰囲気のパークであり、ちょうどそういう時間帯なので食休みやちょっとした休憩として集まっている人間も多い。ハクウはてっきり乗り物——つまりクルマだ——がすでに用意されているのかと思って見回してみたが何もなし。だから先頭を歩くティユファダの服の裾を引いて尋ねたのだ。

「ねえ、クルマは？」

「心配ご無用！ あたしが今から造っちゃいます」

「……あー、そういうこと。スノー、びっくりしないだね。大丈夫だから」

「え？」

心得たように頷いて、ハクウは不思議そうな顔をしているスノーの手を強く握った。ネイアは邪魔にならないようにと子供ふたりの背後に回りこむ。その様子を見届けてからティユファダは行動を開始、今まで身に着けていた騎士制服の肩に付けられていた短めのマントを外して地面に敷き、その上に腰に佩いていた二刀を交差するように重ね、懷から透明な小瓶を二刀が重なった一点のすぐそばに置いた。そして居住まいを正し、目を閉じて詠唱を行う。

「エレア＝マーク・リユリユ＝エルペト・レピロ＝ン・スエ・ノグ・ア＝ローダ——翼持つ者よ、邪を切裂く絶対なる刃金を己が骨とし、連ね繋がれた無垢なる綾を己が肉とし、天上に満つる清廉なる雫を己が血とせよ。我が呼び声に応え、暗然たる大地に目映き姿を現したまえ——『宿命・連理』！」

彼女が言葉を発するたびに光が強くなる。そうして辺りを飲み込んで行き——目も眩むような光が収まったあと、その場に悠然と佇んでいたのは橙に近い色合いの、広げた翼がこの場の空を覆い隠すような、四足の巨大な竜だ。首が長く全体が羽毛に包まれているので一般的な魔竜の形からは外れている。なので周囲の人間の視線を独り占めしてしまっている状況である。ティユファダが造り出した竜は、まるで本物の生命体のように大きなあくびをしている。

この世界での竜は伝説上の生物である。これは『心象共有体に保存されている空想上の生物の情報を元に、武器、防具、聖水等を依代とし、一時的に現実世界と空想世界の境を捻じ曲げて現象を引き起こす』魔法の一種の産物であり、また伝説上の竜と区別するためには魔竜と呼ばれている。この類の術は空想魔法と呼ばれ、かなり難度の高い魔法として分類されている。

ここだけの話、歴代の元勇者の中にはこの魔法でアニメキャラクターのハーレムを作り上げた男もいたとか。この世界の心象共有体には当然そのキャラクターたちの情報はほとんど存在しないのだから、彼一人の妄想力でこちら側に呼び出せるほど大量の情報を送信したことになる。これはもはや、愛だ。愛なのだ。

「よーしよしよし、レンちゃんは今日もいいこですねー」

妙に甲高い声でぴやあと鳴く、もふもふとした竜の頭を撫でるティユファダ。彼女もまた、そんな愛の持ち主である。

こうして彼女の愛の結晶——そう表現するとなんだが彼女が単性生殖でもしたかのような——の背に乗り、一同はキュヴァルゼ侯爵の居城へ向かったのだった。飛び立つときに巻き起こした風で一部

女性のスカートがめくれたが、この場で巨大な魔竜である連理を呼び出したのはティユファダの愛だから仕方がない。奴は決して謝らないのだ。

約一名にとっては優雅な空の旅のあと、やけに開けた居城の庭へ緩やかに着陸した。連理は膝を折って首をたらし、乗客が降りやすい体勢を取る。そこから最初に降りてきたのは爽やかな笑顔のティユファダ、続いて青い顔をしたハクウ、そして最後に気絶したスノーを抱えてふらふらとしているネイア。これから会談があるというのに満身創痍である。これはひどい。

「う、もうやだ、ティユファダの馬鹿」

「……ティーちゃん、直角カーブとか急降下とか連続宙返りとか、やりすぎ」

「てへぺろ」

「ちよつと、休ませて貰っても、いいよね」

「流石の僕もばったんきゅ……」

「最近仕事の引継ぎで忙しく、久しぶりに愛竜に乗れてテンションが上がった。今は反省している」

「ばかばかあーほ、どじまぬけー……もつと反省しろー」

ハクウも似たようなことをやらかしていたが、完全にそれを棚に上げた発言である。ネイアはつつこもうかと思っただが、よくよく考えてみるとハクウはまだ子供なのでやめておいた。むしろ問題なのはハクウの数倍は生きているティユファダが同じことをやっているという事実だ。まるで成長していない。

それからしばらくして。短い休憩でどうか体裁を整えたハクウたちは侯爵と向かい合っていた。ネイアと侯爵が親しげな挨拶するといかにも貴族らしい部屋の雰囲気ぐつと和らいだ気がする。

「遅かったな」

「全部わかってて言ってるだろ、侯爵さま」

「まさか。それよりお前、養子を取ったんだってな。それも二人」

せつかくだから見せてみる、そう言いながらハクウとスノーの顔を覗き込もうとするキュヴァルゼ侯爵はまだ二十五歳の年若い青年である。親族の不幸が相次ぎ偶然爵位を手に入れた今世紀最大のラッキーマンだ。なにより彼が幸運なのは親族の不幸が不幸のままであるということに尽きる。ぶつちやけ謀殺したのだが、本人の飄々とした爽やかな人柄が功を奏して十年たった今でも表立っては一度として疑われたことがないのである。

先代侯爵が亡くなったのは彼が十二歳のときだ。注釈しておくとは彼はこの死には関与していない。何年も無駄に骨肉の争いを繰り広げる醜い親族達に嫌気が差し、だんだんと気付かれないところから荒廃していく領地を見て、当時キュヴァルゼの分家だったクシュトリケ家の次男であった彼は決意したのだ。与えられた餌にすぐさま飛びつくわりに、肝心の餌が劣化していつていることにまるで気付いていない、あいつらが侯爵になるくらいなら俺がやるのが一番ましだ、と。その決意を聞いたネイアはもちろん彼を支援することにしたのだ。それこそ表も裏も全部まとめて。

その後は謀殺の嵐である。彼は父も母も兄も伯父も叔母も全部全部殺した。彼が所属しているネリアウオルジュ教会は偽装のプロである。そんな彼らが本気になればあつというまに事故死体の山が出る。

来上がる。まさかとある男性のキュヴァルゼ侯爵位の継承式の宴の最中に零位魔獣が現れるなんて誰も想像していなかった事態だろう。

そうして偶然転がり込んできた領地をどうにか経営していくために、嫁の実家であるカフカ家から借金をしたり人材を派遣してもらったりして現状に至るというわけだ。他の貴族に金を借りたりなんかしたら何を要求されるか分かったものではない。ただでさえ忙しい時期なのに、害にしかならない行動を取る馬鹿なんていない。この地を愛するものとして当然の行動だ。

つまり、彼とネイアは幼馴染であり、義理の兄弟であり、血なまぐさい絆で結ばれた親友なのである。そんな仲の男が養子を引き取ったというのだから興味があるのも当たり前だ。無遠慮にじろじろと見つめてくる侯爵に対し、ハクウは毅然とした態度で聖職者の礼を取って見せた。

「お会いするのは二度目となりますが、改めてご挨拶させていただきます。この度カフカ家に身を寄せることとなりました、ハクウ・ウラス＝テーテと申します。そして隣のこれは妹です」

「スノーと、もうし、ます」

「今はこうして普通に過ごしていますが、妹は呪いにより生まれてから五年のあいだずっと眠っていたのです。なので少々見苦しいところもあるでしょうが、なにとぞご容赦願いたく」

スノーはそういう設定になっている。そしていきなり流暢に話した幼い少年にあっけにとられたのか、侯爵は目をぱちくりとさせながら、しかし普段と変わらないような調子でネイアに言った。

「お前、こいつらを俺に任せてみないか」

「断固拒否する。いきなりなんなんだ」

「いやなに、単純に気に入った」

「おまえのそういうところ、変わんないよな。でも駄目だ」

「ふ、理由を聞こう」

「一度手を差し伸べたのなら、僕から離す訳にはいかないだろ」

そしてどや顔である。たまらず侯爵は噴出した。この親友は昔から変わらない。いつだって約束には誠実だ。

12・よく解る世界の現実（前書き）

この小説は『中世風、剣と魔法のファンタジー世界』を舞台にして
お送りしています。

12・よく解る世界の現実

「まあ、なんだ。子供たちがいればお前もティユファダもなんだかんだで残らざるを得ないだろ？」

「一石二鳥狙いつて、おまえ、あざといな」

「お前には負けるよ」

「違うない」

侯爵とネリアは気安い会話を続けている。生まれは違えど長年密接な友好関係を続けてきたからなのだが、この部屋にいるふたりの子供、ハクウとネリアだ、にとつては見知らぬ人間であることにはかわりがない。ふたりの表情は硬い。しかしそれは周囲が想像するような理由ではなく、スノーが隣に立っているハクウの手を強く握り締めているのはただジュースを飲みすぎたのでトイレに行きたいだけであり、ハクウが無表情で押し黙っているのは高次魔法を複数展開するために集中しているだけだったりする。

現在ハクウが行っているのは室内に存在する書籍の内容の複写、そして心象共有体内部に存在する情報部にその書籍がすでに保管されているかどうかの確認、確認が取れた書籍の内容は削除し、残りを完全な状態で新規保存するという地道な作業だ。こうして新規保存された書籍は別の地で再び物質化されたのち恒久化される。物質界と精神界の中間物質として新生させるということである。

いくら小さいうちから科学者となりそうな人間を囲い込んでも、大きくなってからそういったことを考えるような人間はもちろん存在する。そしてそういった人間が声を上げようとするのなら当然その意見を書籍として纏める。この世界で科学的なことを広げようとして町などで講演会を行ったところで『神への冒涇だ』とネリア

ウォルジュ教だけでなくマーシラクエルト教からも弾圧が行われるからだ。

そうなれば周囲の人間からの扱いも変わってしまう。助け合いが重要なこの世界で、そんな厳しい状況に置かれてしまえばまともに生きていくことなど不可能だろう。なので筆者の顔が分らないように書籍にして主張するしかない。それも研究の結果だと公言するようなお堅い書籍にしまえばどこから異端であることがばれるかわからない。現実のことであるのに、大衆に受け入れさせるにはファンタジーとして書かなければならないのである。実に屈辱的といえる。しかもそうまでして作り上げた本は常識的ではないから人氣がない。こうして今のファンタジーな世界が保たれているというわけだ。

それはともかく、こうした気の遠くなるような確認作業を行うことで異端者を炙り出すのである。流石に存在するすべての人間の心の中を常に監視するなど狂気の沙汰、もしうっかり強烈な感情を持つ人間の精神に触れてしまったら凶鬼へと変貌してしまう可能性がある。狂気は広がり狂鬼を生む。この世界が変わらずにあり続けるためには狂鬼は絶やさなければならぬ。それはつまり魔獣にとつて甚大な損失があることは間違いない。よって監視はしていない。

本来一次移行、これは物質の霊的情報化を指す、は天狐族の配下の書梟族が行う。体内で簡易情報塊を生成し、それを天狐族が管理している情報網に流すことで天狐族の負担を減らしているのだ。

心象共有体に接続し新規情報を動的に保存するための条件は二つあり、一つ目がティユファダのような多量でありながら綿密で、現実が存在できるほど濃密な情報塊を生成すること、もう一つは天狐族であること。このどちらかを満たす必要がある。なので一般的な

書梟族は当てはまらない。ちなみにこの城には書梟族はいない。慢性的な人手不足、いや獣手不足。というか新しい本を手に入れるなら広告屋や古本屋の店主をしているほうが手っ取り早い。貴族向けの大手本屋を経営しているのもいたりする。

また、危険思想を含まない書籍の情報も集めているのは、本というものが神に捧げる供物のうちの一種であるからである。神は直接的には現実世界に干渉できないため、書籍は物質化した後に特殊な魔法を使用し半霊的なものへと変換する必要がある。読めない本に意味などない。

ハクウが自分の仕事を淡々と消化しているあいだも話は進む。そろそろスノーをトイレに行かせてやったほうがいいと思う。が、しかしハクウは別のことに集中しているし大人たちは思い出話に忙しいしで彼女の味方はどこにもいなかった。

「それにしても、ティユファダの奇行が見れなくなるのは残念だ」
「ティーちゃんを相手にしておいて、よくそんなことが言えるよな」
「おもしろいだろう？」

「そうだけど、そばじゃなくてちょっと離れたところで見守りたい感じ」

「ふ、いつだって台風には巻き込まれておいたほうが楽しいぞ」
「そしてこの余裕だよ。腹立つわあ」

そういうネイアも余裕である。

「というかだな、お前が今でもそんなことを言っているのがおかしくてたまらない」

「それは……まあ、そうだけどさ。僕にだって計算外のことはあるよ」

「侯爵さまー、あたしが暇なのでハクウくとスノーちゃんを書庫あたりに案内してもよろしいですね？」

「ああ、いいぞ」

「相変わらずの軽さだな」

「……わけがわからないよ」

唐突に現れて答えは聞いてないと言わんばかりの態度で謎の宣言を行ったティユファダに対し、あっさりと許可を出す侯爵。感心するように独り言を言い出すネイア。展開が読めず頭を抱えるハクウ。トイレのことしか考えられない状態のスノー。実にシニールな状況だった。

これからネイアと侯爵のあいだで後ろ暗い会談が行われるらしいので、ハクウとスノーはティユファダに連れられて書庫へと向かっていた。スノーはようやくトイレに行かせてもらえたのでなんとか落ち着いたようだ。きよろきよろと目を輝かせているスノーとは違って興味なさげに壁の肖像画を一瞥したハクウは、やけに弾んだ足取りで先頭を歩いている変な少女に声をかけた。言うまでもなく、ティユファダである。

「随分信用されてるんだね」

「そりゃあもちろん。だってあたしたち、幼馴染ですもん」

ネイア繋がりで知り合ったのだと言いながら、ティユファダは大きな欠伸をした。どうやら満月の影響だけでなく多量の仕事による寝不足もハイテンションになっている理由の一つらしい。

「年が離れてるように思えるけど」

「周囲から浮いていたもの同士気が合ったんですよ」

「それは、なんとも言いがたいね」

微妙な顔をするハクウ少年。ティユファダはなんでもないような顔をしている。そして彼女はうつかりぶつかって落とした壺を何事もなかったかのようにもとの場所に戻した。ヒビなんて入ってない。

「やっぱアレですね、滲み出る神性みたいなものがその辺の人間を寄せ付けないんです」

「わあすごい。今の発言だけでも超浮いてる」

「うひゃひゃ」

変な笑い声を上げながら、ティユファダは次の扉を開けた。彼女が向かっている書庫はそれなりに離れた人の少ないところにある。ということは彼らの邪魔をする人間も少ないというわけだ。

「はいっ、ようやくごとうちゃく」

「これはまた……よく集めたね」

見渡す限りの本の山。読書嫌いが見たらすぐさま帰りたくなるような量である。ハクウは手近な本を一冊机の上に置き、備え付けの椅子に座って詠唱を始めた。だれか他の人間がやってきても怪しまれないようにするための。詠唱を行うのは本の量が多く全体の把握には高度な魔法を使わなければならないのと、情報処理時間の短縮という極めて合理的な理由がある。

どうせネイアたちの話は長くなるだろうからこの書庫内部だけでなく建物全体を魔法範囲の対象にした。そんなことができるのなら

ば先程わざわざ侯爵の前で秘密裏に魔法を行使する必要などなかったのではないかと思われるかもしれない。だが貴族に限らず執務室や私室などには広範囲魔法から逃れるための術式が建築の際に組み込まれており、この城もその例外ではなかった。いわゆるスパイ対策、通り魔などの攻撃魔法にも有効である。もちろんこの術式を組み込むためには相当な金が必要になる。お金持ちの皆さんは先行投資だと思って諦めてください。

今回侯爵やその家族の私室にあるものは確認できないものの、ティユファダが調べた限りでは特に希少性の高いものは見当たらず、一般にも広く流通している有名な小説や画集しかなかった。これならば他の場所で手に入れることも容易なので無理にここで情報を蒐集する必要もない。多分他のところから情報はすでに得られてる。ただし書庫においてある書籍については量が膨大すぎて仕事の引継ぎの合間に調べるということが不可能だったのだ。

集中し始めたハクウの邪魔をしないために、ティユファダはスノーを連れて絵本が置いてある本棚へと向かった。ハクウと離れるのが心細いのか一時は泣き出しそうになったりしたもの、ティユファダの無邪気さに絆されたのか半刻もしないうちに笑顔を見せるようになった。

教育も兼ねた読み聞かせをしていたとき、ティユファダはスノーが何かを熱心に見つめているのに気が付いた。視線の先を追ってみればそこには一冊の絵本、『われらがえいゆう』というところある勇者についての物語だ。この世界の人間の子供たちは誰しも勇者の物語を聞いて育つ。男の子は勇者の活躍に憧れるし、女の子は勇者と恋に落ちたお姫様に感情移入したりする。本人は理由を理解していないだろうが、多分人間だったころの記憶のせいでなんとなく気になったのだらうと思い、ティユファダは特に気にすることもなく彼女

にその本を読んであげることにした。

「と、いうわけで。スノーちゃんはあたしのことをおかーさんと呼ぶがいいよ!」

「え」

「ちよつと待った、オレ、そんなこと一言も聞いてないよ」

文字を教えられながら絵本を読んでいたスノーの横で、読み終わったところを見計らって突拍子もないことを言い出したティユファダに、思わず離れたところで魔法を行使していたはずのハクウが焦ったように突っ込んだ。

「あれれー？ 我が君つてば、詠唱途中で止めてよかったんですか？」

「そんなのとづくに終わってて現在脳内で情報処理中。ってそうじやなくて、ティユファダが母さんになるの？」

「そういうことですわよん。だって、そのほうが自然じゃねーですか」

今の仕事やめるにも、白雨さまの護衛をするのにも。ティユファダは能天気な顔で笑っている。確かにその通りである。その通りなのだが……彼女には驚くくらいに似合わない気がする。なんていうか、まだ子供にしか見えないし。

その後、ハクウの予想通りネイアと侯爵の悪巧みは日が落ちても続きその日は城に泊まるはめになってしまった。もちろん夕食はネ

イアとティユファダの結婚を祝うための豪華な料理が並んだ。ハクウは食事のマナーも心得ていたので、スノーには自分のまねをするようにと事前に伝えておいたこともあつて貴族との会食なんていう面倒なイベントを何事もなく終わらせた。

ネイアの妹である侯爵夫人は少女めいた美貌の花のような気品のある女性だった。彼女なら平民であつたことを周りからあれこれつかれる心配もなさそうだ。食事ときに粗相をした自分の息子をきちんと叱っていたところを見るに精神的にもしつかりしている人間なのであろう。実際にネイアも『今回の妹はすごく立派な芯のある女性だ』と言っていたし。

今回の会談のおかげでリジリプシーズ公爵に向けた紹介状を手に入れたので、きちんとした手続きを踏めば入場料やらなにやらが浮くこと間違いなし。こういうところは商人らしいちやっかりさを発揮するネイアであつた。ただ、貴族の紹介を受けているということには下手な行動は慎まなければならないということでもある。不安要素はあるような気がするがそれはもう気にしないことにした。すでにメンバーは固定されてしまっている。

首都アークフィナンドは遠い。しかし彼らにはティユファダの竜がついている。翌日は雲ひとつない快晴だった。侯爵たちに見送られ、彼らは快適とはいいがたい空の旅へと乗り出したのであつた。

上空へ行けば行くほど普段とはかけ離れた環境に置かれるため、竜を使った空中移動を好まない者は多い。現在のメンバーは狐と猫と兎と人、どれも空を飛ばない種族である。そのため彼らの周囲には何重にも複合結界が張られている。第一に竜の上に乗っていても吹き飛ばされず、それでいて飛行の邪魔にならないような独特の形の風除け、酸素濃度や湿度温度などの空調管理、太陽に近づくので

日光や紫外線を遮断・反射する、外部から見ると黒い塊に見えるが中からは周囲の様子が伺える結界などである。そのためコックピットのような見た目になっている。ちよつとしたロマンだ。

また、空中を行くということは地上にある関所を素通りするということだ。ネリアウオルジュ教の本拠地、ウインクルスとの契約により一国内を飛び回るときには関税を支払わなくても良いということになっている。国境線を越えるときは流石に関所を通過する必要がある。国境には堅牢な特殊結界が張られているために強引に突破するのは不可能なのだ。ただし、非常事態に限り、使用するとこの特殊結界を一時的に無効化するアイテムが教皇から提供される。問題の迅速な解決のためである。装備者を拒絶する結界を一時的に無効化するという伝説の装備品を真似たものだ。その伝説の装備品は勇者が冒険するときだけ使われている。

だったら陸地の上空ではなく海上を行けばタダで済むのかといえば、ところがどっこいそういうわけにも行かなかつたりする。海の上ではあらゆる魔法が使えない。理由は海がまだファンタジーな存在ではないからである。

順を追って説明すると、元々この世界は剣と魔法の世界ではなかった。あえて言うなら現代恋愛モノの世界だった。若干のファンタジーは混じっているが基本的にはリアルである。そこをリメイクというか、リフォームというか、リサイクルというか、とにかくそんな感じで作り変えて出来上がったのがこの世界である。地道な世界の改変作業の結果生まれたのが今の大陸であり魔獣たちだ。

そこで創造神は自分の仕事のほとんどを新しく創造した神々にぶん投げて、さらに余ったごく一部の仕事も魔獣に押し付けた。そして現在悠々自適なニート生活を満喫している。もちろん世界の改変

作業は途中のままである。『海』を改変する作業を担当させられた天狸族は今もじわじわと世界中の海を侵略していつており、新大陸の創造は三皇族が互いに協力しながら続けている。この世界のすべての海を改変しきつたら海にもモンスターが現れるようになるだろうが、それはまだまだ先の話である。

創造神がサバタージュを決め込んでいたら、そりゃあ魔獣たちも一神教ではなく多神教を立ち上げるといふもの。実際に頑張ってるのは最高神ではなくその部下たち。そして三皇族。世界の現実といふものは意外としょっぱい。

13・キミの隣の新世界

空中に不慣れな子供たちがいることも考慮し、ティユファダ的にはゆったりとした日程で進められた空の旅も十日ほどの時間を経てようやく終わりを告げた。上空から見たアークフィナンドはいかにもテンプレートでノーマルな『旅立ちの地に相応しい城下町』といった印象を受ける。実際に中に入ってみてもその印象の通り、普通で凡庸で特に面白みもない。そんなところに建てられた図書館なんて行く必要があるのか、ハクウ少年はそう思っていたが、現実とは時に彼の発想の斜め上の左くらいを通り過ぎていくということをまだ知らなかったのである。

現在夜八時ほど。水色の髪をした活発そうな少年と気弱そうな少女が仲良く同じ寝台の上で寝ている。念のために強固な結界を幾重にも重ねがけた山吹色の髪を活動的な長さにした可愛い女性、桃色の髪を無造作に流した色男を引き連れて部屋を出た。二人は静かに歩を進めながら、女性は不機嫌そうな顔で隣にいる男にだけ聞こえるように低い声を出す。

「なんでオレがティユファダの真似しなくちゃいけないわけ？」
「行けば解ります」

そう、現在ティユファダの格好をしているのはハクウである。一時的に人形同士を交換しているのだ。永久主従契約を交わしたことで作られたラインを最大限に活用しているからこそ出来る芸当である。人形の完全な複製よりかは遥かに楽、しかしそれでも面倒なことであることにはかわりがない。なぜ彼が彼女の身体を使わなければならなかったのかは……確かに行けば解ることだった。わかりたくもないようなことだったが。

図書館だというのに人通りの少ない道を進んだ先にある。疑問に思いながらもネイアの背を追って歩いていた彼女、ややこしいがティユファダの身体を借りているハクウである、の目に飛び込んできたのは……。

「……本当に図書館？」

「残念なことに、そうなんですよ」

カラフルな光で照らされた……いかにもいかげしい雰囲気をもし出す、大きな屋敷だった。看板には『オトナの図書館』と下品なキヤラクターが妙なところから喋っているかのような低俗な絵が描かれている。ハクウは帰りたくなかった。しかし入場料は貴族でもないとは払えないような金額なのでこの辺に住んでいる書臈族が気軽に入れるようなところではない。

ネイアに引きずられるようにして受付を済ませ、中に入る。こんなところなので、受付では顔や頭をすっぽりと覆い隠すヘルメットのようなものを渡された。残念なことに意外と人が入っている。ハクウは人目を避けるように、奥まった場所で適当な本を広げて魔法を唱え始める。嫌なことはさっさと終わらせるに限る。

確かに専門書はあった。房中術のだったが。マニアックな娯楽小説は確かにマニアックだった。性的な意味で。昔の貴族の日記を改編して作られたような小説もある。かつての生活を示す貴重な資料である。しかしむしろ性活。目のハイライトが消えた状態でぶつぶつと聞こえない程度の詠唱を続ける彼女、しつこいようだがティユファダの身体を借りているハクウである、を置いて、ネイアはひとりで読書を楽しんでいた。完全に自分の趣味で旅の目的地を決めた悪い大人だ。

嫌々ながら作業を終えて顔を上げたハクウは、なぜかこちらに近寄ってくる男性らしき人影を見た。ネイアではない。不気味に思ったので足早に持っていた本を片付けてその場を離れる。が、しかしなぜか付いてくる。ネイアは見つかからない。一階の様子を見渡せる開けた場所に追い込まれた。いざとなったら飛び降りることも出来るがそれは本当に最後の手段である。まさかいきなり攻撃してくるはずもないから、仕方がないので見知らぬ男に話しかけてみることにした。

「何か」

ハクウが出したはずなのに、元の声とはかけ離れた、かろうじて女性とわかるような声だ。どうやらこのヘルメットのようなものはボイスチェンジャー機能も付いているらしい。

「今晚、いかがですか？」

不意打ちでダメージを食らった。精神攻撃の一種だ。

「主人がいますのでお断りします」

月乃宮白雨には妻はいない。もちろん夫もない。なのに、この身体はティユファダのもので主人がいると答えなければならぬ。唐突に鬱になりかけた。

「旦那さんがいるからどうしたのですか。むしろ、だからこそ楽しいと思いますよ」

クソが。死ね。

「いつしよに來ているんです。それに、貴方とは無理です」
「何もご存じないのですね。旦那さんも他の方とお楽しみになっているころでしょう」

ハクウは知らなかったが、この図書館は一夜限りの相手を探す場としても使われている。というか主に単純な性欲発散の場として使われており、奥にはベッドもあるのだった。そしてネイアは下ネタ盛りだくさんのB級小説をニヤニヤしながら読んでいた。仕事しろ。

あれこれ拒否しているのにもかかわらず、男は引き下がる気配がない。……我慢の限界だった。不意打ちで懷に潜り込み拳で一突き。ちようどいいものがなかったので親指を握りこんだ一撃。男は身体をくの字に曲げ、体勢を崩す。そこですかさず追撃、胸の辺りに狙いを定めて回し蹴りを喰らわせた。すぐさまその場を離れようとしたものの、しかし倒れた男に足首を掴まれてしまった。舌打ちをしてその手を踏み潰そうとしたが、その前にハクウはあることに気が付いた、……残念なことに、気が付いてしまったのだ。男は明らかに興奮している。もちろん、性的な意味で。

意図的な行動ではなかったが、ハクウが最初に手に取った本は加虐趣味の人間と被虐趣味の人間がどうのこうの、という内容の小説である。はつきり言葉にしてしまえばSM小説だ。それもかなりハードな。こんなところでもこれまた奥まったところにあるのだから内容も相応なものだったりする。つまり似たような趣味を持つ、と思われる女性を見つけたから男はあれほどしつこく言い寄っていたのである。

この騒動は他の客が『嫌がる女性にしつこく纏わり付いている男がいる』と職員に通報したことで終了した。紳士的でない人物は強

制的に退出させられることとなっている。別室で職員がハクウに謝罪しているあいだ、ネイアは小説内の不可解な濡れ場について考えていた。この人間には腕が六本くらいあるのだろうか。……そんなことはどうでもいい。夫役としての仕事を放棄するな。

秘密を共有した者同士は仲が深まるというが、今回の場合はそれに当てはまらなかったようだ。しばらくのあいだ、元の身体に戻ったハクウはネイアに対してよそよそしい態度を貫いた。事情を聞いたティユファダも流石にハクウに同意した。事情を知らないスノーもそれに倣った。結果、ネイアは孤立した。

交渉の結果、なんとか許しを頂いたネイアであつたが、『どうせまたすぐに何かやらかすんだろうなあ』とすでにハクウには生暖かい目で見られていることには気が付いていなかったという。気が付いてたら今よりももっと行動が酷いことになるかと本能的に察知していたハクウが気付かせようとしなかったからだ。

さて、内容の是非はともかくとして最初の目的は果たしたと言える。となると次の目的地について考えねばならないのだが、ここで手を挙げたのは意外にもお気楽少女のティユファダであつた。彼女は目を輝かせながら言う。

「とりあえず、ウインクルスに向かいませんか？」

「理由を聞いても？」

もちろん！ 彼女はさういうと自分の懷から地図を取り出して机

の上に広げた。教団でも高位の職に就くもののみに支給されている正確な地図だ。タッチで拡大縮小も自由自在、なんだかとてもスマートだ。

「あたしってばおかしいことにルーキフラの中でもそれなりに偉い役職に就いちゃってるじゃねーですか？」

「自分でもおかしいとは思ってるんだ……」

「今までは臨時任務ってことでこっちにいましたけど、普通本国であるウインクルスで働いてるような立場なんですねぇ」

「オレとの契約のためにこっちに来る理由が必要だったわけだね」

「そのとおり。んで、ちゃんと仕事終わらせたいし、もう戻らないといけないんです。メンドーですけど」

「それって急がなくちゃいけないこと？」

「そのほうがいいような気がしますねー。途中の国で面倒ごとに巻き込まれたりしない限りは即時帰宅、みたいな」

「面倒ごとって、たとえば？」

「んー、こっそり奴隷市とかが行われるとかいう情報を聞いちゃったり、とか？」

まあ、このご時勢ですから、どーせなにも起こらないとは思いますが、すけどね！ ティユファダは輝くような笑顔で元気良く発言したが、今で何かのフラグが立ったことはもはや言うまでもないことであつた。なのでハクウとネイアは微妙な顔になった。スノーは昼寝をしている。

この不完全な世界では言霊が並々ならぬ力を持っている。そのせいで、祭壇で誓約などということを行わずとも、通常の場合でうっかり祝詞に近い性質を持った言葉の組み合わせを放ってしまうだけでそこから先の方向性が決まってしまう。今回の場合は『例えで出した意見をすぐに否定する』というもの。そうすると大抵、例に挙げ

たことに近い事象、みたいなものが起こるのだ。

とはいえ、特定の言葉の組み合わせにより生じる言霊の力は絶対ではない。また、発言者によって発現力も、さらには効果すらも異なったりする。だがしかし、残念なことにティユファダは天性の能力者だった。しかもどちらかというと負の方向性を持った事象を引き寄せるというタイプの。ひとは彼女を、トラブルメーカーと呼ぶ。または死亡フラグメーカーでも可。

フラグを建ててしまったものは仕方ない。特にハクウたちがやらずに済むならいいこともないので彼女の提案に乗ることにしたのだ。それに、ウィンクルスにはハクウの両親もいるのだからちょうどいいかもしれない。……白雨少年もまだ子供なので親が恋しくなるのも当たり前のことであつた。

「……旅の計画の続きを考えよう」

親に会えると思つてちよつぱり笑顔になつたハクウはティユファダが広げた地図を指でなぞつた。その軌跡がじんわりと光る。その様子をいつのまにか起きてきていたスノーが興味深そうに見ていた。彼女も地図に手を伸ばそうとしたが、それはティユファダがスノーを抱えることで阻止された。おとなしくなつたので再開。

「アーキトレクから西へ向かうわけだから、バロンギロンは絶対通らなくちゃいけないね」

指先で国名をなでる。文字が光る。

「そしたら次はテルテラスト」

「お天気研究所があるところですね。それしかないんですけど。ス

ノーちゃん、お天気研究所つてのはねー、明日の天気をみんなに知らせてるところのことですよん」

ティユファダがスノーのための解説を付け加えながら、バロンギロンとテルテラストを繋ぐ。

「それからティ・ラウ・クーム大橋を渡った先がナリアカルツ」

「カフカ家の店がある大商業都市国家。治安は……いまいちかも。特に裏通り」

「確か国土のほとんどは砂漠なんだっけ」

「土地から出来るものがないから完全に貿易業のみで儲けてるんだ。皆お金のことしか考えてない。後ろ暗いことも山ほどある。犯罪スレスレむしろ向こう側。最近はウィンクルスからの派遣騎士隊による取り締まりのおかげでちよつとはましになってるという噂」

でもまあ、スノーちゃんから目を離さないようにしたほうがいいね、とネイアは続けた。ここはあくまで宿屋の一室。自分の子供相手に敬語を使う普通の親なんていない。ただしティユファダは例外とする。

「それでやつとウィンクルス。ネリアウオルジュ教総本山」

我ら魔獣の本拠地でもある、言葉に出さず心のうちで呟いた。ここにはスノーがいるので下手なことは言えない。どこで何を言い出すかわからないし。

「まずはバロンギロン、何か用意するものつてあるかな」

「ひろーい国土を通り抜けるには食料って大事。でもあたしたちにはレンちゃんがついてるんだぜー!」

「じゃあ僕は持ち物に余裕が出来るわけだ。遊牧民相手に肉以外の

食料品でも売ろうかな。あとで買い込みに行つてこよ」

「衣料品とかは？」

「あ、それもいいかも」

バロンギロンは遊牧民達が暮らす平坦な国である。遊牧民族である彼らは皆一級の戦士であり、元々狂鬼になりやすい種族の一部魔獣が多く棲むかの地でも意気揚々と暮らしていけるという人並みはずれた力量の持ち主たちだ。冒険者のランクと比べると、遊牧民たちの実力の平均はゴールドクラス。もはや種族が違っているとしか思えない。戦闘民族といったほうが正しいのではないかと思われがち。しかしこれでも一応人間である。じゃあ魔王を倒せるのかという疑問については、残念だが、彼らでも魔王にはかなわない。その理由はレベルの上限にある。

魔獣たちの長年の研究の成果によると、この世界の人間のレベル限界は100。歴代魔王の平均レベルは350以上。1ダメージすら通らない。先制全体攻撃で一撃死。前提からして無理ゲー。そこで我らが勇者様のご登場というわけである。気になる勇者のレベル限界はというと、なんと最大で1000まで上がるらしいといわれている。桁が違ふのだ。いろいろと考えることをやめたくなくなる。

そもそもレベルとはなにか。それは三皇族が最初期に組み上げた戦闘補助組織集合体の恩恵をどれだけ受けられるかを数字にして表したものである。もつという魂がひきつけている世界装飾物質の目安量を示す。戦闘補助組織集合体とは、その名の通り戦闘を補助

する目的で作られた霊的世界機構の一つだ。世界装飾物質は、簡単に言ってしまうと経験値である。世界装飾物質を多くひきつけていればいるほど戦闘補助組織集合体との繋がりが強くなる。

人間がレベルを上げるには人間もしくは魔獣を殺してその個体が持っていた世界装飾物質を奪い取るほかない。魔獣の場合はもともと世界装飾物質を生成する機関を生まれつき持っているため、基本的に人間が出会う魔獣は上限レベルに達している。つまり戦闘能力が均一、だからこそ人間のあいだで対処できる程度の魔獣はランクをつけられている。

戦闘補助組織集合体は、端的に言えばこの世界の戦闘システムを管理する存在である。敵意を持った者同士が接触すると自動的に戦闘パートへと移る。戦闘パートで戦闘補助組織集合体は身体能力向上、治癒速度上昇、詠唱速度上昇などの全体に拡散しているので微弱になっている地形効果を戦闘を行っている個体に集中させる。

また、簡易的なコマンドシステムも備えており、内容は『戦闘続行』と『撤退』の二つ。『撤退』を使うと戦闘相手と引き剥がされて適当な位置へと転送される。しかし『撤退』の効果が出るまでの所要時間もレベルに影響されるのでレベルは高ければ高いほどいいのである。ちなみに『撤退』を選んでいるあいだ、戦闘補助組織集合体は『戦闘続行』を選択している個体のみ地形効果を集中させる。たいていの場合勝てないから撤退するというのに、その相手がさらに強くなってしまうのだ。

また、戦闘補助組織集合体は通常戦闘においてのみ反応する。イベント戦闘では本人の力量のみが顕わになるのである。戦闘補助組織集合体は現在天狸族が管理しており、主に担当者の趣味でイベント戦闘が行われたりする。ちなみに魔王戦は通常戦闘。普通に撤退

できる。

『ゲーム』みたいで当たり前。この世界は、まだ作り物。『つく
りかけのおもちゃ』は今も自分で自分を創っている。

14・第一住民発見

さて、彼らが旅の目的地について話し始めてから一刻ほどの時が過ぎた。最初は皆真面目に取り組んでいたのだ。しかしわずか四半刻が過ぎたところに地猫族生来の飽き性が発動、『ちよつと塩ラーメン食べてくる』という言葉を残しネイアは逃亡した。

残されたのは三名、ただしその中の一名はほぼ幼児だし、もう一名はどうにも楽観的で膝の上の幼児のほつぺたをぶにぶにするのに忙しいときた。よってこの中では割と常識的な性格である少年は諦めとともに会議を終わらせ、もうどうにでもなれと好き勝手に絵を描き出したのであったとき。もう知るか、といわんがばかりのこの態度。

ネイアがバロンギロンの民相手に売りさばく品の準備を終わらせたのは会議から一月ほど過ぎたころのことである。そのあいだティユファダは色々言われないために冒険者ギルドに指名手配されているような、並みのものでは手に負えない狂鬼を大量に狩り、その始末書をネリアウオルジュ教会経由で本国に送り続けていた。

暇になったハクウとスノーは宿にすることで妙なやからに絡まれるのもご遠慮願いたいところだったので、日中は教会内で職員達にちやほやされ、ティユファダが報告書を提出しに来たときにいっしょに宿に戻るといふ生活を送っていた。ネイアもティユファダも世間一般的にはお金持ちの部類に入るためである。さらにハクウとスノーの容姿は特に優れているので、身代金目当ての誘拐のみならずそれ以外を目的とした誘拐が起こる可能性も考慮した。

誘拐なんて起こすのは犯罪集団だ。彼らを倒すこと自体はよくあ

る話なので問題ないが、しかしそれを成し遂げたのが生産職の少年だということがばれたら一気に面倒なことになる。それでも教会に泊まらなかったのは『もうあんな緊張する生活は嫌だ』とハクウ少年が全力で拒否したからである。前回泊まった教会が特殊であった、なんていうことは彼を説得する証拠としては不十分だったのだ。

ネイアの準備が終わったことを知り、ならばそろそろ動き出すかと宿を出たハクウたちが見たものは、先に外に出ており宿付近の広場で佇んでいたネイアの元になんと運ばれてくる木箱の山であった。代表してハクウがネイアに尋ねる。

「これ、なに」

「せっかくティーちゃんがいるなら空路を使わない手はないと思って。国内中を飛び回って集めたから結構量があったりして」

「やりすぎじゃない？ こんなにあるのに本当に売り切れるの？」

「僕の口先三寸をなめちゃ駄目だよ」

どや顔で腕を組んでいるネイアの横に積まれていく木箱。中身は衣料品だったり装飾品だったり和多岐にわたり、食料品は鮮度を保つためネイアの内側に仕舞われている。と、ここでようやくすべての商品が揃ったようだ。一番下に置かれた鉄板が曲がらずに居られるのか少々不安になりそうな量である。

「……で、一応聞くね。これをどうやって運ぼうと思ってたの？」

「そりゃあ勿論……お任せします」

「やっぱりそうくるわけね……言っとくけど、本来オレは金属加工担当じゃないから失敗するかもよ」

「君の腕前を信じている」

ネイアはキリッとした顔で宣言した。呆れ顔のハクウは、それで

も言われたとおり、木箱の横に置かれた鉄塊に魔方陣をあつというまに書き入れて呪文を唱え始める。見る間に形を変えて木箱を覆い隠すようにうごめきだす鉄塊だったものを、普段この広場を使っている、現在はただの野次馬である住民達が間の抜けた顔で見ていた。補足説明、ネイアはこの広場の使用許可をきちんと得ている。

鉄塊はさらに姿を変えていき、ついには鉄板と合体して木箱を包む丈夫な檻として生まれ変わった。上底にはティユファダの竜が掴みやすいように取っ手のようなものをつけ、底が抜けないように強化固定する魔方陣を黙々と掘り込む。もはや周囲の視線なんて気にしていない。

すでにティユファダという絶対的な戦力が彼の傍に存在している以上、こうしてとびきり異常ではない程度に派手な行動を行い目立つというのも次の勇者のお供となることが決まっているハクウ・テ―テ・カフカにとってはむしろ都合だといえる。小さいころからその才覚を表していた天才少年というネームバリューがあれば、年若くとも外部の連中に文句は言われないのだから。

この場からの出発手続きを終わらせたネイアの手を借りてティユファダの竜に乗り込む。スノーはすでにティユファダに抱えられているのでこれにて準備完了となった。今回の広場は狭かったため、周囲に結界を張らないと建造物を吹き飛ばす可能性があった。つまりここでもハクウ少年が活躍したのである。

聖職者ではないネイアとスノーは言うに及ばず、ティユファダは元々身体強化以外の術の才能がない風兎族だ。空想魔法や負荷軽減魔法を使えるようになったのは奇跡としか言いようがない。それにティユファダは町を巡回してどうたらこうたら、というより高速移動による敵本拠地の殲滅に使ったほうが役に立つ、なによりも戦場

に向いた性質を持つ者である。

アーキトレクを抜けるまでの旅はこれまでに比べるとはるかに穏やかであった。商品を表に出していることで飛行経路や速度に気をつかわなければならなかったからである。どうでもいいが、この世界にも携帯用トイレというものが存在している。もしダンジョン内で催した場合、排泄物のせいで魔獣に見つかる可能性は高い。よつてなるべく臭いが広がらないような消臭効果のある携帯用トイレが普及したのだった。

ただし土に還るようにするため紙製、つまり使い捨てなので元値が安くても節約とかほざいてケチってそのまま、という冒険者も低級ダンジョンでは多い。山や森などでは多少まだが、洞窟や遺跡系統のダンジョンは本当に酷いことになっているので月に一度清掃活動が行われるほどである。蛇足終了。

あれだけの荷物を持ち込んだので国境の関所ではうっかりぼったくられそうになったが、ここで活躍したのがティユファダである。外見こそおとなしそうな少女だが中身は零位の狂鬼も真つ青な戦闘狂。当然彼女の異名は世界各国へと広まっており、騎士制服を身に纏った彼女の姿を見たところある男は泡を吹いて倒れた。そうして、彼女の心をこめた説得により適正な料金で通過することが出来たのである。料金はいらないと言い張っていた兵士もいたが、宗教的な集団、しかも公的に属している以上規則を破るのは拙いというティユファダの主義主張により、通行料金を渡してその場を立ち去ったのであった。

バロンギロンに入ってからも穏やかな旅は続いた。遊牧民族がこの国の住民のほとんどを占める国らしく、眼下には青々とした草原が広がっている。遊牧民たちが飼っている獣に刺激を与えないように高い位置を飛行しているため、スノーが怯えてハクウにべったりとへばりつき、彼らは竜の中心部に固定されているのでハクウにはこれ以上の情報を得られなかった。

この地に踏み入ってから二週間後、彼らはようやく遊牧民の一団を見つけた。降りていく際に攻撃を受けないようにサインを出しつつゆっくりと着地、するとすぐさま好奇心に目を輝かせた少年少女に囲まれてしまった。彼らを適当にいなしつつ、ネイアは団長に交渉を試みた。

話し合いの結果は二重丸、まずは食料品についての商談を始めた彼らをよそに、ハクウとスノーを竜の上に残し自分は鉄の檻の上に居たティユファダだったが、遊牧民の少年少女たちが彼女のことを呼ぶ声を聞いてしまったのでとりあえず降りてみることにした。勢いをつけて跳び、衝撃を分散しつつ着地する。そんな彼女を彼らは拍手で迎え、あつというまに周囲を囲まれてしまった。

「おねーさんはどこから来たの？」

「向こうにいるお兄さんとはどういう関係？」

「おねえさんはネリアウオルジュ教の人なんだよね？」

「その制服を着てるってことはそうとう強いんだ」

「あんなにいっぱい何を運んでるの？」

わらわらと好き勝手な質問を繰り返す彼らに、ティユファダはぱちんと一つ手を叩いて黙らせた。

「あーはいはい。質問は順番に答えます。仰るとおり、あたしはウインクルスでイニスのルーキフラとして働いてます。今回はアーキトレクでの任務を終えて本国へと帰還するところですし、その道中でこの地に住む皆様へ補給物資を低価格で提供してはどうかという提案がありましてこうして運送している最中であります」

「あのおにーさんとの関係は？」

「……えーと、昔からの幼馴染で、今は夫婦、ですね」

なんともいえない表情で質問に答えるティユファダ。少女たちはきやあきやあと黄色い声を上げていて楽しそうだ。なんとなく、ティユファダはネイアに出会ったころのことを思い出す。確か風兎としての試練を乗り越えて人間の真似事をするようになったときからの付き合いだからおよそ十年来の仲だということになる。ネイアは昔から人の輪に入るのが上手くて、孤児という設定のティユファダを上流階級の子供の輪に上手く溶け込ませることすら簡単にやってのけた。長年生きているだけあって人の心を弄ぶなんてお手の物、といったところだろう。

どこか遠い目でネイアを見つめるティユファダを見て、周囲に集まっていた少女達が余計に盛り上がっていることには気が付かないのがティユファダであり、少女達の歓声に気付いてその場のノリでティユファダに手を振ってみせるのがネイアである。ますます少女達が騒ぎ始めたが、ティユファダの興味はすでに今晚の夕食に移っていたのだった。基本的に集中力のないところはよく似ているふたりだ。

一方竜の上のふたりはというと、スノーがハクウにしがみついたまま気絶してしまったので動くのも戸惑われるといった状況にある。かといってこのまま竜の背中に乗っているだけというのも退屈である。よってハクウはいつもの暇つぶしのときのように心象共有体情

報部に接続、適当な書籍情報を見つ白な板状のものに降ろしそれを読み始めた。天狐族は脳内で再生することも可能なので別段こうして視覚化する必要はないのだが、今日はなんとなくそんな気分だった。

一度ネイアの要請を受けて鉄檻を変形させた以外はひたすら板上の文字を目で追っていた。中身は極普通のレシピ本である。至極どうでもよさそうに板の上をはじき文字を滑らせるハクウの耳に、背後からちいさな音が聞こえてきた。途中から起きて肩越しに板の文字を見ていたスノーのおなかの音である。ハクウがちりと視線を送ると途端に真っ赤になって離れてしまった。

彼はついでに辺りを見回して、すでに日が暮れかけていることを知り、それならばとスノーをつれて下りることにした。竜の上から飛び降りるのはまだ慣れないが、それでもスノーの怯えっぷりを見ると逆に勇気が湧いてくる。先に飛び降りて、まだ竜の上で涙目になっているスノーを見上げてみる。放っておいたらいつまでもそうしてそうだったので声をかけた。

「スノー」

「できない……」

「大丈夫だから」

「だめ」

「駄目じゃない。いいから跳べ」

「む、むり」

「いいか、ちゃんとオレが受け止める。怖いことなんてない」

真面目な顔をして両手を広げているハクウを見て諦めという名の決心がついたのか、スノーは目を瞑りながら跳んだ。すぐさま落下速度を低下させる術を使い、ゆっくりと降りてくるスノーを受け止

める。体格差があまりないせいか、少しよろけたが根性で耐えたので倒れることはなかった。

両手に薄手の手袋をしているため右手を使っても何も問題はなく、そつと身体を離して地面に下ろす。スノーの目元に涙が残っていたのでぬぐってやった。そうしていると商品を見張っていたティユフアダが近寄ってきて、腰をかがめてハクウの顔を覗き込んでくる。

「おひるねは終わりました？」

「え、うん……いやいや、オレは寝てないよ」

「まあまあ。とりあえず、向こう行きましょーよ。あ、でもその前に檻に直しておいていただけませんかね」

「わかつてる」

鉄檻だったものに向かい合い、もう一度変形させる。隙間から盗まれないように、全面を鉄で覆って保護魔法を嚴重に掛けた。その上から結界を張る。仕事を終わらせて、スノーの手を引きながらティユフアダのあとを追う。彼らの影は夕日に照らされて長く伸びていた。

そして夜である。客人を迎えるための宴の中、いつものことながらネイアは酒に飲まれている。それでも言質をとられるようなへまはしないあたり、完全に酔っているというわけでもなさそうだ。あまり頼りにならないような気もするが一応ティユフアダが彼の傍についているので、夕食を食べたハクウとスノーは先に寝ることにした。

ティユフアダの竜に魔力を分け与えてから商品の詰まっている鉄箱の傍にテントを張り、さあ寝ようと思ったところで彼らのもとに一人の少年がやってきた。彼は非常に深刻そうな顔をしている。困

惑したハクウが声をかけると、彼はいきなりその場で頭を下げた。

「……どうなさったのですか？」

「神官様、ぼくの友達を助けてください！！」

「ええと、貴方のご友人はどのような症状を引き起こしているのでしょうか」

「一昨日からずっと眠り続けてて、それなのにみるみる足からやせ細っていったて、明らかにおかしくて」

少年は泣きそうな声で要領を得ない説明をしている。少し聞いただけでも解る、これは明らかに異常だ。ハクウも適当な上着を羽織りスノーを連れてテントから出て、泣いている少年を走らせつつ叫んだ。

「なぜもつと早く助けを呼ばなかったのですか！？」

「神官様は、まだお若いからって、母さんたちが、無理だって、でもぼくは、ぼくは！」

「ああもう、こんなところで泣くな！ 友達を助けたいんだろ！？ だったら走れ！」

途中でしゃっくり上げながら走る少年を励ましつつ、ハクウは走った。スノーを連れてきたのは彼女の身を守るためである。戦えない彼女をひとりで置いておくというのも危険極まりない。魔獣がよってこなくとも、人間がよってくる可能性は否定できないからだ。結界は自分から内側に招き寄せた相手には効かない。スノーひとりだったら騙されて連れて行かれるかもしれないのだ。だからスノーを連れてきたのだが彼女は今にも倒れそうになっている。

……色々考えて、そしたらもうめんどくさくなったのでハクウは少年とスノーを両脇に抱えて走った。身体能力を強化すればこのく

らい余裕なのである。

15・あとにもうと

目的のゲルへ到着するのには少し時間がかかった。一昨日倒れた少年の看護をしていた女性達は突然響いた『失礼します』という少年特有の高い声に驚き、中に入ってきた十にも満たないような水色の少年が妹らしき少女と自分よりも大きな男児を両脇に抱えていたことにも驚いた。

良く見れば、水色の少年は聖職者の服装を身に纏っている。その少年、つまりハクウは両脇の荷物をそつと降ろしてすぐさま室内の中心部で倒れている少年のそばにしゃがみこみ、診察を始めた。報告の通り、両手足の末端部から枯れていつているかのような有様である。それだけでなく目は落ち窪み、頬もこけ、僅かに見える腹部はへこんでいる。ハクウは少年から目を離さず、それでいて診断書を書く手を止めずに彼の傍で呆然としていた一人の女性に尋ねた。

「彼に薬は試しましたか？」

「え、あ、創傷回復薬と精神上薬、あとは栄養剤も使いました！」「既製品ならば正式名称を、手製ならば原材料名を教えてください」

女性は気持ちを切り替えたのか、ハクウの質問に対してよどみなく答えた。少年の腹部に右手を当てて容態を確認していたハクウは彼女の言葉を聞いて少し考えてから、こう切り出した。

「ならばやはり……これはおそらく呪いの一種です。オレが結界を張って抜けます」

「そんな、この辺りには呪いを使うほどの魔獣はいないはずでは……」

「実際に存在しているからこうなってるわけです。それについて調

査の必要がありますが、とりあえず早く処置を施さないといけません。皆さんはこの場から離れてください」

「はい！」

女性達は慌てながら治療の道具をハクウの傍にまとめて置き、ハクウの診断書に書かれたものを集めるために少年を連れて外に飛び出していった。現在室内に残っているのは横になって僅かに胸を上下させている少年と真剣なハクウ、そして不安そうな顔をしたスノ！。

「スノーは入り口で待ってて。オレとの血の繋がりを利用して結界を固定するから」

「うん……」

ハクウは少年の腹に魔方陣を描き、呪いを封じ込めるための小さな半透明の容器をその上に置く。それから、しばらく作業の様子をまごまごとしながら見つめていたスノーのほうを向いて、ハクウは詠唱を中断し安心させるように笑いかけた。

「大丈夫。ね」

「……うん」

スノーは俯いたまま、くるりと背を向けて入り口から出て行った。ハクウはそれを見届けてから詠唱の続きを始めた。遠くの宴はまだ続いている。

テルロース・マインツシエルト。人間によってそう名付けられたとある魔獣種がいる。三つ目の尾の長い四足歩行の赤毛の移動型小型種、第五位。夜行性で気が荒く、時折人里に下りてきて子供を攫う。これの上位種とされているのが紅色の体毛を持つテルロース・ホルビエ・マインツシエルト。上位種、というわけではなく、本当はただの『狂鬼となつたテルロース・マインツシエルト』だったりする。

上位種としての名が知られているのはテルロース・マインツシエルトが元々狂鬼となりやすい種族であり、常にテルロース・ホルビエ・マインツシエルトは一定数存在しているからである。つまり、どの魔獣がどの狂鬼になるかが決まっているということだ。

狂鬼は独特な魔力性質を持ち、そこに存在しているだけで周囲の生き物を作りかえる。このように狂鬼の魔力性質に影響されることを魔獣たちは『呪い』と呼んでいる。魔力に当てられた魔獣は狂鬼に、そして植物は新しく生まれた狂鬼に吸収される形で一つのダンジョンが内側から崩れていく。

ただ、狂鬼となりやすい魔獣の影響力はたいしたことがないのであまり深く心配することではない。問題は普段は温厚で精神的に安定している、要するに狂鬼になりにくい中位以上の魔獣種である。ひとたび彼らが狂鬼となると町一つが簡単に消える。それを防ぐために、その狂鬼よりも上位の魔獣が討伐に向かわなければならない。基本的に能力が上なら魔力に当てられることはないのだ。

さて、狂鬼の魔力に当てられた人間はどうなるのか。答えは『狂鬼を生む』。性別問わず腹の中で核が作られ、それに栄養を取られる形で宿主は体力を消耗していく。やがてもうすぐ生まれる、となつたら宿主は強制的に眠りにつかされて、その数日後に腹を食い破

って狂鬼が生まれてくるのだ。

今回の場合は宿主がまだ子供だったため、このまま体内で成熟を待つよりもすぐに外に出て他から栄養を集めるほうが効率が良く、幼体は判断したのだろう。実際にその判断は正しかった。ハクウが居なければこの人間の集団は明日にでも消え去っていただろう。

ひとりで外に立っているスノーはせわしく動き回っている女性達を見ながら居心地の悪い思いを味わっていた。この場にいる連中の中で彼女だけが何もしていない。だから何も見ないように目を瞑り、ハクウに教えられた通りに手を合わせてひたすら祈った。真つ暗な視界の中、中年女性が大きな声で指示を飛ばしている声が聞こえてくる。地を蹴る音、衣擦れの音、青臭い草の匂い。それらから逃れるように、スノーは祈祷に集中した。瞼の裏の暗闇は揺らがない。

スノーに昔の記憶はない。しかし自らの兄と名乗ったハクウが何も心配は要らないと言って笑うので、だから彼女は自らの違和感に蓋をした。兄や両親が自分に隠し事をしているのはなんとなくだが知っている。だけどそれを口に出したらこの幸せな、まるで夢みたいな時間が消え去ってしまうとも思った。こうなるまえに、嫌で嫌で仕方がないことがあったような気がする。それがなんなのかはわかりたくなかった。だからスノーは口を閉じる。

どれほどの時間が過ぎたのだろうか、スノーはいつのまにか手を合わせたまま入り口の端でべたりと座り込んでいた。彼女があわて

て目を開けるとすでに東の空に太陽が浮かんでいる。無理な体勢で寝ていたので足はしびれて動かない。

背後のゲルの様子を伺うように、彼女が身体をひねって入り口の掛け布を見た、まさにその瞬間。中から現れたのは何かどす黒いものが蠢く半透明の容器を片手で抱えた、目の下にくつきりと隈を掬えながらもどこか晴れ晴れとした表情のハクウだった。途端に彼目掛けて走りよってきた先日の少年と先程まで走り回っていた患者の母親に踏まれないようにスノーはさつと身を引いてハクウを見上げた。スノーよりも少し淡い色合いの、彼の空色の髪が風に揺れている。

「ご安心ください。解呪は成功しました」

今の今まで詠唱を続けていたせいがかすれたような声だったが、それでも十分少年と女性には聞こえたようだ。彼らはそろってぼろぼろと涙を流しながら、お礼の言葉を感情の乗った強い声で言い始めた。ハクウは苦笑いしながらそれを止め、代わりに患者の少年に対する注意事項を説明し、またティユファダを呼ぶように頼んだ。このあたりの人間では手に負えない強さの狂鬼がいるというなら狂鬼退治専門職に就いている母の力が必要となるのだろうと彼女は考える。確か狂鬼は呪いを使う魔獣のことだったはず。

一通りの説明を終えたハクウは女性に渡された度の低い甘い果実酒を僅かに顔をしかめながら飲み、それから横で座り込んでいるスノーを起こして残りの酒を飲ませた。酒は水よりも保存性が高いことから遊牧民の間では一般的な飲料であることは兄から教えられていたが、初めての酒というものはスノーにとってはただ苦いものとは思えなかった。

そして兄の指示を仰ぎながら薬草を細かく切り刻んだり擂り潰したりしているうちに真剣な顔をした母がやってきて、兄の手から治療の道具の一切を奪うと兄とスノーのふたりをまとめていつのまにか設置されていたテントの中に放り込んだ。布越しに母や女性の話し声が聞こえる。よくわからないが、もうスノーがいなくても大丈夫らしい。

だからスノーは安心して不満そうな顔をした兄の腕を抱えながらふたりで横になった。ハクウが腕を外そうとすればするほどスノーは強く握りしめるので、ハクウは諦めて腕にスノーを纏わりつかせたまま目を閉じた。魔法を行使し続けていて本人の予想以上に疲れていたらしく、眠気はすぐさま訪れたみたいだ。スノーは兄の寝顔を見てから眠りについた。なんとなく、今だけは怖い夢を見ないと思った。

スノーが目を覚ましたのは昼を少し過ぎたころのことである。ちよつと心配性だけど優しくて頭のいい自慢の兄はまだ眠っている。普段は大人びた雰囲気兄が無防備に寝ている姿はなんだか可愛く思えて、スノーは兄を起こさないようにそつと手を離して静かにテントを抜け出した。

外では例の少年が寝ているゲルに何人も人が出入りしていて、思わずしり込みしてテント中に戻ってきてしまった。知らない人は怖い。でもおなかすいた。うんうん悩んで、多分兄もおなかがいっているだろうから、と外に出ることをようやく決心したスノーは再び外に出て近くでばんやりしていた暇そうな少女に話しかけてみる

ことにした。

「あ、あの」

「うん？ ああ、なんだ。神官様の妹御。うん、そうだね、どうかしたのかな」

「えと、あの、その」

「困ったね、どうも私は察しが悪いと罵られるほうでね、はっきり言ってもらえるとたすかるよ」

スノーは変な喋り方をする人に話しかけてしまったとすっかり後悔しながら、勇気を出して聞いてみることにした。

「あの……お母さんとお父さん、どこいるか、わかりますか？」

「私のかい？ だとしたら多分今頃はどこかの土の下だろうね。去年の暮れに魔獣に食われたのさ」

「その、違って、私の」

「ああ、成程。だとしたら最初からそう言ってくれたらよかったのに、君も小さいのになかなかいい性格をしているね。たしか、母御は魔獣討伐で、父御は村長のところじゃないかな」

で、それがどうかしたのかと不思議そうに聞いてくる少女に対し、すっかり苦手意識が芽生えてしまったスノーは『なんでもありません』と言って逃げてしまおうとしたところ、タイミング悪く腹の虫が小さく声を上げた。とっさに顔を赤くしながら腹を押さえたスノーを見て、少女は一言。

「はあ、ようやく理解したよ。君は空腹を感じている。そうだね？ だから何か食べるものを探しているわけだ。まずは両親と連絡をとって、と考えたのはまあまあ賢いな。でもな、あれだ。うちのちびすけを君の兄に助けてもらったという恩がある。だから君ぐらい

の年齢なら出会いがしらに空腹を訴えるなどという知性のない行動をされてもきちんとした対応をしてあげたというのに、まったく。君という人はなんで本題に入らなかったのかな。私は気が回らないと先に告げていただろ」

まあいいさ、君は私たちの料理を食べたくないみたいだし、とにかく私は君の父御を連れて来たらしいんだな？ と、まあ、一言と合わないほどの台詞を一息に言い切り、変で失礼な少女は颯爽と走っていきすぐさま姿を消してしまった。それからスノーは心配そうな顔をしたネイアに話しかけられるまで呆然としていたのだった。彼女の人嫌いが加速したのは言うまでもない。

ティユファダが帰ってきたのは翌日の早朝、少々搜索に時間がかかったものの無事標的を滅してきたらしい。なのでテントの外で報告会。

「だというのに、ティーちゃんはなんだか難しい顔をしているね」

「や、そりゃーあたしだって難しいことも考えますよう」

「なにか不安なことでもあるの？」

ネイアはティユファダのコートを受け取りながら質問をする。ティユファダはご自慢の竜に抱きついたまま、もごもご何か言っていたが当然何も聞こえない。なのでネイアは再び口を開こうとした、しかしそれを遮るような形でハクウが答える。

「どうせまた、人間の密猟とかでつがいが連れて行かれて狂鬼とな

「つたやつがこつちまで追っかけて来てたんだろ」

「いろいろ残念ですけどー、たぶんその通りだと思います」

「ここを通ったなら市が立つのは十中八九ナリアカルツだろうね。
我が国ながら情けない」

ネイアはやれやれと大げさに肩を竦めてみせる。まったく情けないともなんとも思っていないことがまるわかりの表情だ。そしてそのままハクウが男の子を救ったことでもらえたお礼の山を明るい表情で分類している。

ティユファダはというと、ぴょんと竜の背から飛び降りて、本国に飛ばす緊急連絡書をもそもと書き始めた。こちらもめんどくさそうな顔をしている。おとなたちが自分の仕事をしているので暇になったこともふたりはさつさと寝る準備を始めた。とは言ってもテント内で着替えるだけだが。

「スノー」

「なあに？」

「多分ね、次の国まで急行すると思うから、もう寝たほうがいいよ」
「どうして？」

「バロンギロンにはネリアウルジュ教の施設がないから。母さんが本国と連絡を取るには最低でもテルテラストまで行かなくちゃいけないんだ」

「そうなの？」

「そうなの」

そういいながらハクウはスノーの上に薄い掛け布を渡して、彼女から少し離れたところで横になった。できた隙間を埋めるようにスノーは手を伸ばして背中に張り付く。ハクウは僅かに身じろぎをして、首だけ曲げて耳をスノーに向けた。

「……なにか、あった？」

「ううん、なんにもない」

「えーと……ところで、夏は暑いよね。だから離れてくれると嬉しいんだけど」

「くつついてちゃ、だめ？」

途端にスノーから寂しそうな雰囲気を感じたので、ハクウは慌ててスノーを慰めることに徹した。はつきりいつて室内は魔法で適温に保たれているし、換気も自動的になされているのでくつついていても暑くはない。暑くはないが、正直ちよつと窮屈。

だけどまあ、こどもを泣かせるよりかはずっとましだと自分に思い込ませながらハクウはスノーをなだめた。その過程でスノーと向き合うような体勢になってしまったのは不可抗力だというやつだろう。こどもの相手は面倒だ、と自分も子供であることを棚に上げてハクウはスノーの頭をなでてやった。そしてふたりは眠りに落ちたのだった。

翌日、ネイアがハクウをからかおうとしてきたので一発蹴っていた。

16・些細なきつけ

国境線上に設置されている結界は元々国家間の戦争が起こらないようにするために作られたものであるが、これにある国で発生した狂鬼を通過させず国内に閉じ込めることが出来るという効果も後から組み込まれた。しかしこの効力の範囲は上位及び中位の魔獣だった狂鬼だけに限られている。

人間でも殺せる程度の能力しか持たないものまで効果範囲に入れようとする維持コスト、つまりは生命力の消費量が自然発生量を超えてしまい、そうなると大地が壊死していき結果として国内が荒れ果ててしまうのである。情報をまとめると、人間と一部の狂鬼は結界を通過できず、魔獣だけが自由自在に行き来できるということだ。

ちなみに魔王は特別措置でこの世界に生まれた瞬間、『再誕島』という名の処刑場に隔離される。魔王はこの島から出ることが出来ない。この島は魔王の魔力を吸い取りダンジョンのようなものに変化させ続けるという性質を持っており、この変化の際に魔王の魔力を島の中で消費することで外部の魔獣への影響を抑えるのである。

話は変わるが、ハクウたちはあの後バロンギロン・テルテラスト間の国境へと急行した。文字通り、急行である。ティユファダはまづ雲の上まで昇った。雲の中にはワープ装置が隠されているのでこれを使い移動時間を大幅に短縮したのである。ちなみにスノーは雲の高さまで上昇した時点で気絶、ハクウも移動を開始してから五分もたたないうちに無表情で聖書の内容を呟きだし、ネイアはというとなぜか正座しながら現実逃避していた。もちろん、ティユファダは言わずもがな。

飛ばしに飛ばしたので移動時間はたったの一日、それまでにバロンギロン内の遊牧民族を探すためにかなりゆつくりと進んでいたの
で合計移動時間は飛竜に乗りアーキトレクからバロンギロンを通っ
てまっすぐテルテラストへと向かったときより少し遅い程度、乗客
の体調以外は対外的には何も問題はない。

「……オレさあ、ウインクルスに着いたら聖騎士の試験を受けよう
と思うんだ」

「それがいいと思います……ティーちゃんの運転は、僕らにはちょ
っと荒すぎる」

「ええー？ このくらいが一番楽しいんじゃないですか」

「そう思ってるのはティユファダだけだよ。スノーなんて気絶して
たし」

拗ねるように言いながら、ハクウはネイアの背中中で気絶している
青白い顔をしているスノーを見上げた。特に目覚める気配はない。
彼女から視線を逸らし、前を向く。道行く人々は早足で石の敷き詰
められた道をかつかつと音を立てながら歩いていく。これからどう
するのか。それはすでにティユファダが本国への連絡を終わらせた
ので、現在はとりあえず宿にでも行こうかといったところである。

彼らは現在テルテラスト内の一都市にいる。天候研究所が有名だ
が、それ以外にもネリアウオルジュ教でテーテの称号を持つ者も多
く住む学術と芸術の国であるテルテラストは加工産業が経済の中心
となっており、国民全員が農業及び漁業に携わる者である隣国のフ
ーラチュットや牧畜が盛んなバロンギロンからの輸入で食糧を賄っ
ている。そういった理由で人が住んでいるところに田畑が存在せず、
あちらもこちらで灰色の石で出来た建物ばかりの見ていてもつまら
ない町が多くなってしまった。

「ウインクルスについたら、スノーはどうしようか」

「魔力供給は我が君が夜に行ってるのでしょ？ となると、放置するのは不味いかも」

「経過の観察もしなくちゃいけない、でもロネフィスになるなら訓練校に通う必要が出てくる」

「学校は男女別ですし、夜にこっそり出かけて、とか絶対に無理ですね。そんなしたら一発退学です」

「誤魔化すこともできるけど、あれって意外と面倒」

訓練校とはその名の通りネリアオルジュの騎士を育てる学校である。学校により当然カリキュラムは異なっており、ルーキフラ、レスデュア、ロネフィスと各称号ごとに別の授業が組まれていることが多い。また、学習期間もわずか一年というところもあれば、みっちり五年というところもある。

何も出来ないような初心者が騎士になりたいのならやはり五年間きっちりと学ぶべきであろうし、もともとある程度の戦闘能力を有しているのならばさつさと称号を得て位を上げていくほうが賢明だろう。訓練校で得られるのは最高でも五位のエナスまで、それ以降は地道に功績を重ねていくしかないのである。という時間の使い方を選ぶかは個人の自由だ。

そしてハクウが挑むのは勿論一年でロネフィスの称号を得られる学校だ。ロネフィスはルーキフラやレスデュアよりも給料が高い。なので入試の倍率も恐ろしいくらいになっているのだが、そんなことはハクウには何の関係もない。彼は天狐族の一員である。魔法は大の得意分野だ。近距離戦闘についても、過去に食らった人間の技術がようやく身体に馴染んできたのでロネフィスとしてやっていくのに十分な力量を持っているといえる。

問題はスノーの扱いについてだ。彼女が入っているのは魔力で生きた人形であり、その魔力はハクウから提供されている。普段スノーがハクウに寄ってくるのは魔力供給源に近いほうが身体などが安定するからである。もし今スノーがハクウから離されて体内の備蓄魔力が切れたのならその身体はただちに肉塊と化すだろう。

ふたりがあれこれ話し合うのを見ながら、ネイアはスノーを抱えなおして宿屋の扉を開いた。

「ハクウさまもティーちゃんもやらなきゃいけないことがある。だったら、普段は僕の手伝いでもしてもらったのはどうかな」

「それが一番安全だね。そうなると、まずはスノーに魔力変換のやり方を教えないといけないわけだ」

「はい、決まりましたね！ それじゃあ、あたしは今からナリアカルツに応援として行くことにします」

「い、今から!？」

「仕事があたしを呼んでいるのですよっ」

ティユファダはそういうと、ぴよんと弾むような軽やかな足取りでネイアとハクウの間をすり抜けていった。あまりにも自然な動きだったので普通に見送ってしまったが、現在人に預けている商品を運ぶのには彼女の竜が必要不可欠である。よってスノーのことはネイアに任せてハクウはティユファダを走って追いかける羽目になったのであった。

たしかにティユファダは立派な戦力になる。しかし応援に行くのが彼女でなければならぬ理由もない。よってナリアカルツに向かう必要はないのだとハクウたちが説得した結果、渋々ながらもティユファダはパーティに残ることを承諾した。今はふくれっ面でスノ一の寝ているベッドに座り、子供のように足をぶらぶらさせている。もう片方のベッドに寝っ転がっていたネイアが腹に力を込めて腹筋だけで起き上がり、なんとも眠そうな間延びした声を出した。

「さて、明日からどうしましょー？」

「どうしましょー、って……オレたちは魔法の勉強、おとなふたりは竜車で残り物をあちこち売り込みに行くんじゃないの？」

何を寝ぼけたことを、とまでは言わないが備え付けの椅子に座っていたハクウが困惑した表情で答える。

「やー、そうなんですけどね。テルテラストも治安微妙ですし」

「なるほど、オレとスノーが宿に残ってるのは危険かもしれないってことか。だったら、ちょっとうるさいけど竜車の中で勉強してればいい？」

「そうしてもらうのが、いちばんかもですねー」

「……眠いのなら、もう寝ちゃえば？」

「ういー……」

謎の言葉を残し、ネイアは眠りに落ちた。ベッドに横たわり丸くなる。それを見たハクウは立ち上がり、ネイアの靴を脱がして掛け布団をかけてやった。そして洗濯物を洗ったり乾かした服を畳んだりゴミを処理したりと細々しく動き回り、彼がようやく就寝準備を終えたころにはすでにティユファダすらも寝てしまっていたのであった。しょっぱい話である。

そして翌日。預けていた鉄檻を変形させ、座つていても体が冷えないように敷き詰めた布に魔法陣を描き、車輪部がうまく動くようにと魔法を使い、空を飛ぶときよりもはるかに小さくなった竜につけることでようやく完成した。いっそのこと既製品を買ったほうが早かったのではないか、というほどの時間がかかったのは御愛嬌と云ったところである。御者席にネイアが乗り込み、ティユファダはその隣、子供ふたりは荷物と一緒に竜車の中。全員乗り込んだのを確認してから竜は灰色の街を走りだした。

がたがたと揺れるような音が聞こえるが、内部は揺れないような工夫がされているのでハクウは落ち着いて床に道具を広げることができた。兄が何をしているのか気になったらしく、ちょこちょここと寄ってきたスノーに真剣な顔で向き合った。

「スノー、きみに言わなくちゃいけないことがあるんだ」
「な、なに？」

ただならぬ雰囲気スノーは小さな声で返事をする。そんな彼女の肩をつかみ、ハクウは言う。

「ちゃんと聞いて。スノーは生まれつき自分で魔力を作れない」
「えと、つまり、魔法が使えないってこと？」

「違う。魔法は使える。でも魔力が回復しないんだ。普通の人は魔法を使ったあと食事や休養とかで魔力を体内で作り出せるけど、スノーは使ったらそのまんま」

「……うん」

頭を回転させながら、ハクウの言葉を一つ一つ胸に刻み込むようにおとなしく話を聞いているが、あまりいい話ではないことは理解できた。知らず、指先が震える。その手を握って目を合わせながらハクウは続ける。

「魔力は生命の維持にも大きく関わっていて、体内の魔力を使い切ると……死ぬ」

「じゃ、じゃあ、魔法を使わなければ、いいの？」

「いや、普通に存在しているだけでも魔力は消費する。普通の人は平常時消費量よりも回復量のほうが多いからあまり一般には知られてない話だ」

「……だ、だったら、わたし、もう、死んじゃうの!？」

「な、泣かないでよ」

突然の死の宣告に驚かないほうがおかしい。ましてやスノーはまだまだ子供。泣きだして当たり前だ。そんなことにも気が付けなかったのは自分が基準だったからなのだが、そろそろそのあたりのことに気がついてもいいだろうに、ハクウ少年はどうにも他人の気持ち的理解できていないというかなんというか。とりあえず、彼はもうちょっとオトナになるべきだ。ただまあ、泣いている子供を放っておくほど彼は非道というわけでもないので、軽く抱きかかえて袖で涙を拭いつつ彼女が落ち着くのを辛抱強く待った。

「大丈夫だよ、死なずにすむ方法もあるから」

「……ほ、ほんと？」

「こんな嘘なんてつかないよ」

本来ならもつと早く言うべきだった。泣かないで、などと言うよりもよっぽど効果的な言葉である。そんな言葉を彼女が泣きやんで

から使うのは間違っている。

「これまではスノーが寝ているあいだにオレが魔力を供給してた。だけど、いろんな事情があつてしばらく一緒にいられないこともあると思う」

「……どこか、行っちゃうの？」

「今すぐじゃない。けどもう決まったことだから」

「わ、私もついてく！」

「ごめん、無理。スノーは女の子だし、それになにより戦えないだろ」

大きな声で必死に言われたものの、ハクウはごく普通にあっさりと断った。ちよつとは言い方というものを考えるべきである。またもやスノーが涙目になりかけている。

「えーと、ほら、たったの一年だし、手紙だつて出すし、それにまだしばらく先の話だから」

「……しばらく、つてどれくらい？」

「……半年以内？」

「だったら、そんなに先のことじゃないもん」

泣きはしないものの不機嫌そうになってきた。これはまずい、とハクウは慌てて話を切り替える作戦に打って出る。

「そ、その話とはかくとして。えっとね、スノーとオレは血のつながりがあるからそのまま魔力を供給できたんだけど、他のひとの魔力は一度変換しないと吸収できないんだよ」

「血がつながっていると、魔力も似ているの？」

「そうそう、そんな感じ。で、オレがスノーのそばにいられないときは父さんから魔力をもらつておいて」

「えと、どうやって？」

「相手の魔力を吸収する魔法。発動時に微量だけど魔力を消費するから、魔力がなくなりかける前に使う必要がある」

できれば毎日、ないとは思っけどもし万が一魔法を使ったあとはすぐに誰かから魔力をもらうこと。そう言いながら、懐から飾り紐を取り出しスノーの手首にしっかりと結び付ける。手を取られている少女は不思議そうに首を傾げた。

「……あの、これ、なあに？」

「補助装置。さっき言った相手の魔力を吸収する魔法って難易度のわりに効果が少ないから、魔法初心者にはこういうのがないと大変だろうと思って」

「あ、よく見たら、前の町に居たところにお兄ちゃんが作ってたやつだ」

「正解。ここについている魔石は昨日付けた。……そういえば、あの頃はスノーの傍を離れるなんて思ってもいなかったな」

思い返せば本当に赤ん坊のような状態だった。それが今やこうである。外見は六歳くらい、中身はもう少し大人びているかもしれない。このくらいの知能があるのなら魔法の使い方を教えてもいいだろう。

さて、魔力を吸収する魔法などという代物はあえて属性分けするならば闇属性である。吸血行為と似たようなものだ。魔力も血液と同じくらい生物にとって重要な存在、上級の術は禁呪とされているのは当たり前のことかもしれない。それはともかく、極稀に人間の中に生まれる魔力を作り出す器官を持たない者や、スノーのような生きる人形には必要不可欠な術だと言える。

前者は大抵生まれてから一年もしないうちに死んでしまうことが多い。それを避けるためには子供が生まれたら早めにお近くのネリアウオルジュ教会へお越しください。幼児に限り初診料無料、他の宗教を信仰している方も分け隔てなく対応します。様々な治療具を格安で取り揃えているだけではなく、医療のプロが親身になってサポートいたしますので、皆様お気軽にお越しくださいませ。以上が新聞広告からの引用である。

「じゃあ魔法の使い方について教えるよ。まずは体内の魔力を意識することから始めよう」

「はい、先生」

「なんでそんな呼び方？ …… そのほうが気持ち上がりやすくていいなら、別にいいけど」

すっかり泣き止んでニコニコと子供らしく笑い始めたスノーを見て、ちよっぴり『子供って面倒』だとか考えていたことはここだけの話なのである。ハクウ自体も子供だということは禁句だ。

17・初心者のための魔法講座

さあこれから魔法の使い方についての話を始めようとした途端に商談を成立させたネイアがふたりの近くに置いてあった商品を取りに来るといふハプニングもあつたものの、彼が現れたからといって特にどうというわけでもなかったのでハクウは氣を取り直して授業を開始させたのである。

きりつと眉を斜めにしながら椅子の上で正座をしているスノーの手元にはご丁寧にも細くて硬い黒い墨の芯を木片で挟み布で巻いた鉛筆のようなものと可愛らしい白紙のノートが用意されている。もちろん、表紙の無駄に細かく書き込まれた大輪の夏の花は、ハクウが『人間の女の子ならこういうものが好きはずだ』と彼なりに考えて描いたというのが真実である。どうにも手間隙かけるところを間違えている気がしないでもないが無駄に凝り性なのは天狐族の特徴の一つでもある。それに本人、いや本獣がことなく満足げなので、どっちでもいいんじゃないだろうか。

兎にも角にも今から初心者向け魔法講座を始めることにしたのだ。ハクウ少年はつい先日也使っていたまっ白い板状のものを竜車の内部に埋め込みそのそばに椅子を作り座る。ホワイトボードというよりもプロジェクトだ。ハクウが画面をノックをするようにこつりと叩けば、ぱあっと柔らかい光が白の上に現われて文字を映し出す。それを確認して、彼はくると少女に振り向いた。

「さて、これから魔法について教えるわけだけど」

「はい」

「そもそも魔法って何なのか知ってる？」

「え、うんと、えと……よく、わかんないです」

「だろうね」

スノーは形のいい眉を八の字に曲げながら、しょんぼりとしている。しかし彼女の先生役を務めている少年はずいぶんあっさりと彼女の発言を流し次の画面を表示させた。微妙に空気は読まない。

「まずは『魔』という言葉について。これについては、スノーの言った通り『よくわからないもの』という認識で構わない」

「い、いいの？」

「うん。生命体の体内で合成されるよくわからないエネルギー体を魔力、いわゆるヒトではないよくわからないものを魔獣、よくわからない法則の上で魔力を消費して目的の事象を引き起こす方法を魔法と呼ぶ」

「でも、あの、魔法ってずっとずっと昔から使われてるんじゃない？」

ハクウの説明を手元のノートに書き込んで、スノーはこてんと首をかしげた。彼女の疑問ももつともである。一応人間社会の歴史もうん千年続いているということはその辺の農民でも知っているほどの常識だ。

「別に、スノーだって仕組みが分からないまま使っているものはあるだろ？」

「……あ」

「それに……あー、ま、いいか。スノーにはまだ早いし」

「わ、私もお兄ちゃんとそんなに年変わんないもん！」

なにか言いかけて止める。そんな風にされたらついつい話の続きが気になってしまうのは人の性というものだろう。それに相手は自分と外見だけはそれほど差はないのだから、少しばかり馬鹿にされ

たと考えてしまうのも無理はない。普段は大人しい少女がいつもより強い口調で主張したのを見て、ハクウはぱちくりと瞬きをしてみせるといふ年相応の表情を浮かべながら口を開いた。

「……宗教的、文化的、政治的とか色々、面倒な理由が複雑に絡み合っているせいでわからないままにされているんだけど、本当に、詳しく聞きたいの？」

「う、えと、あの……あう……」

「無理に聞かなくてもいいと思うよ。血生臭い話も混じるし」

「……うん。やっぱり、聞かないことにする」

「じゃあオレも言わないことにする」

そう、本当に血生臭い話なのだ。遙か遠い昔に人の姿を取って町で暮らしていた魔獣の家から資料を盗み出そうとした人間を処分したり、とある秘境に住む民族の魔法儀式について調べようとした男が帰らぬ人となったり、王族のみに伝わる秘術について研究していた人間が海の藻屑となったり、つまりは色々あったのである。

だいたい、科学という学問は疑うことで発展するものである。その科学を発展させないようにするためにこの世界の人間は単純化されているので、彼らには魔法の根源的な理屈などという複雑なものは理解できないのだが、それでもあきらめようとしないう人間は残念にも多かつたりしたのである。

処分したほうがいいんだけどいちいち探し出さないといけないなんて面倒。でもやらなくちゃ。そんなこんなで『だったらもう宗教で自分たちに都合がいいように人間を管理しちゃおうぜ！』ということで生まれたのがネリアウルジュ教なのだ。きちんと教えを守れば滅多に魔獣に襲われない。当時の魔獣に対してまともに抵抗する術を持たなかった人間達にはまるで奇跡のような宗教の登場であ

る。当然猫も杓子も喜んでネリアウルジュ教の洗礼を受けた。どうみてもマツチポンプだとかそういうことはつつこんではいけない。

余談だが、マーシラクエルト教の根本は破壊、なのでこちらの宗教の信徒は攻撃的な魔法しか使えなかつたりする。理由は簡単で、そもそもの術式の本元が自己の感情だからである。

気持ちなどという曖昧なものは全く同じものを共有するなんてどう足掻いてもできないものであり、ただ一方通行の信号を発するだけ、しかもその解釈は受け取った相手によって変わってしまう可能性がある。だからこそ、マーシラクエルト教の魔法体系は攻撃性のみに特化することで無理矢理方向性を決め安定させているのだ。

もしこの魔法体系を利用して治癒を行おうとすれば患者は一発でお陀仏である。再生しようと思っただけで破壊してしまった、なんて笑い話にもならない。ちなみにネリアウルジュ教の魔法体系ならば何でもござれ。その自由度が影響して覚えることがちよっぴり多いのはご愛嬌。

「よし、そろそろ本題に入ろう。魔法の使い方だ」

「は、はいっ！」

「そんなに緊張することもないよ。こんな魔法なんて簡単過ぎて欠伸が出ちゃうくらいだから」

ハクウはサラッと何でもないことのように言っているが、普通の人間にとっては実にとんでもない発言である。一応人間のあいだで

は中の上程度の難易度だというのにこの態度。残念だけど、これがこの世界の人間と魔獣のスペックの差だったりするのだから仕方ないことだと諦めましょう。

「最初は体内の魔力を確かめてみよう。特にスノーは内在魔力量を常に認識しておかないと危ないし」

「はい、先生」

「あ、まだその遊び続いているんだ……じゃ、なくて。手段は……一番わかりやすいのでいいや。とりあえず手、出して」

ハクウは椅子から降りてスノーの横に立った。不思議そうな顔をしているスノーの差し出した手を取り確認するかのように軽く二度握る。

「今からオレの魔力を流すよ。よく注意して感じ取って」

「なんだか、ドキドキします……」

「いつもやってることだから、何も怖いことなんてないって」

ふにやりと笑って実験開始。彼女が起きているときにやるのは初めてなので、彼女の最大魔力量から比較して多すぎず少なすぎずちょうどいい量の魔力をゆつくりと流し込む。スノーが緊張で魔力を暴走させないためでもある。本人の能力はともかくハクウの魔力は規格外、一時的に回線を繋いでいるせいであまり妙な魔法を使ってしまうという可能性もある。じんわりと魔力を流し込みながら、ハクウは柔らかな感覚にうっとり目を閉じているスノーに声をかけた。

「……どう、どんな感じ？」

「ふわふわして、あったかくて……春のひざしの中にいるような……」

「魔力が何か、わかった？」

「はい……ずっと私の中にあつた、あたたかいものの正体………九割七分、はち……あ、今、いっぱいになりました！」

「正解。一発成功おめでと」

ハクウが繋いでいた左手を離せば、重力にしたがつてスノーの小さな手は膝の上に戻った。スノーは先程の感覚を確かめるように目を瞑っている。体内の魔力がきちんと回っているのがわかる。ハクウが見た限りでは上手くいったようだ。ならば次の段階へ進もうとハクウが自分の椅子の元に戻るための第一歩を踏み出した、まさにその瞬間、ある意味で予想していた通り、再び唐突にネイアが登場するのであった。なんだかやけにテンションが高い。

「なんだかえろい雰囲気になつてる気がした！」

「いきなり何の話だよ……」

「お、お父さん？」

はしごを軽々と登って現れた、桃色の髪を適当に後ろに流した父親役の美青年は初めて会ったときみたいに顔は赤いし酒臭い。見れば見るほど、ただの残念な酔っ払いと化している。仕事はどうしたのかと思ひ適当に三階建てにした竜車の下の段を覗き込んでみれば、なるほど、気分がよくなるくらいにすっかり何もなくなっている。あれほどあつた商品を見事に売り切つたらしい。

外見優男で酒には弱い、それでも長年生きているだけあって口だけの男ではないのだ。下の段を覗き込んでいたハクウの視界に山吹色の少女がぴょこりと顔を出して笑いながら手を振る。そのまま彼女はハクウの後ろでネイアの背中を擦っているスノーにも聞こえるような大きな声を出した。

「今からあたしが御者やるんでー、悪いんですけど、ネーさんのことよろしくお願いしまーす」

「それは了解。でも、なんで父さんは酔っ払ってるの？」

「最後の商談が物々交換で、ちょうど商品売り切ったタイミングでいいお酒が手に入ったからとその場で……」

「なるほど。駄目な大人だね」

ホントに駄目駄目だ。せめて宿に戻ってから飲めばいいのに。そう思いながらティユファダに手を振り、再びスノーたちのほうを向く。せつかくだからと無駄に大きく作った椅子にはうにやうにやと何かを呟いているネイアが寝かされていて、それを心配そうな面持ちのスノーが横で膝立ちになって見ているという状況だ。

ハクウが戻ってきたことに気が付いたスノーはちょこちょこと近寄り相変わらずの八の字眉毛でハクウを見上げてくる。そんな彼女を見て、ついでにネイアも見て、ハクウはネイアの少し前に新しい椅子を用意した。

「スノーはそっちの椅子に座って。まだ授業は終わってない」

「あ、はい！」

ぼかんとしていたスノーは慌てて飛び上がり着席する。いつの間にか例の画面は次の文章を表示していた。ノートを開いてその謎の言葉を書こうとしたが、なぜかそれは言葉の形を成さない。意味が解らなくて頭に血が上ってしまったかのようになにも考えられずいたところ、実に冷静な声がするりと耳から入り込んできた。

「スノーが持っているそのノートの品質だと、この呪文は書けないから今この場で覚えて」

「え、え、えと、どういう、ことですか？」

「呪文はそれ自体が一定の効力を持っているせいで、その呪文を書き込まれる本とランクがつり合っていないと本のほうが拒否するんだ。それを記してしまうと壊れるから無理、みたいな感じでさ」

「不思議……」

「スノーに渡したのは実は白紙の初級魔道書だし、そんなことが起こってもおかしくない。ちなみに魔法の呪文を普通の紙に書こうとしたら燃えるから気をつけてね」

「オーバーヒート、みたいなもの？」

「飲み込みが早くて結構。そっちの魔道書は他の初級魔法について纏めるといいよ」

あまり使わないほうがいいとはいえ、自衛手段はあって損しないから。そんなことを言って落ちてきた前髪を耳にかけながら、ハクウは椅子から転げ落ちそうになったネイアをどうにか魔法で助け、もういつそのこと困ってしまえとゆりかごのような形に変えてしまった。それを見て、スノーは疑問の声を上げる。

「どうして先生は呪文もなしで魔法が使えるんですか？」

「呪文は目的の事象を引き起こす公式を呼び出すためのもの、と言えればいいのかな。自分の中できちんと計算できてれば詠唱は必要ないんだ」

「……えと？」

「なんて言えはいんだろ……クッキーの型みたいなもの？ 自分の手で綺麗な丸を作れるのなら丸い型はいらない、とか」

「ああ、それなら、わかるような……そんな気がします」

今度は例え話が苦手なハクウが八の字眉毛になりながらも答えれば、スノーもなんとなく理解できたようではっと花が咲くかのような明るい笑みをそのいとけない顔に浮かべた。そんな彼女に笑顔を返しつつ、ハクウは説明を続ける。

「魔法自体はさつき渡したブレスレットを使ったほうが楽に使える。やり方は簡単、それに魔力を籠めて生物に触れれば発動するんだ。こつちの呪文は万が一それを失った時のために覚えておいたほうがいいと思うて」

「な、なるほど」

読み方は、と続けて歌うように流れるように発したその言葉は確かに強い感動とともにスノーの心の奥底まで染み込んでいった。これほど素晴らしい経験をしてしまったのなら、もう絶対に何があつたとしても忘れることは出来ないだろう。詠唱を破棄し見本を示すのを終え瞼を開いたハクウが、非常に感激に打ち震える彼女の姿をついつい二度見するくらい驚いてしまうほど、スノーは感激していたのだつた。彼女は呪文の持つ美しい響き、要するに魔力に魅せられたのである。

「……す、スノー？」

「え、うわあつ！？ ご、ごめんなさい！」

「別に謝らなくていいけど……何か、あつた？」

「い、いえ！ しっかりと心の中に刻み付けてただけです！？」

「……落ち着きなよ。そうだ、そのブレスレットには魔力を吸い過ぎないように制限をかけてあるから、その制限の範囲で貰える魔力の量に慣れてから詠唱のほうに挑戦すること。いいね」

「は、はい……」

慌てすぎてみつともない姿を見せてしまったと微妙に顔を赤くしながらしよぼくれるスノー。ハクウは彼女を見て少し首をかしげたりしたもの、別段泣きそうになっていゐるわけでもないからと気にしないことにしたのだつた。またもや微妙に空気を読めていない。普段はネイアやティユファダの個性に隠れていてわかりにくいが、

ハクウも微妙に普通ではない性格をしていたりする。なんだかんだで、彼らのバランスはいいのかもしれない。

18・灯火

ティユファダにはスピード狂染みたところがある。しかしそれに整備されてるとはいえ人間の住む街中を暴走する、などという暴挙に走らないくらいの良識はあるのだ。そんなわけで彼女はふわふわした暖かそうな翼を持つ竜が引くクルマで、主な住民層の職業的に日中は人通りの少なくなっている道を悠然と進んでいくのだった。

一方そのころクルマの中では、ハクウは相変わらずおろおろとしているスノーの視線を受けつつも、酔っ払って眠りにについているネイアの状態を確認していた。しばらくして、ハクウは彼女のほうを振り向かずに手招きをしてみせる。そして傍によつてきたスノーに一言。

「実際に練習しよう」

「……え？」

ここで一旦状況を整理してみよう。スノーは生まれつき魔力を生み出すことが出来ず、誰かから直接魔力を分けてもらえない状況が続くといずれ死に至る。今までは構成要素が近いハクウがスノーに合わせて微調整した魔力を定期的に補充することで彼女は生きながらえてきたが、ハクウは当人の事情により聖騎士となるために一年間ほど遠く離れたところにある学校で暮らすことが決まっており、このままでは彼女は魔力を得る手段がなくなり衰弱死することは間違いない。彼女が生きていくには相手の魔力を吸収、変換して自分に適応させるという魔法を使えるようにならなければならないのだ。

ただしその魔法は一般的に初心者向けではないとされている難易

度であり、ハクウが旅立つ時期も数カ月後まで迫っているという時間的狀況も含めて考えると、スノーは一刻も早く自分一人でもその魔法を扱えるようになったほうがいいに決まっている。

さて、現在この場には、魔法初心者の少女に協力する意思のある魔力提供者及び医療関係者が存在している。一名ほど気を失っているものがあるが、それはこの際問題ではない。ただの飲みすぎによるもので、特に体調不良を訴えているわけではないからだ。それに、医療関係者たる少年は相手の魔力を自分のものに変換する術だけでなく、自分の魔力を相手に適応させる術も熟知している。

つまりは少女が吸った魔力を彼が吸収し、再び魔力提供者に渡すという一つの循環体制が整っているのである。……もう一度言おう。現在この場には、魔法初心者の少女に協力する意思のある、魔力提供者及び医療関係者が存在しているのだ。あとは、語るべくもない。

なすべきことがあるときは光のような速さで駆け抜けていく時間というものを常に掌握しておくことは、いかに不死を誇る人にあらざるものとはいえどまだ幼き個体であるハクウには荷が重いものである。あれからスノーに魔力操作を教えているあいだにいつのまにか宿に着き、ティユファダがネイアを横抱きにして運んでいるという状況に目を背けつつも竜車を宿の主人の私有地に停めさせてもらい、ついでにあれこれ細々した仕事を片付けているうちにすっかり夜が更けてしまったのである。結論から言えば、スノーは無事魔法を覚えることが出来た。だから要するに、彼女がハクウから離

れても何も問題はないのだ。

となるとなぜかと聞くのも馬鹿らしいくらい当然のごとく面倒事が彼らのもとに舞い込んでくるわけである。日付が変わり、あれからずつと眠っていたネイアが気だるそうに起きたちようどそのころ、ネリアウオルジュ教団専属郵便配達人がハクウたちが思い思いの時間を過ごしている部屋の戸を叩いたのだった。

職業柄早起きにも慣れており朝に強いティユファダが深緑の制服に身を包んだ青年から配達物を受け取りサインを書いて彼を見送った。自体を察知したハクウがすぐさま部屋に結界を張りめぐらせ、そのあいだにティユファダは普段とはまったく違うひどく真面目な顔つきで手紙の内容を確認する。マイペースにも青年がいるあいだも続けていた身支度が終えたネイアがスノーを抱えて椅子に座り、これからの旅程についての会議が幕を開けたのである。先陣を切ったのはもちろんハクウ少年。

「……で、何だったの。それ」

「なんかですね、大物奴隷商人を逃がしちゃったらしいですよ」

「えー？ もつたいないーい」

「ですよ。あたしが居たら絶対逃がさないというのに」

「もつたいないとか、ちよつと違う気がする」

確かに大物商人ならば私財を肥やしているだろうから没収できる金額も相当なものになるだろうが、こういった場合の感想としては『もつたいない』という言葉に違和感を覚える。もしも普通の人間に聞かれていたら首を傾げられてしまうことだろう。人間のふりを続けていくのなら気を使わなければならぬのに、このふたりときたら結界が張つてあるからとはいえこの余裕。

「まあ、そいつがこっち方面に逃げてこようとしている可能性があるから、あなたたちは今すぐナリアカルツとテルテラストの国境間に向かいなさいという命令ですね」

「そこで待ち伏せか」

「ざつつらい。それで、ネーさんとスノーちゃんは どうします？」

「……お兄ちゃんには聞かないの？」

「このお手紙には『ティユファダ・R・I・カフカ』だけでなく『ハクウ・T・カフカ』の名も書かれちゃってるわけでして、いわゆる一つの規定事項ってやつかもですね」

「うわ、本当だ」

ティユファダが広げた上質な紙で作られた令状を覗き込んだハクウは、場違いにもこれほどつくりが立派なものに自分の名前が書かれていることに何ともいえない感動を受けていた。こういうところは年相応、むしろすこしばかり幼いといってもいい。ティユファダの質問を聞いたネイアはちらっとスノーを見て、『この世界でティーちゃんの隣ほど安全なところは少ないと思うよ』と軽い調子で答えるのだった。そうなればスノーひとりをこの町に残すわけがない。よって家族全員で何度目かの空の旅を味わうことになったのである。

このメンバーの主戦力はティユファダとハクウのふたりだ。スノーは論外、ネイアも一応暗殺術やらなにやらを習得しているが、まさかそれを表に出すわけにもいかないので消去法でふたり。また、直接戦闘系と魔法系、というようにふたりの役目がきっちりと分かれているので倒せない敵もないだろう。そんなことをぼんやりと考えつつ、ハクウ少年は高速で移り変わっていく空の光景を意識しないように心がけていた。まともに直視していたら、流石に酔う。

やはりというか、とにかく空の旅の時点で脱落したネイアとスノーを関所の仮眠室で休ませつつ、ティユファダとハクウは国境の結界に綻びがないかどうか調査を行っていた。特に問題も見当たらなかったので再び関所に戻りひたすら敵が現れるのを待つ。

事情が事情なので現在封鎖されている関所の前に、自分だけでもと賄賂で通り抜けようとして門前払いを食らった商人たちが表面上は穏やかに語り合っている。内心どれだけ腹を立てていようと、流石にネイアウォルジュ教団でも有数の実力者であるティユファダが巨大な竜を駆り上空を飛び回っている状況では打つ手がないというものである。

風が吹き始める。じつとりとした湿気を吹き飛ばすかのように強い風だ。本当に、わかりやすいことこの上ない。実力者と呼ばれるものはそれぞれ独特の雰囲気を持っている。隠す気があればまだましなのだがそれすらも行おうという意志がないというのはいささか問題があるかもしれない。現にこの場に残っている商人の中にも敏感にそれを感じ取って震え始める者が出る始末だ。

このまま放っておけば逃げ出したり暴れたり混乱の際に関所を突破しようとするものが現れ、これから起こる戦闘の邪魔になるかもしれないからとハクウが誘導し結界の中に閉じ込めておいた。彼らを見殺しにするのは簡単だが、特にそうすることの利点も存在しないのも確かである。ついでにハクウが活躍する様を見せ付けて評判を広げておけば数年先にある勇者との旅路において都合がいい。特に商人という各地を回る職業についている者はいい宣伝者になるだろう。なんともいえない地道な根回しだ。というか、そもそもハク

ウたちと同じ宗教を信仰しているのだから守らないという選択肢はないのだが。

林の奥深くから、見るからに作りのいいクルマが四足の首が長い鳥のような獣に引かれて道を駆けている。その姿が近づくにしたがつてぐんぐんと大きくなっていき、ティユファダの警告を受けて止まったときに確認できたその姿は、下手したら中級貴族が使っているそれと同等程度の大きさである。しかもそれが一つではなくいくつも連なっているのだから並大抵の人間は圧倒されてしまうに違いない。

相当鞭を入れられていたのか、クルマを引いていた獣は荒い息を吐いている。御者台から降りてきた男にティユファダが対応しているあいだ、ハクウは注意深く魔力の流れを視ていた。ティユファダの相手をしている男の笑顔が引きつり始めたころ、何の前触れもなく先頭車の扉から白髪交じりの恰幅のいい中年男性が優雅な足取りで現れた。若いころだけでなく今でも女性に囲まれて居そうな顔立ちの、高貴と言ってもいいくらいの雰囲気を持った男だ。歩きながら御者の男に声をかける。顔だけでなく声まで渋い。

「急に止まって驚いたよ。いったい何の騒ぎだい？」

「旦那様！」

「ああ、今彼とこのクルマの主に合わせていただけないかと交渉していたところでした」

「これはこれは！ 誰かと思えば、かの高名な『無月夜行』殿ではありませんか」

愛想よく対応するその姿からは彼がクルマの中に奴隷を数多く隠しているなどということは想像も出来ない。ハクウは男の素晴らしき演技を十分に評価した。すでに人間特有の魔力パターンを複数感

じ取っているのだから、あの男は間違いなく黒だ。

元来ティユファダの専門は戦闘であり、口の上手さで商売人になうはずもなく悪戯に時間は過ぎていく。しかしティユファダは一步も引かず、ついには上位ルーキフラ専用強制捜査権を行使するという手札を提示した。もしこれを使って相手が白だった場合多額の慰謝料を払わなくてはならないが、逆に黒だったときは容疑者の罪が重くなるという、一発逆転の可能性を持つ切り札。それを突きつけられた男は笑顔でティユファダがクルマの荷台に近づく姿を見ている。そしてそのティユファダが扉を開けようとした、まさにその時のことだった。

突如としてティユファダが開けようとしていたクルマから爆発が巻き起こる。いつの間にか魔獣に跨っていた中年の男は混乱に乗じて逃げ出そうとしたものの、それは成り行きを見守っていたハクウの唱えていた魔法によって叩き落とされた。ついで魔獣に着けられていた調教具を外せば瞬きをするあいだに遙か遠くまで逃げ去っていく。性能のいいハクウの耳には当然感謝の言葉が届いていた。

爆発に巻き込まれたティユファダは、そうであることが当たり前のこのようにご自慢の竜の上で仁王立ちをしていた。言うまでもなく、無傷である。そしてその場で強制捜査の件はともかく、公務執行妨害であることを高らかに宣言し腰の二刀を握りしめ跳んだ。只ひたすら直線移動をする。だからこそ速い。標的までたどり着き、彼女の刀が振り下ろされそうになったそのとき、再び爆発が起こる。炎と土煙が空を覆い隠さんがばかりに空間に広がっている。

「随分詠唱が速いな」

他人事のようにハクウは呟きつつ、ついでにこそそと逃げ出そうとしていた御者の男を気絶させた。彼には今の爆発の原因がわかっていてからこそその余裕である。一度跳び引いたティユファダの視界の先、例の中年男の前に、後ろの男を庇うように一人の少年が立っていた。ハクウよりも小さいのではなからうかという身長、虚ろな目をした赤毛の子供。その子供の背にみつともなく隠れている男は先ほどとは打って変わったような姿だ。

男は何事かを命令し、それに従い少年は動き出す。一番近いティユファダ、ではなく見るからに後衛職であるハクウを狙ってその白い掌を向けた。ハクウは慌てず騒がずに設置していた結界を発動させる。結界の中にいるのはティユファダと赤毛の少年、中年男も入れているのはただの嫌がらせである。

あの二人についてはティユファダに任せることにして、ハクウはクルマの中から聞こえてくるかすかな悲鳴の元に向かった。人間の声が聞こえてくる時点で、すでに特別指定車ではないクルマに人間を乗せていることは明確である。

そして、結界の中。少年は結界が発動し、それが自分では打ち破れないことをすぐさま理解し反転、魔法でけん制をしつつ男を片手で掴みティユファダに攻撃を仕掛けてきた。先ほどと同じような爆発系、火炎系の魔法だ。青々と茂っていた草花が焼けていく。後に

残るのは灰ばかりだ。

何の苦もなく避け続けるティユファダの姿にも少年は表情を変えず淡々と熱を生み出し続ける。あの外見とは裏腹にやけに戦闘慣れしているというか、この状況になにも感じていない様子だ。少年が姿を現したとき、彼女の主はこの少年になにか妙なものを感じたらしく、とりあえず追い詰めてみて状態を観察するようにと風に溶けるような声で言っていたことを思い返した。

実のところ、ティユファダは少年がハクウのところへ向かった瞬間に男のほうを捕らえようかと考えたのだ。しかし、理由は分らないが少年は男を裏切らない、いや裏切れないのだと本能というべき風兎の力で直感的に気が付いた彼女は、そのまま少年が彼女のほうへ向かってくるまで身構えるだけにしておいた。

ティユファダは風兎らしくない風兎だが、こういう場面では風兎らしい打算的な戦い方をすることができる。自分が身軽に動くために、そして戦闘相手の少年の動きを制限するためにあえて男を放置したのだ。結界の中に閉じ込められているのだから問題は何一つない。どうせなら足手まといなしで戦ってみたかった、とティユファダはひっそりと溜息をついた。

もともと兎は草食動物であり、逃げるのは得意だ。円形のフィールドの中を自由自在にすると逃げ回るティユファダに振り回されて、少年も随分体力及び魔力を消費してしまったようで肩で息をしていた。手加減しているとはいえ、類稀なる戦闘センスを持つティユファダを相手にこれほどの時間を稼いだのだ。十分賞賛に値する行いだろう。そこまで必死になって守っているのがあんな人間だなんて明らかに異常だ。

あれほど動き回りながらも息も乱さずに居るティユファダの職業を忘れてしまっているのか、自分だけは助かりたいということしか考えられなくなってしまっている男は聞き苦しいことばかりをわめき散らす。そしてついに、自分でも何を言っているのか解らなくなつたらしい男は、ある意味で決定的な発言をしてしまったのだつた。

「遊んでないで早く殺せ、この役立たずめ！　さもなくば、これがどうなるかは解らんぞ！？」

男が首にかけている、きらりと光るどこか見慣れないネックレス。あまり高価なものでもなさそうだ。だというのに、赤毛の少年は再び立ち上がる。謎はすべて解けた。天狐と風兎と魔獣とそれ以外。そんな大雑把なくくりしか持たないティユファダは他人の気持ちには鈍感である。そんな彼女にもわかるくらいの状況だ。あのネックレスは少年にとって大事なものであり、それが奪われているから彼は反抗できないのだらう。だとしたら、彼女がとるべき行動はたったのひとつ。

「話はすべて聞かせてもらいました！　とりあえず、二人ともぶつ飛ばされてくださいねっ！」

今までの攻防はいつたいなんだつたのか、ティユファダは実にあっさりと赤毛の少年と中年の男の背後に回り一撃。気絶させると同時に縛り上げる。それが終わって一休みしているあいだに、クルマの中に隠されていた奴隷達の診察を終えたハクウが結界を解いたのだつた。

19．ろくでもない話

ここで話は少し戻る。ティユファダが遊んでいるあいだ、ハクウは例の男の荷物を調べていた。最初に爆発が起こったクルマの自身は少しも壊れておらず、そこでまた赤毛の少年への関心を深めたハクウは禁制品や盗品の山を掻き分けていく。

何重にも縛られた木箱の蓋を開けた瞬間に広がる甘い香り、思考力を奪う薬の一種であることはハクウにはすぐにわかってしまった。木箱につめられていた彼らはぺたりと地面に座り込み、みな焦点の定まらない眼差してハクウを見上げている。そうして探し回って、結局あの男が隠していた奴隷は全部で二十二、しかもすべて十にも満たない子供という始末。これほど大量の人間を隠してどうやって関所を通り抜けようとしていたのか少々疑問に思ったが、すぐにハクウはここだからこそ通り抜けられると考えたのだらうと思い直した。

テルテラストとナリアカルツ間の関所は関税が特別低く設定されており、その分多くの人間が行き来する場所。故にこの兵士は数々の誘惑に晒されることとなる。ナリアカルツでは他国では流通していないものを手に入れられる。しかしそれはあくまでナリアカルツ国内でしか所持を認められていないもの、関所で引つかかってしまうのも当然である。そこを乗り越えるために兵士の買収を行う者も数多くおり、嘆かわしいことにその誘惑に乗ってしまう兵士も少なからず存在しているのだ。

とにもかくにも、ハクウは点検を終えたクルマを呆然と事の成り行きを見ていた兵士達に任せ、奴隷としてつれてこられた子供たちをようやく起きてきたネイアに預けた。焦るネイアを尻目に関所を

出てティユファダの元に小走りで駆け寄ったハクウは、ぐったりと
している縛られた赤毛の少年をまじまじと見つめてティユファダの
ほうを振り向かずに言った。水色の彼は見るからに呆れかえってい
る。

「ちょっと遊びすぎじゃない？ 魔力切れ起こしかけてるよ、この
子」

「いやあ、まさか、あそこまで必死になるとは思ってなかったんで
す」

流石に放置するのもどうがと考えると、死なない程度に少年に魔力
を補給しつつハクウが横目で見れば、ティユファダは『自分は悪く
ない』とばかりに手をひらひらとさせている。その手には、見慣れ
ないネックレスが引つかかっていた。

「その、手に持ってるのは何？」

「そっちの男がその子供からパクってた奴かと思われます」

「……なんでこの子はあんなに強いのに取り返せなかったんだ？」

「さあ？ あたしにはわかんねーですけど、ハクウさまが見れば一
目瞭然かもですよ」

縛り上げた男を片手でずると引きずりつつ、ティユファダは
ハクウにネックレスを渡した。つくりがチップで年頃の平民の女性
でも持つていそうな安物である。デザインは、どこか見慣れないも
のだが。一通り外見を確かめたので左手でチャラチャラと弄んでい
たネックレスを右手に持ち替え集中する。きらきらと揺れる青い光
それが収まったあと、ハクウはナイフを抜いて中年の男を刺した。
赤い血が皮膚を伝って流れ出る。

「いきなり刃物取り出してどうしたんですかー？ 殺すんだったら

手じゃなくて心臓を狙うべきですよ」

「別に殺さないよ。呪いを解くのにこいつの血が必要なんだ」

「なるほど。ふむむ、どんな呪いが掛かってるのか、ちょびっとだけ気になるんで教えてください」

ティユファダは妙に楽しそうである。そんな彼女を微妙な目で見やり、ハクウは解呪を始めた。この呪いは、元をたどればただのまじないだった。母親が子を想い残したもの。子供の幸せを願い、自身の命をも懸けた『まじない』。それが何が合ったのかわからないがこの男の手の中に落ちてしまった。このネックレスを装備できるのは本来赤毛の少年だけ、しかし男はそれを邪法を用い捻じ曲げて装着していたのだ。その邪法を打ち破るには血液が必要、よって男はハクウによつて手の甲を刺されてしまったのである。あまりの痛みに目を覚ました男はハクウの電撃によつて再び闇に落とされた。

見事な手際で呪いを取り除き、ついでにこれ以上弄繰り回されないうつに固定保護魔法を掛け、ハクウはネックレスを少年の首にかけてやることにした。このとき、ハクウは少年の顔をはじめてじっくりと見た。その、どこか懐かしい顔立ちを見て、なぜ、懐かしいのかと首をかしげ、そこで唐突に思い出した。彼が小さいころに食べた、とある人間の記憶の一部を。

今はスノーと呼ばれている魂は、かつては異なる世界より来たりし者だった。彼女はコウコウセイで、家庭環境について悩みに悩んでいて、そんなときにこちらの世界に呼ばれ、彼女はそれに応えてこちらに来たのだ。なぜかそこで彼女の記憶は途切れている。それ

についても予測できる気はするが、今はその話は置いておくことにしよう。

とにかく、彼女がいた世界での友人がこの赤毛の少年と似ているのである。そっくりとまでは行かないが、確かに血の繋がりを感じさせるような顔立ちだ。少年の人並みはずれた魔力量も考慮に入れば自ずと答えは導き出される。すなわち、スノーの友人もこの世界に呼ばれていて、そしてこの子供のために死んだということだ。

ようやく解った。招来の書が頻繁に使われている理由はマーシラクエルト教が強い駒を手に入れるためだ。招来の書を使うためには『魔王』の存在が必要なのだが、実際に魔王が現れていたらすぐにわかる。だとしたら、それなりの能力を持つ何かを魔王に見立てて『勇者』を呼んでいるのだろう。あくまで見立てているだけだから、呼ばれた『勇者』は本物と比べるとそれなりの能力しか持たない。それでも普通の人間よりかは遥かに能力が高いのだ。

さて、『勇者』の寿命はたったの一年。しかもこの世界に存在できるのは一人だけ。これではたいした戦力にならない。そこでマーシラクエルト教は『勇者』に子供を作らせたのだろう。知つてのとおり、魔力は親から遺伝する。両親のスペックに極端な差がある場合は中間程度の能力を持った子供が生まれる。そうして作り上げたのが『勇者もどき』なのだ。

これならば勇者ではないから同時に何人でも存在できるという理屈である。なぜ急にこのようなことをしはじめたのか。おそらく戦争でも起こそうとしているのだろう。遠い昔に結ばれた平和条約、それが結ばれる原因となった、戦場に必ず現れる強大な化け物はすでにただの伝説と成り果ててしまっているのだから。

家に帰りたいと泣くからといって、そのまま帰してやったとしてもすぐにまた売り払われてしまう可能性がある。と、いうのは只の建前というものであり、実際には一々家庭調査をするなんていう面倒なことはしたくない。よって全員まとめて孤児院送りというのが一般的な流れである。

あれから数日、ハクウたちは優雅な空の旅をしていた。今までのとは比べ物にならないくらい穏やかさだ。子供たちもきやあきやあと元気に騒いでいる。あの後、ハクウたちは子供たちの護衛任務をさせられることとなった。恰幅のいい中年の男やその御者は子供たちを怯えさせないようにと別の騎士隊によって護送されている。関所には材料もあつたし、ネイアがうつかりして売り忘れた鉄の塊もあつた。よって、現在鉄と木で出来た船はティユファダの竜に抱えられて空中をゆったりと泳いでいるのであつた。

ウインクルスは独特な形をした国だ。特に奇妙に感じられるのは国の周囲が不可解な物質で覆われており、その一部だけがぽっかりと開いていることだろう。しかもその穴が動く。ウインクルス自体は様々な国に囲まれている。

テルテラストやフリーラチュットとも隣接しているのだが、今の時期はナリアカルツからしかウインクルスに入国することが出来ない。こんなに大勢の子供をつれてナリアカルツの町に行くなんて愚行としか言いようがない。しかし、関所近くで止められていた商人たちから食料品を買うことで補給無しでの突破を可能にした。荷物が重いのならスピードは出せない。ティユファダは不機嫌そうな顔をし

ながらひとり竜の上の風を感じていた。

ちよつと飛んで数週間後。彼らはようやくといつていいくらいの道程を進み、ネリアウルジュ教の国、ウインクルスの地を踏んでいた。この国では戦闘行為が封じられており、またこの国に住む魔獣も穏やかで人に襲い掛かってくる心配はない。完全に魔獣と人間が共存しているように見える国だ。この国にはどの町にも教会があり、ハクウたちはそこに子供を預けることにした。ただし、例の赤毛の少年、名前はクーヤという、はティユファダが引き取ることに決まった。貴重なサンプルを手放すのももったいないからだ。

クーヤは元々非常にぼんやりした男の子である。人の話も聞かずにあつちこつちふらふらする、まさしく子供である。しかもなぜなに攻撃も標準装備しているのだ。スノーもクーヤに張り合うように、あれはなに、これはなにとハクウに怒涛の勢いで質問してくる。一応親役であるはずのネシアとティユファダに聞かない理由は不明。実際に質問してみても彼らが答えられるかどうか不明。ネシアとティユファダはふたりとも、興味のないことは覚えなないタイプなのである。

ぐいぐいとちびっ子たちに両手を引っ張られながらハクウは町を歩く。宗教というのは儲かる。よってその宗教の本拠地はものすごくお金が集まっている。それを強く実感させるのは綺麗に舗装された道路であり、画一的な町並みであり、道を行く人々の姿である。見るからに富裕層と見られるうら若き女性が供もつけずに歩いていても何の危険もない、この世界の常識を覆すような光景が広がっている。

ウインクルスでは道路は通路としての役目しか持たず、露天というものが存在しない。大通りにあるすべての店がきちんとした建物

の中に納まっており、柔らかい色合いの看板があちこちに彩を与えている。冬でも葉を落とさないペーミントグリーンの木が伸びやかにその枝を広げ、その隙間には繊細な装飾を施された外灯が日の光にきらめいているのである。車道を走るクルマは様々な技巧を駆使して作られたであろう美しさを惜しげもなく晒しており、歩道にはゴミのひとつも見当たらない。多くの人々が行きかう大通りは生活の匂いがしないように出来ているのだ。

飲食店で落ち着きのないクーヤとスノーがくすくすと笑われたり、宝石店で店長がネイアに頭を下げてきたりと色々なことがあった。前者については悪意の籠ったものでもなく、ただ元気で可愛らしい子供を見て周りのお客さんが和んでいただけであり、後者はネイアがカフカ家の一員だからである。カフカ家は豪商の一族であり、ホームこそナリアカルツにあるものの自由気ままにあちこちを旅していることもあって周知度の高い連中なのである。

また、自分の身は自分で守るというモットーを持ち、まともな魔法の一つも使えないのにながりの戦闘能力を有している。逃げ足も速くて頭も回る、実に商人として相応しい一族だ。さらに幸運にも恵まれているときたものだから、他の商人たちがそのおこぼれを貰おうとするのも当たり前のこととなってしまった。

ネイアはお金持ち、ティユファダも高給取り、ハクウは小金持ちといったところだろうか。要するに、彼らはお金持ちという話である。ネイア主催のファッションショーはクーヤとハクウのためのものだったはずなのに、いつのまにかスノーの分まで買い込んでいた。

この辺の着替えやらなにやらの購入は学校生活へ向けた準備である。そのはずだ。

なのになぜ、こんな女物の服を着せられているのかハクウには理解できなかった。こういう勢いには流されてしまうのは、ハクウもまだまだ幼いからだったりする。ぴよんたかと弾むように駆け寄ってきたクーヤがハクウの前でくると一回転してみせる。真っ白な絹織りのシャツにアイロンの効いたベスト、ズボンの裾が折られているデザインはどこか可愛らしさを感じさせる。

「あに、どう？ かつこいい？」

「ああ、うん……格好いい、んじゃないかな」

「ありがとう。あにもかわいいよ」

「うん……嬉しくないや」

再びネイアによって着せ替えられているクーヤを見ながらハクウは物思いにふける。招来の書についてのハクウの考えはすでに書類にまとめて母親に送ってあるので、あとは上の会議のなりゆきにまかせることにした。丸投げである。

思考は飛んで、クーヤのこと。なんだかんだでクーヤには魔法だけでなく接近戦の才能がある。接近戦のみに限れば今のハクウよりも上かもしれない。ならば彼を育てて勇者との旅で使うのもいい。はつきりいって、魔王討伐なんかは何匹もの魔獣を投入するなんて無駄の極みである。いざとなれば天狐族一匹でも勇者を守りつつ魔王を追い詰めることはできるのだ。しかしネリアオルジュ教側からたったひとりしか派遣しないというのも常識的に考えてありえない。体裁を保つ程度の面子を揃えねばならないだろう。

幸いクーヤは頭も記憶力も悪くない。知識はないが、本人も勉強

をしたくてもできないという環境にあっただけであり、ハクウが文字を教えたらずくに本も読めるようになった。好奇心旺盛すぎて落ち着きがないのは、ある程度歳を重ねればどうにかなるはず。だからハクウはクーヤにも学校に行かせることを決めたのだ。

本人が勉強や訓練についてこれそうになくなくても、ハクウがこつそりと裏で手を回す。そうする準備は完璧だ。ハクウはひとりで満足げに頷いていた。普通に女の子にしか見えないところはつつこまずにそつとしておこう。

「ねえ、母さん。オレはもう、着替えていいでしょ」

「あ、はい！ それじゃあ次はこつちを着てください」

「……そういう意味じゃ、ないんだけど」

「大丈夫、こつちもお兄ちゃんに似合うと思う」

「スノーまでそんなこと言うの……？」

ぶつぶつと文句を言いながらものろと着替える。欠片も抵抗しないのはハクウがすでに諦めてしまっているからである。別に人形の身体に纏わせるものがなんであろうと関係がないといえはない。しかし獣とはいっても男の子だ。ひらひらしたのは動きにくいと嫌っている。人間の常識的に考えて性別にあった服を着ればいい、とも思うのだ。

なのにティユファダやネイアは嬉々として妙な服を渡してくる。女は男に女装させるのが好きなのだろうか。そこまでの嫌悪感はないがそれなりの嫌悪感はある。雰囲気に流されてしまったハクウはここで嫌だといったら負けだという気分になってしまっていた。そんな謎のファッションショーは結局日が暮れるまで続いたのだった。つつこみは不在である。

20・自らが成すべき事

窓の外では大粒の雨が降り続いている。ハクウひとり、大聖堂の廊下を歩いていて。ネイアはクーヤ関連の書類作成、ティユファダはクーヤとスノーに魔法訓練、とそれぞれの仕事をこなしている。普段はハクウが子供たちの相手をしているのだが、今回は大人ふたりに全てを任せてしまい自分の意志を優先させることにしたのである。本日ハクウがここを訪れた目標はただひとつ、両親に会うことだ。勿論、ネイアやティユファダではなく血の繋がった月乃宮の両親のことである。

思い返せば色々なことがあった。ネイアはそういうキャラクターを作っている可能性が高いが、ティユファダは紛れもなく大きな子供である。スピード狂で戦闘狂、そうかと思えば小さいものや弱いものも好き、いつでもニコニコと笑っていて、だというのに平気で拷問や虐殺も請け負ったりしている。精神面に欠片も揺らぎを感じないところがむしろ逆に恐ろしい。

それに加えて泣き虫、寂しがりやを通り越して情緒不安定なところのあるスノーや、無邪気な聞きたがりでありながらもどこか壁を感じるクーヤという面倒な子供を抱えているわけである。だれかひとりでも大変だというのに、それを『人生』経験の少ないハクウが全員まとめて世話をしなければならないのだから、たまには色々な事を投げ出したくなくても仕方がないことだろう。

だからこそ休養が必要なのだ。ハクウは拾ったスノーやクーヤを見捨てるつもりは微塵もない。だが自分が疲れていることを表に出して二人を悲しませるのも間違っている。ならばリフレッシュしなくては。

数年後に本物の勇者が来る事で慣例よりも幾分早めに独り立ちのための儀式を行うことになったハクウには少々余裕というものが欠落していた。その余裕を取り戻すための休養だ。未だ幼い彼が一番心安らげる場所は血の繋がった両親の傍のほがあるまい。ハクウはふと、クーヤの母親について考えた。遠い世界からやってきて死んでしまった人。いったい彼女は何を想っていたのだろうか、と。

わざわざ遠い異世界からやってきてもらうのだから勇者は丁重に扱われている。だから普通に暮らしていたら絶対に経験出来ないようなことをさせてあげたり、こちらの世界に残るといふのなら絶対に勇者自身だけでなく縁者も不幸にさせないように様々な配慮をしたり、元の世界に帰るといふのなら山のようなお土産を持たせてあげたりと、魔獣たちもわざわざ来てくれたお客様を不快にさせないようにと考えている。魔獣たちにより弱体化された魔王を倒すだけでこれだけの見返りが得られるのだから、むしろ過剰ではないかというくらいの報酬だろう。

下準備として異世界から来た人間の血を引くクーヤから時間をかけて一定量の採血を行い、その血液を使って母親の情報を集めた。腹の中にいたときでも子供は外の声や母親の精神状態を感知できるクーヤがまだ幼いことから記憶領域を探り目的の情報を容易に集めることが出来た。そしてその情報を整理したものも両親を通して議会に提出していた。判決は言うまでもなく有罪。特に、出産後すぐさま母親とクーヤが強制的に引き剥がされたことが魔獣側の怒りを買ったようだ。魔獣にとっては考えられないくらいの暴挙である。

妊娠中の精神的に参っている状態の母親に対して父親が何の行動も行わなかったのも原因の一つ。母親はクーヤの存在だけを頼りに生きていたかのような言動があった。このことから推測するにクーヤの両親は恋愛関係ですらなかったのだろう。たとえば恋愛感情がなくてあったとしても、クーヤが腹の中にいたころにはすでに夫婦関係が破綻していたのでこの父親にはそれ相応の罰を与えることが決まっている。魔獣たちの基準から考えればこちら側に住む『人間』は世界の末端でしかなく、そんな矮小な存在が異世界人に狼藉を働くというのは処罰されてしかるべきということだ。

異世界の住人を数多く不幸にしてしまえば神界に悪評が広がり、こちらの世界に勇者役の人間を派遣してもらえなくなってしまうかもしれない。ただでさえ創造神がへばいせいで単体として存続することができない世界だというのに、そんなことになったら世界滅亡コースまっしぐらである。それは確実に避けたい。ちなみに専門職等の職に就いている人間は基本単価が高いために、『数が多く、かつそれなりに扱いやすい人間』、つまり中高生から大学生くらいの若者が主に勇者役として選ばれているのである。

それ以外にも勇者を丁重に扱う理由がある。この世界の人間種の品種改良のためだ。異世界から勇者として呼ばれた人間は境界線を通り抜ける際に強制的に生まれ変わらせられるのである。この時に元の体はバックアップを取ったのち消去され、勇者は勇者としての身体を手に入れて、こちら側の世界の人間との生殖行為が可能になるのだ。勇者と人間のあいだに生まれた子供は突出した才能を持ち、魔獣たちには新種として管理されている。

また、驚くべきことに勇者は特定の魔獣とも子を成すことが出来る。こうして生まれた合いの子もネリアウォルジュ教が密かに確保

しているのである。この合いの子は勇者の血を引いているせい、勇者と人間のハーフとの間に子を儲けられる。こうしてじわじわと魔獣の血を薄めていき、魔獣でも今の人間でもない、『能力の高い新人類』を作り出して余所の世界からわざわざ人間を買ってこなくてもいいようにと魔獣たちは一致団結して人類総進化計画を進めている最中なのだった。この計画には結構な数の勇者と人間のハーフが必要になる長期的なものである。魔獣のハーフやクォーターは寿命が存在しないため、こちらに関してはそれほど数を用意しなくてもいいのは幸いなのだろうか。

少々話が脱線した。今回のクーヤの事件では、異世界から来た人間がこれまでの勇者と比べて非常に弱かったために詳細が分からなかったのである。魔獣自身があまりにも強大な力を持っているので自らの能力ではなく普通の人間を基準にして調査する必要があるのだが、これがまた『普通の人間の中では珍しいが国中を探し回ればいなくもない程度』という微妙さのせいで事態の正確な認識が出来なかったのだった。

しかし、今回ハクウが得た情報により事態は急速に展開、すでにある程度場所の目星もついており現在各部隊が異世界人が今この世界に存在しているのかどうか、それと次の召喚場所は何処かという調査に向かっている。遠く離れた地からは強い光しか見えないが、すぐ傍ならば弱い光も確認できるはずだ。

勇者もどきの正体が判明するまでにこれほどの時間がかかったのにも理由がある。クーヤを調べてわかったのだが、どうやら勇者もどきは少々魔力やレベル限界が高いために血統的には完全に人間だからである。勇者の血を引いているのならばすぐに魔力パターンやらなにやらですぐさま明らかになったはずだ。

しかしクーヤはどういうわけか人間の血しか引いていない。このことから一連の事件で召喚された異世界人は『勇者』ではなくただの人間として召喚されているということが判明した。異例中の異例である。ただ、せつかくの異世界人をこんな扱い方をするなんて無駄遣いにもほどがある。よって本腰を入れて『招来の書』を人間の元から回収することが決定された。

そうなれば一部地域の中とはいえ大きな顔をしているマーシラクエルト教の力も弱まることは間違いない。そこを狙ってネリアウルジュ教を布教するのも悪くはないだろう。こうすることで長期的に考えて面倒事が減少するであろうという見通しである。

常に手の足りていない魔獣はこれからもっと忙しくなる。それこそ過労死の文字が見えそうなくらいに。しかし高位魔獣はちよつとやそつとでは死なないし死ねない。まさに生き地獄。ブラック企業も真つ青。それもこれも創造神がごろりと横たわりつつ漫画を読みながらおやつを貪り食っているせいだと、ある種の憎しみを燃やしながらも自ら冥府へと特攻するあたり魔獣は未だ神の手の内から逃れられていない。

逆らえないのだからと諦めてしまえば楽になるのだろうが、目の前の仕事の山を見ればあつというまに真つ黒い炎が燃え盛る。そのストレスが行き過ぎて狂鬼になる。さらに手が足りなくなる。まさに悪循環。

もう、全てを投げ出してしまってもいいのではないか。しかしそんなことをしたら世界が滅ぶ。そしたら自分の家族も死ぬ。じゃあ頑張らないといけない。そんな鬱屈した気持ちを晴らしてくれるのが勇者の持ち込む娯楽の類である。空想の中では彼らも自由だ。自由、なのだ。現実と比べて死にたくなっても死ねない。各地で働き

つつも、すでに正気ではないのかもしれないような高位魔獣も少ない。正直言って、この世界は破綻しかけているのを無理矢理まともに見せているようなものである。

ようやく長い長い廊下を抜けて行き止まりまでたどり着いた。人間には行き止まりにしか見えないが、実はここから先は魔獣専用地带が広がっている。秘密基地、と表現すると面白いかもしれない。隠し扉のロックを解いて一番手前にある大鏡に手を触れれば、あっというまに別の部屋。

紙、紙、紙。宙を見上げれば真っ白い紙が高速で飛び交う。中央部に鎮座する大きな机にはひとり、眼鏡をかけた美しい空色の青年が自らの風貌など気にしないかのように顔を歪めて一心不乱に手を動かしつつづけており、本来は広々としているはずの部屋の大部分は紙の束で埋まってしまっているという状況も合わさって、実に異様な雰囲気生まれていた。部屋の中は紙の上をペンが滑る音やインクのおいが充満している。……これはあれだ、俗に言う、修羅場というやつである。

この状況を確認したハクウの行動は速かった。部屋の支配権の半分を掌握し、空中を乱雑に飛び交う原稿の流れを整備、インクの補充を行うや否や、自らも空いた机の前に向かいベタ塗り作業を開始したのである。肌で感じられるほどの緊張感。ここはもはや一つの戦場である。そう、彼らは今、漫画を描いているのだ。

他人の記憶を複製できるからといって、そうして得た情報をそのまま機械の類で印刷するなどということは今の技術では不可能。そもそも今回のような、かつて異世界で出回っていた漫画は異世界人の脳内に画像として保存されている。その画像には余計な情報も多く含まれているため、まずは必要分のみを抽出せねばならない。

そうして得られたものを原稿用紙の上に降ろすのである。頭の中の画像をそのままのかたちで再現できるくらいにこういった細かい手作業が得意なのは天狐族だけ。天狐族が勇者の旅に毎回着いて行くのはこの世界に現代知識を広めさせないためだけではなく、勇者から異世界の創作物の情報を回収する役目も担っているからだったりする。

彼らが人の姿を取って執筆作業をしているのは、本来の姿のままだと肉球が邪魔をして上手くペンを握れないからである。また、基本的に人間よりも毛深いために原稿上に毛が落ちて乾ききっていないインクにくつついてしまったら大変ということもある。

「ようやく終わらせた……これで、終わったんだ」

あれからどれほどの時が過ぎ去ったのだろうか。空色の青年はぐっと伸びをして、それから眼鏡を外して先ほどまで紙を広げていた机にべったりと頬をつけた。背中はずっかりまるまってしまっている。そんな青年の姿を呆れやら労りやらなにやら複雑な感情を抱えながら見ていた白雨は、束というような生易しいものではない原稿の山を綺麗に並べ替えてから適当な飲み物を淹れて青年の傍にそっと置いた。

カップの中の透き通った薄桃色の水底には溶け残った砂糖が慣性に従ってくるくと回っている。傍を漂う熱を感じ取ったようで、青年から白雨に向けた、くぐもった声の元氣のない感謝の言葉が静まり返った部屋に響く。

「なんでこんなに仕事を溜め込んだのですか？」

「ああそれはね、おれの大事な一人息子に久しぶりに会えると思ったら何も手につかなくて。おれがどれだけ家族を大切にしているかわかってるはずなのに、こんなに仕事を押し付けるなんて長老も酷いよ……っていうか何で独り立ちの儀式なんてやらなくちゃいけないんだろうな……」

青年は机に突っ伏したまま首を横に振る。その拍子に机から眼鏡が零れ落ちそうになったので白雨はとっさに空中で受け止めた。よく見れば集中力を高めるための伊達眼鏡だということがわかる。見ているうちに『頭を仕事仕様に切り替えるためのスイッチのようなものだ』とちよつと前に言って笑っていたのを思い出した。白雨のほうを見ないまま、青年は独り言を続ける。

「一人前にならなくたっていい、傷ついて欲しくない、そういうのは親の我儘でしかないことはわかってる。わかってるんだよ、これからあの子もおとなになるのだから絶対に必要な儀式なんだということ。でもさ、何でおれはこんなところで缶詰にされてるんだろうかとしょっちゅう疑問に思っちゃうわけ。確かにこの仕事も大切だよ？ だからって上手く納得できないのも親としては仕方ないことだろ。有司君から色々送られてくるけど、やっぱりそれだけじや寂しいし。やっぱり直接会いたいよ。白雨はどれだけ成長してるのかなあ」

「……多分、普通に成長できてそれなりに元気にやっています」

「おれの話に付き合ってくれるの？　優しいね……ん、あれ、この声……もしかして白雨！？」

子を想う心情をひたすら垂れ流していた空色の青年は、ちよつと引き気味な白雨の小さな声を聞き取り、がばりと先程までの憂鬱な雰囲気を吹き飛ばすかのような勢いで顔を上げた。冷たささえ感じさせるほどに端正な顔立ちとは真逆な印象の、蜂蜜色の瞳がまるで子供のようにきらきらと輝いている。白雨とはあまり似ていない、少しとぼけたような雰囲気が内から滲み出ているのはその瞳のせいだろうか。白雨は座ったままの彼と目を合わせてから逸らし、僅かに肩を落とした。

「気付くのが遅いです、父上……どうしてすぐにオレが手伝ったことに気付いてくれなかったんですか」

「わああ！？　あ、あれはつい、お手伝いの子かと思って、だってほら、白雨がこんなに早く来るなんて知らなかったし！」

「こんな、って……たった一日早いだけじゃないですか」

「え、本当？　うわ、何で日付変わってるの！？」

「どれだけ熱心に仕事してたんですか……別に、いいですけどね」

「断じて白雨のことを忘れてたわけじゃないから！　……でも、本当にごめん」

「いいですよ。前からそうだったし、あんまり気にしてないです」

そういいながらも白雨の見えない尻尾は力なくたれている。青年——言うまでもなく、白雨の父親は自分の息子がすぐ傍にいたことをようやく実感し、感極まって白雨少年を力強く抱きしめた。正直痛かったけど呻き声を上げたりしないように我慢した、と後に月乃宮白雨は語る。その顔には苦笑い、なんだかんだで彼も両親のことを慕っているのだった。

21・血の繋がりとか家族とか

父上には会えたので、次は母上に会いに行こう。怒りと嘆きの声が響く父親の勤務室からそつと退出した白雨は一つ溜息をついて歩き出した。

部屋の中から聞こえてくる、『なんであのタイミングで次の仕事に来るんだ！？』『そんなのは氷雨様が仕事を溜めすぎたせいですよー』『今日ぐらい仕事休んでもいいじゃないか！』『アナタ、それで何回仕事サボってきたと思ってるんですかー？』『んなもんは忘れた！』『別にいばることもないですねー』『というか、あれだ。これさ、おれの記憶によれば一度処理したやつだと思っただけ』『あれは週刊誌連載版、こっちは単行本版、そしてこの次は完全版ですー』『どこがどう違うんだよ……』『なんていう父親とその部下のやり取りは聞かなかった事にしておく。

生きる人形の作り方はいたってシンプルで、まずは自らの身体の一部を切り落とし、人間の構成材料を加えて魔力を練り合わせながらよく混ぜる。そしてそれを特殊な魔方陣の描かれた冷暗所で一日ほど保管すればあつというまに完成してしまうという、なんとも安上がりな代物である。もちろん切り落とした部位は魔法で治せるので問題にもならない。

出来上がったそれは本体の一部分、よって配色や容姿は本体の持つ遺伝情報に基づくもの。だからこそ白雨が取った人の姿とその父

親である氷雨の姿は重なるところがあるのだ。白雨とスノーは性別が違うが、これは差異を作り出すための特殊な薬草などを混ぜ込んでいるからである。有司が『ネイア』としての身体を作るときにも使われたものでもある。

なぜわざわざそんな話題を表に出したのかといえば、それは白雨が母親似であり、また、この目に優しい薄緑色の部屋の中で、くると椅子を回しながらなにやら文字の書かれた紙を睨みつけている女性が白雨とよく似ているということと非常に深い関係があるのだ。

白い足が地に着き、振り向いたときに白に近い銀の髪がさらりと背を流れた。白雨の姿を捉えた女性は難しい顔から一変、ぱあっと表情を明るくさせ、笑顔のまま手招きをする。少々の照れが混じった白雨がおずおずと近寄れば女性は彼を無言のまま抱きしめた。

「白雨、おかえり！」

「ただいま戻りました、母上」

「言い方が硬い！ でも可愛い！ うちの子世界一！」

明らかに親馬鹿全開な発言をした白雨の母親である女性、雪花は銀灰色の瞳を細めて抱きつく力を強めた。

天狐族は基本は大得意だが応用は苦手分野、というか答えの出ないことは大抵不得意であり、それは創作物についても同様だった。見たものをそのまま絵に描ける。しかしそれがデフォルメやらの話

になるとてんで役に立たないのが現状で、オリジナルの漫画なんて描けないというのが一般的な天狐族だったりする。ある意味では天狐族は魔獣の中でもかなり機械に近い性質を持っているといえる。

だからこそ単独で突っ走りがちな天狸族や単独で抱え込みがちな天狼族の面倒も見れるのだろう。基本的にはヒートアップしがちな二種族のブレイキ役、ただし、天狐族が油揚げ関連で暴走したときは逆にブレイキをかけられる側になる。暴走の原因が局所的だとかは天狐族には言っではいけない。血を見ることになる。

世界の創成期に神様によって創られた特別な三皇族は、各種それぞれ七匹ずつの合計二十一匹という微妙な数であった。理由としてはこの世界では七が神聖数として扱われているからである。月乃宮家はその天狐の中でも特に知識に長けた末弟の血を引いている。

白雨の父親の氷雨は若いころは月乃宮らしくない不真面目さを持っていたが、ある日、雪花に出会い劇的な変化を遂げた。血筋的にはあまり高くない系統だった雪花を月乃宮に入れるべく、毎回何かしらの理由をつけて逃げ回っていた家業を継ぐ事をようやく決心したのだ。その家業とは異世界の知識の吸収、つまりは勇者が召喚されるまでに読んでいた書籍の内容の解析である。

異世界の知識を他の魔獣にも理解できるようにするためには、データ化された記憶内の画像から抽出した書籍の内容を物質化する必要がある。その物質化の際、元々が文章のみならば今の魔法技術を利用すれば簡単に造ることができる。だが写真などの鮮明な画像については手書きしなければならない。漫画についても同様だ。

氷雨はこの、画像を処理する才能が強く出た。処理速度は軽く歴代の天狐の数十倍を超え、これまで蓄積されたままであった画像の

約十分の一が彼によって物質化されたのである。これはすさまじい功績であり、もし魔獣が歴史の教科書を作るとしたら確実に名前が載るレベルだ。

一方の雪花はというと、これまた天狐族には非常に珍しく自分で創作物を作る才能を持っていた。それが発覚したのは彼女が月乃宮雪花になったあと、要するに嫁入りした後のことである。もっと前に知ってたらすぐさま結婚させてやったものを、と祖父の秋霖は呆れてかえっていた。これについては氷雨が家のことや種族のことについてきちんと勉強していなかったせいなのでフォローのしようがない。

そんな父親とは反対に白雨は真面目で勤勉家、少々予想外の展開に弱いのは彼がまだ幼く経験が少ないからであるとして、さらに両親の才能も引き継いでいるときた。どう考えても白雨の価値は高い。だからとつと勇者の従者を勤め上げさせて仕事に就かせたほうが有益であると議会で判断され、こんなに幼いうちから人間の姿を取らされているのである。

氷雨の友である有司や、雪花の従者の妹分である夕菜が護衛、というか話し相手として傍に置かれているのは両親が心配したからだが、むしろ彼らじゃないほうが色々と楽だったんじゃないかと白雨はぼんやりと考えている。確かに心配してくれるのは嬉しい。でも、彼らはちよつと自由すぎやしないか？

なんだか吹っ切れた白雨は母親にそりゃあもう目一杯甘えた。普

段から気を張って生活しているせいで生まれるストレスをおもいきりぶちまけた。とはいっても同行者に対する愚痴などは一切こぼさなかった。流石に親の知り合いをどうこう言う気はないし、人間の子供についても同様である。いつか鬱になりそうなくらい真面目だ。

全力でかまってもらったあとは後ろ髪を引かれながらも日が暮れないうちに泣く泣く撤収。白雨、いやハクウには子守という仕事があるのだ。まだ彼は子供だということはこの際考慮に入れない。ネイアやティユファダと比べたら十分大人だ。

ティユファダが上から貰った豪邸は維持のために使用人が何十人も必要なくらいのものだった。ハクウが執事に頭を下げられながら玄關をくぐればちょうど階段から降りてきたクーヤと出くわした。ハクウを見つけた彼は楽しそうに嬉しそうにぴよぴよこと飛び跳ねながら走りよってくる。さながら子犬のようだ。もっとも、子犬にしては少々身のこなしが軽すぎる気もするが。

「あに、おかえり。ここ、すつごくひろいよ」

「ただいま。クーヤは今日魔法の勉強のあとは家の探検でもしたの？」

「うん。たのしかった」

「そっか、楽しかったならいいんだ」

「でも、おなかへった」

「……じゃあ、早速晩御飯でも作ってもらうか。どうせスノーと母さんはまだ魔法の話してるんだろっし」

「わーい」

今にも走り出しそうなクーヤの首根っこを捕まえて手洗いうがいをさせつつ、ハクウ自身もきちんと済ませてから使用人に夕食を注

文した。準備のあいだに着替えも行った。ついでに風呂にも入った。どちらもクーヤがほりっぽかったからである。子供が子供の面倒を見ているという状況につっこむ勇気あるものはいなかった。

クーヤにテーブルマナーを教えつつ、ハクウの思考は微妙に別のところへと向かっていった。母親からの贈り物についていた祝福がねじれてしまい、思考力の低下という悪影響をクーヤに与えていたという状況についてだ。これはもしか、偶然そうだったのではなかったのではないだろうか。すでに一種のバグ技として確立されていて、裏でろくでもないことに使われている可能性はゼロとはいえない。ハクウはこれについても調査を進めることにした。

「……あに、なんでこんなめんどくさいこと、おぼえるの？」

「見た目だけでも体裁を整えておいたほうが何かと有利だから」

「うーん……？」

「偉いだけの人は食べ方が汚いと馬鹿にしてくるよ。わざわざ自分が不利になる隙を作る必要もないと思わない？」

「あ、なるほど」

「他には食事相手の印象に影響が出る。格式ばった食事会のかには特に気をつけること」

「ふむふむ」

「ただし、下町での食事のときにはあまり気にしなくてもいい。お上品だと思われないのなら別にいいけど」

「ほうほう」

へんにやりと眉が下がっていたクーヤが背筋をぴんと伸ばしてきりつとした顔になる。どうやら彼なりに色々と考えているようだ。多分、クーヤはハクウたちを嫌ってはいないのだろう。しかし他にどのような感情をどの程度抱いているかは不明。

「……さりげなく人の皿に自分の苦手なものを入れてくるな」
「ぎく」

「好き嫌いいしないのが格好いい男ってものだよ」
「むぐぐ」

とりあえず、こういうことをしても本気で怒られないということ
は理解しているようだ。自分の皿に乘せられた先程までなかったは
ずの細くて青白い豆をクーヤの皿に返しなら、ハクウは自分の中
の認識を深めた。というか、オレもこれ嫌いなんだけど。好物だっ
たら何も言わず食べてやったのに。というのは言わずにいた。

月日は巡って早一月。ハクウは相変わらずえらい忙しい毎日を送
っていた。午前は魔法についての座学をスノーとクーヤに教え、午
後は体力づくりのためにティユファダを先生にした戦闘訓練。暇さ
えあれば妹と弟に一般常識について講義し、夜はテーテとしての職
務を全うする。本当によくやるよなあ。ネイアは仕事をしながらひ
とりでうむつむと頷いていた。

「うちで一番真面目に働いてるのはハクウくんかもしれない」
「オレが一番かはわからないけど、とりあえず父さんは真面目じゃ
ないな」

「いや、僕は超真面目だよ？ どちらからどう見ても真面目な美青年
にしか見えないでしょ？」

「……えーと、なんか言っただろうがいい？」
「流してくださいごめんなさい」

今日はティユファダがスノーとクーヤの面倒を見てくれている。
いやまあ、子供であるはずのハクウがそう思うのはおかしいような
気がしないでもないが、とにかくハクウは普通に感謝していた。す
でにあの忙しい状態に慣れてしまっている。

せつかくひとりで休める時間が与えられたというのに、時間もあ
るのでたまには、とネイアのところへやってきて、ついでに書類を
処理するのを手伝い始めてしまうハクウを見てネイアは感心してい
た。ぼくにはとてもできない。

「ん、なんか手紙混じってたよ」

「あれ、仕分け間違えたのかな。助かるよ……って、うわ、あの人
からのお手紙じゃないか」

「どうしたの？ あの人って誰？」

「うちの厚化粧の母親。なんか結婚して家族が出来たんなら顔見せ
に来いってさ」

手紙を受け取り、ひらひらと片手で摘みながらネイアは顔をしか
めて悩み始める。ハクウはネイアにそんな顔をさせる存在がちよっ
と気になりつつも、あのネイアが嫌がるような相手ならハクウにと
ってはもつと危険な存在なのではないかと考えた。しかし、そのネ
イアの母親、つまりはカフカ家の当主の言うことも尤もである。

「というか、嫌でも行かなくちゃいけないんだけどね！」

「うんっ、だろうね！ どうせそういう展開だと思ってた！」

「ははは」

「あはは」

「……ふっ」

「溜息つかないでよ、辛気臭い」

別に貴族とかに婿入りしたとかそんなのではないのでそういうことを命じられても外交的な問題も何もないが、あの恐ろしい魔獣に会いに行くというのは傍若無人の名をほしいままにするネイアにとっても勇気がいることである。仕事をする気力すら奪われてしまったような気がしてネイアが机に突っ伏していれば、間髪いれずにハクウからの叱責が飛ぶ。どっちがおとなだかわからない光景である。そしてこれがこの屋敷での日常だったりする。

「えー、というわけで僕の母親役の猫に会いに行きますが、もしあの人をおばあちゃんとか呼んだら死にます」

「死ぬの？」

「死にます。一瞬で爆発します」

「ええー……」

ネイアの大げさな言い方にも、ネイアの母親がおばあちゃんと呼ばれただけで攻撃的になるということにも、そのどちらにもハクウは引いた。そんな彼のことを気にも留めず、ネイアは昔受けた折檻を思い出して遠い目をしている。

「若作りっていうか、アンチエイジングに命かけてるっていうか」

「……魔獣なの？」

「人間の身体をどれだけ長く美しく持たせるか、今はそれについて研究してるらしいよ」

「それでさっきの厚化粧うんぬんに繋がるわけね」

だからって『おばあちゃん』と言われただけで暴れだすのは理解しがたい。なんていうか、魔獣なのに異様に人間染みている気がする。あの見た目だから広告塔としての役目も果たせているのはわかるんだけどさ、あの情熱は僕にも理解できないな、とネイアもまたもや溜息をついている。

「はい質問」

「んー？」

「じゃあその猫さんをなんて呼べばいいの？」

「名前に『さま』をつけるのが一番無難じゃないかなー…… もしくは当主様」

「で、その名前ってなに」

「フェストリアーナ」

「長いなあ」

口だけでなく手も動かしながら二人は会話を続ける。すでにハクウが手伝える分はなくなってしまったので今度はスノーとクーヤのための中級障壁魔法の教科書を執筆しているのだが、これがまた売り物になりそうなくらい上手に出来ているのだ。横目でそれを確認したネイアは商売人らしく、さりげなく印刷屋への依頼書を新しく作り始めていた。実に目ざとい。

「あれ、そういえばネイアって名前は女性名だったような」

「カフカ家に生まれた男児は全部女性名をつけられる決まりになっているからね」

「ふーん…… そりやまた、なんで？」

「通例。昔は男児が生まれても成人できなかったから、『この子は男の子じゃありません』ってことにしたら長生きできるようになったんだってさ。女性が当主なのは昔の名残」

「なるほど、そういう設定なわけね」

「お察しの通りです」

雰囲気はぐだぐだ、テンションは最低。ネイアは陰鬱な近い未来を想像しつつもそれを振り払うように我武者羅に仕事に励んでいる。そんなネイアの姿にネガティブな想像が膨らみつつもハクウは執筆

作業を続けていた。予定としては一週間後、中途半端に時間があるのが逆に嫌だ。

22・噛み合わない齒車

気の重くなるようなことが少し先の未来に控えているが、だからといってそれから逃げ出すわけにもいかないのでネイアは陰鬱な表情で溜息ばかりついている。一方、例の猫のことを知っているはずのティユファダはというと相変わらず、いや普段よりか輝いているような笑顔を見せているので、おそらく戦闘能力が高いことだけは伺える。

ティユファダは天狐族には無条件で敬意を払うが、それ以外の種には基本的に無関心、とこれまた極端な反応をする。しかし例外というものも存在しており、風兎族でありながら戦闘狂でもある彼女は自分より強い相手には懐く。ちなみにティユファダのネイアへの評価は『まあまあ』である。そのせいか、ハクウへの対応と比べると意外とドライだったりする。二十年の年月は一族の血には敵わないのだった。

小さいころから何かと気にかけていた子供が件の猫を慕っているとなると、それだけでなんかむかついてきて余計に嫌いになったとネイアは不機嫌そうに語る。ここでなぜ子供嫌いなネイアがティユファダのことをそれほど気にかけているのかと聞けば、彼は笑顔でこう言った。

「だって、あんなにおかしい子初めて見たんだ」

「ああうん、確かに一般的な風兎族とは全然違うよね」

風兎族は限られた種類の魔法を使って実に器用に戦う魔獣である。豊かな感受性を持ち、何を見てもくると表情が変わる様はまるで幼い子供のようなと言われている。基本性能が天狐族の詠唱の時

間稼ぎに向いているので、様々な場面で活躍することはできないこともあり少々臆病なところもある。

さて、ティユファダといえば子供っぽいという点は当てはまるが、常に笑顔で表情が変わらない。臆病風に吹かれることなんてありえないし、むしろどんな相手でも真っ先に自分から突撃していく。暗器の類も使用しなければ毒物も使わず、ただ近づいて殴るだけ。だというのに他の風兎よりも抜きん出た戦闘の才を持つと誉めそやされている、まさに異例中の異例である。

そんな彼女は今、久しぶりにルーキフラとしての仕事をしていた。全くといって有給を消費していなかったティユファダがようやく休んでくれた、と教団本部の担当者が胸を撫で下ろしていたところに我らが暴走特急が現れ仕事をもぎ取って行ったのだ。これには思わず担当者も涙。傍若無人という言葉がよく似合う少女だ。

彼女がいなくなるとハクウの仕事はますます増える。まだまだ幼い妹と弟は元気を有り余らせているのだ。ハクウは彼らに自習を言いつけてネイアの仕事を手伝っていた。いつもならば二人の傍で質問を受け付けたりしているのに、本日に限っては何食わぬ顔でネイアの部屋に潜り込んできたハクウに問いかける。

「もしかして、なんか面倒な展開になってたりする？」

「……あー、どうなんだろ」

「あんまり見てないけど、微妙な雰囲気になってたよね」

「うん……向こうに居るとお互い相手と張り合うためだけに怒涛の質問攻撃を行ってくるから、つい逃げ出した」

「なるほどなるほど」

「二人とも、何か切欠があれば仲良くなれると思うのに」

「わかりました……それならこの僕が一肌脱いできるとしましょう」

！

「……あんまりいじめたら駄目だよ」

いまいち信用してなさそうな顔で適当な紙の切れ端にさらさらとペンを滑らせ、スノーとクーヤへの指示を書き入れる。それをネイアに渡すと再び仕事に戻った。本来仕事をしなければならぬのはネイアだが、その張本人は鼻歌交じりで部屋から出て行く始末。あ
いかわらず、どこかおかしい関係としか表現できない。

子供は嫌いでも、それを表に出すのは愚の骨頂。商人を演じるにしても、傾国の美女を演じるにしても、子供に優しく振舞うことは周りの好感情を得られる。それを知っていたネイアは人目があるところでは子供好きのアピールをしていたし、また、子供からも好かれていた。

ネイアが養子にした三人の子供のうち、ハクウに関しては子供らしくなかったので平気だったが、残る二人をどう扱っていいのかわからなかった。というより、ぶつちゃけ相手をするのが面倒だった。幸いハクウとティユファダがきちんと世話をしているので育児放棄と罵られてはいない。

なんだかんだでハクウはネイアの仕事を手伝ってくれているし、そんな彼に悩みがあるならそれを解消してやってもいいと思うくらいには好意的な感情を抱いていたためにあの部屋から飛び出してきたのだ。断じて計算が面倒になったからではない。

これでも結構な回数的人生を送ってきているので人間関係、ましてや子供同士のときたら朝飯前である。得意なことは得意な者がやればいい。困ったときにはお互い様だ。ネイアはひとりで頷いて、軽やかな足取りで二人が黙々と勉強をしているという部屋へ向かった。その際、無駄足を踏まないためにハクウに渡された紙切れの内容も確認しておく。それにはこれからの予定が几帳面な性格の滲む細く綺麗な文字で書かれていた。

日当たりのいい大きな窓からは季節の花が色とりどりに咲き誇る姿がおだやかな風に揺られており、部屋の内装も柔らかな色合いの家具で纏められており、子供や女性に喜ばれそうな明るい部屋。その中で一言も漏らさずに、お互いに目を向けることもなく、ただただ無表情で手元のノートに書き込みを続けている二人の姿を見て、ネイアは感心していた。よくもまあ嫌いな相手がいるところでおとなしく二人つきりでいるものだ。自分だったらとつくに逃げ出している。

ネイアは静かに扉を閉めてから、もう一度音を立てて扉を開けた。はじめられたように顔を上げる二人が見たのは最近の姿を見せなかった父親がへらりと気の抜けた笑顔を浮かべている姿だった。途端に複雑な表情になる二人から漂うコレジャナイ感。子供らしく、実に素直だ。

「やあ、久しぶり。元気そうだね」

「お兄ちゃんもいてくれたから……」

「たいくつはしてない」

子供たちの反応は思わしくない。ネイアが子供嫌いなのを敏感に察知しているのだろうか。だとしたらやっぱり異世界関連の人間はどこか違うのかもしれない、と彼は思考を飛ばしつつ、ハクウから渡されたと言って先ほどの紙をそれぞれに受け取らせる。それを真剣に読んでいる姿からはハクウに対する感情の一端が垣間見えるような、目の前に居るネイアに対する関心の低さを示しているような、つまりはこの家族関係の歪さを明らかにしていた。

紙にはまず、クーヤが図書室へ本を取りに行くように書かれていたのでネイアもそれに同行することにした。両方の本音を聞きださないことには問題は解決しない。ネイアは持ち前の話術を用いて巧みにクーヤの気を引き、あつという間に彼の気持ちを聞き出してみせた。曰く。

「べつに、僕はちゃんとやさしくしてる。あつちがかってにきらってくるだけ」

口を尖らせながらそう言うと、クーヤはネイアにおやつを取ってきてもらうように頼むと一人で駆け出してしまった。どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。やれやれと肩を落としてネイアは元来た道を歩き出す。通りかかった使用人に菓子の準備を任せることも忘れない。

部屋の中のスノーは先ほどと少しも変わらず真剣な顔で教科書を穴が空きそうなくらいにじっと見つめている。どこかでつまずいてしまっているようで首を傾げたりもしている。ネイアに気がつくような気配もない。声をかければ案の定、ひゃあと声を上げて椅子ごと倒れそうになっていた。適当になだめつつ、クーヤのときと同じように話を誘導する。

「あのね」

「うん」

「あの子、私が嫌いなものをお皿に入れてくるの」

「ほう」

「それに、『なんでこんなこともできないの』って感じの目で見てくるし」

スノーは目を逸らしながら呟く。どうやら事態はネイアの思った以上に進行しているらしい。どうすればこの問題が解決するか、…どうしたらもつとおもしろくなるか。ネイアが思考を巡らせているあいだに菓子が届き、そして本を抱えた使用人を従えたクーヤが戻ってきた。ネイアは口元だけで笑っている。

仕事の息抜きに仕事をする。何か間違っているような気もするがハクウにとっては当たり前のことだ。やらなければならぬことをほったらかしにしておけないタイプなのだ。夏休みの宿題を七月中に終わらせるタイプともいう。ぐつとのびをして、それから少し身体を動かそうと部屋を出た彼の前に慌てた様子の使用人が現れた。緊張しているというか焦っているというか、よくわからないがとりあえず、ハクウは彼女の後をついていくことにした。

早足で階段を下りて廊下を抜けていけば、案内された先にあつたのはスノーとクーヤに自習させておいた部屋である。中からはなにやら声が聞こえてくる。そつと扉を開けて覗いてみればどう見てもなごやかなお茶会にしか見えない。不思議に思っ使用人に話を聞

くと、つい先ほどまで喧嘩になりそうだったらしい。

しかし、今は落ち着いているようだ。ならばわざわざハクウを呼びに来なくてもよかったのではないか。彼が少し考え込んでいたとき、他の使用人の女性がせっかく休憩なさるのでしたら、とこのお茶会に参加してはどうかと勧めるので、特に断る理由も持たなかった彼は頷いた。雰囲気が悪くなければ彼らと共に居るのも好ましいことだと思う。

ハクウが室内へ入るとスノーは目を輝かせ、クーヤもまた楽しそうな表情を浮かべた。ネイアは焼き菓子を手ひらひらとやる気なさげに手を振っている。一名を除いて、完全に歓迎ムードである。

他愛のない話を両者に平等に振り、雰囲気が悪くなる前にネイアに話を振って軌道を修正。あとはお菓子で機嫌をとる。ハクウの立ってではネイアに頼む前よりも若干両者の心の距離は近づいたようだ。伊達に自分よりも長く生きているわけではないのだと思ってハクウが視線を送ればにこにこ笑顔を浮かべているネイアと視線が合った。

その瞬間、なにか嫌な汗が背中を伝ったような気がする。しかしハクウはそれをたいしたことではないと流してしまっただが、よく考えればネイアはそれほど素直でいいヒトではないことを知っていたはずだ。気がつかなかったのは彼が妹と弟のことですトレスを溜め込んでいたり、仕事のしすぎで疲れていたからである。休養の重要性が身にしみる。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「さいきん、はたらきすぎかも。しばらく休んだら？」

「ああ、ちょっとぼんやりしてたみたい。心配かけてごめん」

ふるりと首をふって微笑み返せば二人は上手く反応できないことも知っていた。彼らはどちらもひどく孤独を恐れている。だから相手の心の奥まで踏み込むような勇気ある行動は出来ない。そのせいでなんだかんだで似たところのある彼らが上手くいっていないということには気付いたが、どうすれば彼らを変えられるのかはさっぱり分からなかった。

「あ、そういえば納期が近かったんだ」

「またしごと？ まったく、あにはこれだから」

「この子たちのことは僕に任せてよ。仕事終わったら休んじやえばいい」

「せっかくだし、お言葉に甘えようかな」

注文を受けたのならば仕事はこなさなければならない。舌打ちをした気分だ。どうにも気に入らなくて描きなおそうとしたままうつかり忘れていたことが腹立たしくてたまらない。疲れているときは些細なことでも気分を害することを思い出し、ここでもうやくハクウは自分の疲れを認識した。

一度気が付いてしまうと途端に身体が重くなったような気もする。しかしやらなければならないこともある。なのでハクウは挨拶もそこそこに席を立った。クーヤをじっと目を細めて見ているスノーヤ、その視線を無視してわざとらしく飴を口内で転がしているクーヤ、それとにやにやと笑ったままのネイアには気が付かなかった。

締め切り間近には投げやりな気分になる者も多いが、真面目で完璧主義のハクウはそんなものとは無縁であった。堂々と背筋を伸ばした姿勢で、かつリラックスしたまま彼の手の筆は躍る。迷いなく置かれていく色は重なり合うだけでよりキャンバスの中を輝かせ、すらりと伸びる曲線は一筆ごとに静かに強く絵画の中の空間を広げていく。まるで一つの世界をここに閉じ込めたような、それほどまでに美しい絵だ。

劣化防止の魔法を掛けて完成したそれは、ハクウにとってはごく普通の作品であるがために特に感慨もなく箱の中に仕舞いこまれた画材を片付けるのも面倒だが、これらを他人に触らせるのも不愉快だ。よって毎回彼は魔法も使ってさくさく片付けていく。

ハクウに与えられた部屋は無駄に広く、疲れているときは掃除が嫌になるくらいだ。しかし自分の部屋に他人が入ってくるのも嫌なので、これまた魔法を使って掃除を行うのである。魔法の無駄遣いだ。使用人たちに仕事を与えないという点では、彼はあまり褒められた主ではない。

すぐにやらなければいけない仕事はもうないし、少し横になって休もうとしたところに、こつこつと扉を叩く音がする。起き上がった扉を開ければ、スノーとクーヤの面倒を見ているはずのネイアが深刻そうな顔をして立っていた。驚き、いぶかしみながらも声をかければ予想外の、いや今朝までは予想していた展開に、疲れを抱えたハクウは再び屋敷の廊下を走る羽目になった。

スノーとクーヤが大喧嘩をして、今にも魔法を使い出しそうなくらいに怒っているらしい。

場所は変わって西の庭。近づいていくあいだにもお互いを罵る声は大きくなっていく。しばらく、言い方は悪いが子供らしい悪口が続いていたかと思えば、いつのまにやらほとんど心をえぐるようなきつい言葉が聞こえ始める。ハクウが彼らの元にたどり着いたとき、今度は二人ともハクウの存在に気が付かなかった。彼の前ではおとなしかったクーヤが叫ぶ。

「ネクラ！」

「考え無し！」

スノーも負けじと声を張り上げている。どちらも今まで見たことがないような顔をしている。一般的な子供の喧嘩と違って、彼らには魔法という恐ろしい攻撃手段があるため、万が一のことも考えて結界を張ることにする。勿論遮音効果もつけておいた。野次馬しに來ていた使用人たちも各自の仕事に戻らせる。そうしているあいだにもますます争いは熱を上げていく。そしてとうとう、クーヤが言ってしまった。

「この……役立たず！」

スノーは自分が家族の誰よりも劣っていることを知っていたから、それに、相手が自分よりも才能があるということもあいまって、それはそれは強い衝撃を受けた。そんなことは、自分がよく知っている。皆が一番体力のないスノーに合わせて旅をしていてくれたこと。消費するだけで何も返せないこと。勉強だって一生懸命やってるのにあつというまにクーヤに抜かされてしまったこと。

最大級の地雷をここまで盛大に踏み抜くとは、クーヤもなかなかやるなあ。腕を組んで成り行きを見守っていたネイアは俯いてしまったスノーを見て感心していた。ここではらしてしまえば、二人の喧嘩をここまで煽ったのはネイアである。子供同士の喧嘩をなだめることが容易ならば、逆に加熱させるのもこれまた容易だ。

一応、本音をぶつけ合えばすつきりするだろうという理由もあった、しかし一番強かったのは『面白いものが見たい』という感情だった。だからこそ必要以上に煽ってみたのだが、思ったよりかは楽しめたのでネイアとしては万々歳だ。二人の仲が壊れたら、天狐族であるハクウの出番が来るだけの話だ。適当でいい加減に記憶を弄っておけば問題はない。全部ぜんぶ、なかったことにしてしまえばよいのだ。

23・ふたり、手を繋いで

手酷い言葉を言った側であるはずのクーヤよりも、言われた側であるスノーに視線が行くのは当然の成り行きで、ハクウの視線の先のスノーは俯いたまま、今にも泣きそうに肩を震わせている。今にも水色の少女の感情が溢れそうになっている状況で、しかし動き出したのは赤毛の少年であつた。

衣擦れの音、僅かな音を立てて芝が潰される。振り向いた先にはクーヤが頭を抱えながら地面に膝をついてしまった姿があつた。普段は血色のいい顔を真つ白に青ざめさせ、いつもにこにこと子供らしい笑みを浮かべている彼は表情をなくし、なにも見えていないかのように焦点を散らしているその眼差しはスノーの涙を止めるには十分なものであつた。

「ごめんなさい」

「……クーヤ？」

彼の正面に立っていたスノーはそのあまりにも尋常でない様子に何も反応できず、代わりに恐る恐るハクウが声をかけるとクーヤは堰を切つたように話し出した。いや、それはこの場に居る特定の誰かを対象にした言葉ではなく、どこにもいない相手に向かつてのものであるから独白と形容するべきものかもしれない。金の瞳を虚空に揺らしながら少年はともすれば囁くような声で叫び続けている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、ちがう、ちがう……だから、ぼくは、とうさまのじまんのむすこで、だから、だから……いいこになるから、いらないこじゃなくて、ちゃんとできるように

なっただよ、ああ、ごめんなさい、たたかないで、ごめんなさい……ごめんなさい……」

昂ぶった感情は無意識に焰の式を紡ぎだし、青々と生い茂っていた芝生が目には痛いほどの赤を持つ熱に飲み込まれる。青いにおいが灰と混じって熱風に巻き上げられ、焰に焼かれ姿を現した褐色の大地は見る間に乾いていく。赤の少年を囲っている青みを帯びた熱の壁は、まるで無垢な雛鳥を守る殻のようでもあった。

「クーヤ！」

名前を呼び、強制的に術に介入する。もとより緑が多く設置されている庭で、空気中の水分を操り局所的なスコールを作り出すことはハクウにとつては至極容易なこと。癒しの力が籠められた天の恵みを受けて大地は再び緑に覆われていく。ハクウはまだ雨の降り止まないうちにクーヤへ向かって歩き出した。布を多く使ったゆったりとした衣装は水に濡れると重みを増す。魔法の効力が切れ、雨が上がった後には七色の虹の橋が空にかかっていた。

「……落ち着いた？」

「あ……」

ぱちりと瞬きをして、クーヤはハクウを視界に入れた。着ていた服は全体的に煤けてしまったものの、金色の瞳には光が戻っている。ハクウはそれを落ち着いたのだと判断し、灰で汚れたクーヤの頬を布で拭いながら優しく笑いかけた。

「昔きみに何があったのかは聞かないよ。でも、一人で抱えきれなくなるまえに」

「う、うわ、どうしよう、ごめんなさい」

「大丈夫、きみの間違いごと受け止めるから、まずはオレの話を聞いて」

「あ、え……ち、違うから、その、僕を、捨てないで……！」

……混乱が治まったのかと思えば実際はどうにも違っていらしく、ハクウがせっかく気障な台詞を言おうとしていたのにも関わらず、クーヤは濡れた服のままあつというまに門から飛び出していった。煤けた布を持ち上げたままの姿勢で固まったままクーヤの背中を見送って、それからハクウは思わず吼えた。

「何でそんなこと言いながら外に逃げていくの！？　っていうか、最後まで台詞言わせてよ！」

あーもう、濡れた服が重たい！　自分から雨に飛び込んで濡れたのにこの言い草。実に幼い。魔法で服から水気を取り除きつつ、ハクウもクーヤの背を追って走り出した。弟の面倒を見るのも兄の勤めであるという意志を胸に秘めて。

「あらら、結界も解かずに行っちゃったね。これじゃ僕らはハクウが帰ってくるまで外に出れない」

この町は入り組んでるし、すばしっこいクーヤを捕まえるのは大変だろうなあ、と言葉の内容とは裏腹にネイアは楽しそうに笑っている。そんな彼を見て、スノーは途端に恐怖を覚えた。目の前で義理とはいえ自分の息子があんなことになっていたのに一切心配していない。ハクウがどうにかしてくれるだろうという信頼とも取れた

が、それというよりはネイアはクーヤに対してなんの情も抱いていないかのようであった。

「それにしても、クーヤは盛大に自爆しちゃったな」

「……自爆？」

「あれ、気付いてない？ あの子、自分が『役立たず』で『お荷物』だったことを自分の言葉で思い出しちゃったんだよ。過去のつらい経験が蘇ってきて、すっかり感情を制御しきれなくなってボツカーン！ 上手に仮面を被ってたと思ってたけど、やっぱりまだまだ子供だねえ」

軽く握った手をパツと開いてけらけらとネイアは笑い続ける。…これは、なんだ？ 目の前の相手が何を言っているのか、スノーにはまるで分からなかった。なぜ、そんな楽しい笑顔であんなことを言えるのだろうか。

少女はこれまでのわずかな記憶を振り返る。『彼女』が生まれて初めて見たのは兄だった。そのころにはすでにネイアは養父であったはずだ。思い浮かぶのは目の大きい甘い顔立ちに人好きのする笑顔に乗せて真っ直ぐに立っている姿。前髪を下ろすと幼く見えるから、と桃色の髪は後ろに流している。町を行き交う人々、いや絵姿で見た王侯貴族と比べても引けを取らないほどの美形だと、幼いながらも女であるスノーは気が付いていた。

話し上手で聞き上手。反応はやや大げさだがびっくりするぐらいに魅力的な表情。兄と話す姿は親子ではなく歳の離れた兄弟のようだった。子供があまり得意ではないと言っていたが、スノーへの対応は完璧だったと思う。……だれと、比べて？

「ねえ、いつまでそうしてるの？」

「そう、つて……」

父を、自分を信じられなくて、でも信じたくて。スノーが混乱を抱えながらるように視線を向けた相手は先ほどとまったく変わらない笑みを浮かべていた。鸚鵡返しをしてしまったスノーを咎めるでもなく、ネイアは傍にあつた長椅子に腰掛けて気の抜けたように伸びをしている。

「だーかーらー、いつまでハクウくんに全部頼ってるつもりなのかつて聞いてんの。今はまだいいけど、これから先おんぶにだっこじや駄目駄目でしょーが」

「わ、私、そんな……」

「頼ってないとも言つつもり？　はは、冗談でもやめてよ。じゃあ聞くけどさ、逆にだよ？　これまでの生活の中で、スノーちゃんがお兄様に何かしてあげたことってあるの？　常にあの子からスノーちゃんへの一方通行だったじゃないか」

彼は笑う。

「ああそうだ。おもしろいおはなしをしてあげる」

笑っている。

「むかしむかし、でもなくてちょっと前のことです。小さいころに親を亡くし、教会で暮らしている兄妹がいました。しかし妹は赤ん坊であつたところに呪いによって眠り続けてしまうようになりました。だから兄の少年は勉強して勉強して勉強して、とうとう妹の呪いを解く方法を見つけました。しかしそれには非常に珍しい薬草を使わなければならず、そんなものを手に入れるためのお金なんて持っていません。しかし、神様は彼らを見捨ててはいませんでした。ちょ

うどそのころ、少年達の暮らす教会へひとりの青年がやってきます。修道女の友人である彼は遠方からの旅を終えたばかりで、なんと偶然にもその薬草を所持していました。色々あつて、それをどうにか譲り受けた少年は妹を目覚めさせます。青年は美しい兄妹愛を見て感動し、この子供たちを引き取ることにしました。めでたし、めでたし」

すつと目を細めて、上向きの弧を描いていた口が歪む。

「——なんちゃって。そんな偶然、あるわけないだろ？」

何の感情の欠片すら含まれていない、温度のない眼差し。

「小鳥がドレスを運んでくるわけもないし、カボチャが馬車になんてなるはずもない。目の肥えた王子様に一目惚れされるなんて砂場に金が埋まっている可能性くらいのものだ。ついでに言えばガラスの靴なんて舞踏会へ行く前に壊れておしまい！」

舞台上での演技のように、両手を顔の横まで上げて、落とす。

「全部偶然なんてものじゃない。仕込みだよ。元からそうなるように決まってるのさ」

右手をひらひらと振って、顔を仰ぐような仕種。

「今回の場合はお金を持っていなかったということまでホント。それから後はウソ。僕があ教会にやってきたのはシスターに会いに行くためじゃなくて、最初からハクウを養子にするため。だって、あんなに美しい、価値のある絵画を生み出す存在を放つといってみす他の連中に渡すなんて、そんな馬鹿な話はないでしょ？」

彼が首を傾げれば、わずかに崩れた桃色の前髪が揺れる。

「君のお兄様は君を助けたくて、僕は単純にお金が欲しかった。僕は件の薬草以上の価値をあの子に見出したし、あの子も養子になることより君を助けることを優先した。お互いの要望が通った素晴らしい契約だ」

ネイアは再び立ち上がり、スノーを追い詰めるようにゆっくりと一歩一歩踏みしめるように歩き始めた。

「手っ取り早くお金持ちになるには価値のあるものを誰より先に確保すること。僕の見立ては間違つてなかったよ。あの子は期待以上の能力を持っていて、期待以上によく働いてくれている。得しちゃった」

「そんな言い方はないよ！」

あまりにも強烈な物言いに、ネイアに圧倒されていたスノーは思わず声を出した。あれほどがんばっている兄を馬鹿にしたような言葉を聞いて、声を出さざるを得なかったのだ。そんな彼女のことにも留めず、ネイアは声高らかに演説を続ける。もっとも、ハクウの張った結界のために聞いている観客はスノーだけである。

「カフカ家は昔から才能があっても資金がない人材を見つけて取り立ててきた。だからこそ今の繁栄がある。拾ってきた人間達は自分の才能を如何なく発揮できて、彼らの生み出すものは世界中の人間を幸福にし、なにより僕たちはたくさんのお金が貰えるんだ。ほら、みーんなしあわせ！ 実に素敵だ！ 大団円だよ！」

言い切ってから、腰をかがめてスノーの耳元に口をよせる。

「クーヤは君のことを役立たずって言ったけど、大丈夫、僕にとっては君は最初から『おまけ』なんだから期待なんてしてない。別に頑張らなくてもいいんだよ？ とっても、とーっても価値のある、君の大切なお兄様の邪魔さえしなければ」

まあ、邪魔をしていたからこうして釘を刺してるんだけどさ？ そんな冷たい言葉にすら笑いが混じっている。その場から動けないスノーに背を向けて、ネイアは笑う。

「たとえ価値の低いものでも、僕らの売り出し方によっては高い値段が付く、付けさせることができる。だからいざとなったらそういう扱い方をするつもりだけど、多分、そのときもお兄様が君の事を守ってくれるから安心しなよ。あははっ！ いいねえ、羨ましいねえ。君は何もしなくても一生金銭的に不便な思いをすることはないだろうからさあ」

……ここまで言われると、温厚なスノーにも流石に怒りが湧いてきた。勝手なことを言い方をして、スノーだけでなく、クーヤやハクウに対しても失礼だ。頭に血が上っていたから話の内容は分からなかったが、思い返して理解して、今度は赤くなった顔が青くなっていた。

「ねえねえ、君は今までどれだけ頑張ったの？ ……答えられないよね。というより、君の努力は彼らからしてみれば努力とは言えないくらいのちつぽけなものだ。そんなんだからクーヤも怒ったんじゃない？」

クーヤが『普通』を知らないからそうした反応をしていたのだろうということはいわず、ただただ責める言葉のみを口にする。ネイ

アにとつてのストレス解消法は、このように他人を追い詰めてその姿を楽しむというものであった。長年人間社会で生きているせい、彼は性格が悪い。

「……さい」

「ん？」

「うるさい！　うるさいうるさいうるさい！！」

つくぎゆうと鳴いたネイアはきつと目を吊り上げたスノーのパンチを食らった。ノーダメージ。筋肉は鎧、というのがネイアの持論であった。攻撃が通らないことを承知でスノーはネイアをポコポコと叩き続ける。

「知らないからわかんないんだもん！　言葉があるんだから私に直接言えばいいのに、なんで何も言わないで勝手に期待されたり失望されたりしなくちゃいけないわけ！？」

「おお、逆切れだ。実に素敵」

「確かに私も気を抜いていたところもあつたけど、私は天才でも大人でもないから言われないとわからないよ！　クーヤの馬鹿！　お父さんの大馬鹿！！」

今まで一度も聞いたことのないスノーの怒鳴り声。ネイアは何故かちよつと楽しくきた。特に被虐趣味があるわけではない。

「私がおかしいんじゃない、むしろそっちがおかしいんじゃない！　もっと普通を知ってよ！　あ、いや、それは私が話さなかったからクーヤは知らなかったのかもだけど……」

「じいじによいよと一人で言い訳をして、しかし手の動きは止めない。

「クーヤが帰ってきたらちゃんと話し合う！ 私もこれからはもつともつと努力する！ だから見てて！ おまけなんかじゃなかったって言わせてあげるから！！」

「……ぷつ、あは、あはははは！ あーおかしい、なんなのこの展開！ 結界も解けたし！ ハクウくんってばようやく気が付いたの！？」

「お父さん！！」

「ああ、そうじゃない、ちゃんと聞いてた——うん、いいよ、ちゃんと見ててあげる」

微妙に涙目になりながら宣言したスノー。テンションが上がりすぎてなんだか笑いたくなってしまうたネイア。だが、一字一句もらさずにしっかりとスノーの言葉を聞いていたネイアはスノーの頭を一撫でし、それから彼女の手を取って屋敷へ向かって歩き出した。ここでようやく、ネイアはスノーを認識したのだった。

「よし、なにかやりたいことはない？ 芸術関連ならすぐにでも用意できるよ。絵画、彫刻、音楽、ああ、小説でも書いてみる？ 小説家になんかなっちゃう？」

「えーっと」

「何でもいいよ？ 資金はあるんだ。失敗したら……そうだな、ハクウの借金にでも足しとく」

「やめて！」

「冗談だって。こういうのは失敗も成功の元でしょ。お金で買えない経験は大切だ。投資を出し惜しみしたらいけないところ」

妙にノリノリで提案しつつ、ネイアは笑っている。怒ってみせたりもしつつ、スノーも笑っていた。

「おっと、忘れるところだった。この話はハクウには言わないであ

げてよ。これ以上心配事を増やすのも可哀想だからさ」

「……言われなくても！」

ぶくりと頬を膨らませて、いかにも怒っていることを表現している。その怒りも歩いているうちに霧散してしまった。そうしてふたりは和やかな雰囲気のまま屋敷の中に戻っていった。それは確かに、ひとつの親子の姿だった。

24・羨望

×××××という名の少年がいた。もう誰にも呼ばれることのない名だからこそ、このまま伏せておくことにしよう。彼はとある国の、これまたとある貴族の家に生まれた。母親は病弱で、少年が生まれてからしばらくして儂くなってしまったのだと同じ箱庭に住む侍女は言う。だとしたら家族はもう父親しかないのだろうと考えた少年は、それこそ必死で、たまにしか少年の住む館へ姿を現さない父にすぎた。

そして与えられたのは絶望。当時の少年は魔力量も少なかった。焦れば焦るほど魔法はぶれる。接続が上手くいかない。そもそもまともな感情を与えられていない少年が心の力を使いこなすことなど出来るはずもないのだ。そんな可哀想な少年に対して愚かな父親は冷酷な態度を崩さなかった。それでも少年は父親にすぎた。やっぱり魔法はなかなか上達しなかった。

少年の母親は驚くほどに大きな魔力を持っていた、母に仕えていたという侍女が言う。肖像画の一つもないこの場所で、その侍女が口にする話だけが少年の母親の姿を思わせた。話の中の母親はたおやかで優しい、少年がなによりも欲していた家族の情を与えてくれそうな人だった。庭の片隅で白いつばみが揺れている。

少年の母親は使用人にも分け隔てなく優しく振舞う慈愛に満ちた人だった、普段の無表情をわずかばかり崩した侍女が言う。天秤が傾いたのはいつごろの話だっただろうか。少年の執着の対象は次第に、少年のいる場所にはいない母親になっていった。なぜならば母親は何も返してくれないが、かといって少年の気持ちを踏みにじる

ことはなかったからだ。当然、死んでいる人間に踏みにも何もない。無貌の女性は少年の心の中で微笑み続けるだけだ。あまり人の通らない庭、そこには雪のように真つ白な一輪の花が咲いていた。

少年の母親は最期まで少年のことを想っていた、時折少年に笑いかけてくれるようになった侍女が言う。その言葉と共にこつそりと渡された古い装飾品は持ち主に大切に扱われてきたようで、少年の服の下でぴかぴかと誇り高く輝いていた。ようやく掌の上で火花を出せるようになった少年は喜んだ。が、そんな些細で大きな喜びもやはり踏みにじられた。綿毛だけになった花は飛び立つときを待っている。

どうか幸せになってください、そう、口の端から赤い雫をこぼしながら侍女が微笑む。胸からは鋭い刃先を生やしていた。白いエプロンがじわじわと染められていく。彼女の背後で武器を握っていた男は少年の父親の魔法によって焼かれた。その炎に巻き込まれて侍女も燃えた。目玉が零れ落ち、ぽっかりと空洞が出来た。肉の焼ける嫌なにおい、白かった指先は黒い炭になって、そこからまた白い骨が覗く。

「わざわざこんな何も置いていない場所を狙うなんてこいつらも馬鹿だな」

不快そうに顔をしかめながら少年の父親は晒った。それから『お気に入り』の侍女』を殺された少年を見て、また嗤った。

「ほら見るよ、お前が役立たずだったからこいつは死んだ」

自らの重さに耐え切れず崩れ落ちた頭蓋は空っぽになってしまった目を少年に向けている。足元がふらついて、立っていられなくな

った少年は無意識に服の上から母親の形見を握った。ぐちゃり、と侍女の血で手が赤黒く染まる。他人の血もやはり、少年と同じように赤くてベタベタしていた。少年が侍女に教わりつつ育てていた花は熱風に巻き上げられて燃えている。

「高値で買い取った女に生ませたのに、ここまで才能がないだなんて逆に笑えるな」

涙も流さずに硬直している少年の腹を蹴飛ばし、少年の父親は不機嫌そうに吐き捨てた。荒い呼吸音、ぱちぱちと燃える花々、館から聞こえる侵入者の悲鳴、鉄と煙のにおい、滲む視界。少年はこのとき初めて、そう本当に初めて涙を流したのだった。身を守るように丸い姿勢のまま自身の頬を撫ぜる。頬は赤く染まり、掌の一部は元の白に戻った。

炎は燃える、燃え続ける。庭に運び出された侵入者と門番だったものの死体が積み上げられていった。時折死にきれなかった者の断末魔が響く。もうまともに動かせない手足を振り回し、喉をかきむしり、もがき苦しみながら死んでいく。運ぶ途中で落ちてしまった腕が拾い上げられて、それから炎の中に放り投げられた。肉塊の山を転がって、またも炎の外に出た。黒く煤けた腕は爪の先だけが燃えている。

——熱い。

それが起きたのはいつだったかはわからない。少年が気が付いたときにはすでに周りで炎が躍っていた。触れようとしても少年の手を避けるかのように炎は真つ二つに分かれる。ゆらゆらと少年の視界を捻じ曲げながら、少年を守っているかのごとく傍で燃え続けている。そんな少年の様子にようやく気が付いたらしく、少年の父親

は大きく目を開いて驚いていた。

「なんだ、やればできるんじゃないか。これで、お前なんかのために死んだあの使用人も浮かばれるだろう」

これが初めて見た父親の笑顔だった。少年はそれを目の前の黒い山の中心に横たわっているはずの侍女の笑顔と比べて、言葉を比べて、もう一度、服の上から母親の形見を握り締めた。炎の熱で血は乾いて固まっている。

少年が気が付いたときにはすでに何もかもが燃え尽きていた。みともなく這う這うの体で逃げ帰っていった父親の背中だけがふと思い出されて、ああ、父様はまだ死んでないんだな、と少年は胸のうちで呟いた。黒かった山は白くなり、風に吹かれてからからと軽い音を立てて小さな骨が転げ落ちた。外からしか開けられない、深い堀に囲まれた鳥籠のなかには見回してみても白と黒しか存在しない。

こうして見れば、ここにある、なにかもが無価値に思えた。少年は水へ飛び込もうと幽鬼のような足取りで歩いた。水面に映る少年の頬には涙が伝ったあとが残っていた。じつと自分の顔を見つめて、それから足を踏み出そうとしたとき、突如として何かが少年の足首に巻きついた。抵抗する暇もなく水の中に引きずり込まれる。見上げた水面は太陽の光を乱反射していた。

声が聞こえる。

『いきる　って　つらい　ね？　くるしい　ね？　』

幼い声を無理に加工したような、それでいて不思議と不快になら

ない声だ。

『これから さき いっぱい いっぱい いやなこと まってるよ

でもね きみ は まだまだ いきて いかなくちゃ いけないんだ

おかあさん や あの おんなのこ の かわりに ね

だから きみ に えらばせて あげる

なにも かんじない ように なりたい ？ 』

少年はこの問いにゆっくりと頷いて——こうして、少年は自分で生きることを諦めた。×××××、十五歳の誕生日のことだった。

「あ、つい結界そのままにして来ちゃった……今のうちにこっそり消しとこ」

あとで謝らなくちゃなあ、そんな独り言を呟きながらハクウは匂いを辿って走り回っていた。自分が降らせた雨のせいでクーヤのにおいが若干薄まってしまっているが、そんなことは彼のような人にあらざるものにとって何の障害にもならないのだ。人の波のあいだをすり抜けつつ、クーヤのことを考えた。

この世界の神の一柱である天多蔓尊あまのたつるのみこと、ネリアウオルジュ教ではルトウトウ・ジフクオーヨティと呼ばれている神は、いわゆるトリックスターである。子供のように無邪気に自由に振舞う、世界の境目に住んでいる神だ。大抵の勇者は彼の神の声を聞いてからこちら側、つまりは地上に落ちてくる。しかし仕事が約百五十年に一回か二回しかないために暇を持て余しているのだ。

だからこそ、こちら側の人間に干渉を行って暇を潰しているのだが、クーヤもその暇つぶしに巻き込まれていた。十五歳だった少年は半分ほどの年齢に戻され、さらにそこで成長を止められて自身の意志も抑圧され、ある意味で魔獣のような存在と化していたのだ。ご丁寧にも、クーヤを捕まえたときにまじないの解き方が直接示されたおかげで、ハクウはすぐさま治療に取り掛かることが出来た。子供に戻した理由はといえばこれである。

『そのほうが かんしょう しやすい し

なにより かわいい じゃん？ 』

と、いう他愛もないものだったらしく、神との交渉を専門にする天狼族の一族が頭を抱えていた。

屋根の上を走れば速いのだろうが、これほどまでに景觀に気をつかっている国で建物の屋根に足跡なんてつけてしまったら罰金どころじゃ済まされない。よって、ハクウはひたすら地道に走ることにした。無駄な事はしない、それが彼の常識である。

行き止まりで引き返したり、刺激臭のする商品売っている店のおいに鼻をやられかけつつも走り続けた結果、ハクウは無事にクーヤを見つけた。奇妙なオブジェのある公園の、これまた奇妙な形をした遊具の影で座り込んでいる。服は濡れたままだ。俯いていたせいで狭まった視界にハクウの足が目に入ったらしく、クーヤはわずかに震えながらゆっくりと顔を上げた。見るからに怯えている。それでも瞳の奥には希望が揺らめいているのをハクウは見逃さなかった。こういうときに言わなければならないことは、伝えなくてはならないことは、たったひとつしかないのである。

「クーヤ、一緒に帰ろう」

「……いいの？」

「駄目なもんか。というか、もうクーヤがうちに居て当たり前になつてゐるからさ。むしろ、居ないほうが寂しい」

「本当？」

「疑つてもいいけど、でもやっぱり、信じてもらえたらすごく嬉しいよ」

はにかみながらクーヤの濡れた髪を手櫛で梳かす。毛づくろいをするときのように、そつと慎重に髪の毛をからませないように。ここにもいいのだと、言葉でなく、全身で伝えるために。打算的な考えも持つてはいるが、この気持ちも嘘ではないのだ。されるがままに撫でられていたクーヤにも、ハクウの気持ちはきちんと伝わつたらしい。

「僕も！ 僕もあにたちといっしょにいれてうれしい！！」
「うわあっ！」

目をきらきらと輝かせて飛びついてきたクーヤを支えきれず、ハクウはしりもちをついた。泣きながら喜んでいるクーヤの涙をそっと拭いつつ、水に濡れた身体を乾かしてやる。彼の時間を取り戻したクーヤは日に日に成長していつているため、今となっては自分とそこまで変わらない重さの少年を支え続けるのは少々骨が折れた。

「僕、スノーがうらやましかった」

泣き止むまでその場に留まらざるを得なかったので、現在はハクウがクーヤの手を引きながら夕暮れの中を歩いていた。クーヤは自分の感情と向き合いながらぽつりぽつりと言葉にしていく。ハクウはそれを静かに聞いている。続きを催促する意味で少しだけ手に力をこめれば、それよりも強い力でぎゅっと握り返される。

「スノーはかつての僕とおなじだった。……おなじ、だとおもった。なのに、スノーにはずっとあにがいてくれたのに、僕にはだれもいっしょにいてくれなかった。かぞくが、いなかった」

「……そっか」

「ひとりだけ、僕にやさしくしてくれたひとといた。でも、もうしんじやった。でも、スノーのそばで、あにはいきてる。ずるい」

少しだけ声が大きくなる。心のうちから搾り出すような、声こそは落ちて着いているが、それはたしかに悲鳴だった。

「僕のほうが、がんばってるのに。わがままだっていわない、いいこなのに。なんでスノーばかり！」

ハクウは振り向かず、しかし優しい声で諭すように言った。

「そんなに一人で頑張らなくてもいい。わがままだってなんだって言えばいいよ。あのひとたちは、なんだか頼られるのが嬉しいみたいだから。……もちろん、オレに頼ってくれていいんだけどさ」

「……めいわくに、なるから」

「ならないよ。断言する。逆に、クーヤが何も言わなければ無駄に心配しなくちゃいけなくなる」

「しんぱいしなくても、僕はだいじょうぶ」

「心配するのはこっちの勝手。オレの自由を侵害しないでよね」

あえて責めるような口調で言えば、クーヤも少しだけ笑みを含んだ声で返事をした。暗くなる前に家に帰らなければならぬ。歩調を速めて早歩き。町を照らす外灯もデイトイルに至るまできつちりと精巧に作られている。影が竜の形になっているようだ。影を踏まないように飛び跳ねてみる。

「きょう、あにがスノーじゃなくて僕をゆうせんしてくれて、うれしかった」

「優先、ねえ……。オレはいつだって平等に扱ってきたつもりだよ？」

「うん、知ってる。でも、あにはずつといっしょにいたスノーじゃなくて、僕をおいかけてきてくれた」

「まあ、あの場には父さんもいたからさ」

「……かった、っっておもった。スノーよりも、ほかでもない、あにが僕をえらんだんだ、って」

「なるほど、優越感か」

「僕、いらぬいこじゃないんだね」

「あたりまえでしょ、ばーか」

ぶらぶらと繋いだ手を振り回しながらふたりは歩いていく。民家からはあたたかいスープのにおいが漂ってきた。

「クーヤ」

「なに？」

「あとでちゃんと謝るときだよ」

「うん」

誰に、とは言わない。

「ついでに言つとくけど、あの子だってちゃんと頑張ってるんだよ」
「え」

「実はあの子、赤ん坊のころからずっと眠り続けてさ。目覚めたのが一年くらい前。だからある意味で一歳」

「ほ、本当に!？」

「オレがクーヤに嘘つくはずないでしょ」

もちろん嘘である。この辺の設定は煮詰めてある。自分のためではなく妹のために非凡なる力を身につけた、などという英雄として相応しい設定にしてあるのだ。出身から考えて能力が高すぎることから生じる嫉みを極力減らすための、そしてハクウの歳でこれほどの知識を持っているための理由付けだ。生まれたてのスノーについてもすっかりフォローしている。

「僕、あかちゃんをライバルあつかいしてたんだ……」

「それ、本人には言わないであげて。傷つくから」

「うん、わかった……わるぐちいったことも、ちゃんとゆるしてもらえるまであやまる」

「よし、その意気だ。偉いぞ」

「えらい？」

「偉い偉い」

「へへー」

楽しそうな照れ笑いの声を聞きながらハクウはそつと胸を撫で下ろした。どうにか機嫌をとることはできたみたいだ。ほてほてと歩きつつ、ハクウは考える。それはそうと、スノーとクーヤはどっちが上なんだろう。肉体年齢的にはハクウと同じ年齢で作ったからスノーのほうが上だ。しかし精神年齢ではクーヤのほうが上。身長も上。話し方だとスノーのほうが大人びてる。書類上ではどうなんだろうか。すべてネイアに任せてあるからあとで聞いてみよう。ぽそつと声に出して呟いた。

「……クーヤとスノーに聞いたら、どっちが上なのかで喧嘩し始めるだろうな」

「ん、あに？」

「なんでもない。早く帰ろうか」

「うん、じゃあ……はしらなきゃ！」

「つていきなりは驚くだろ？」

「あー！ たーのーしーいー！！」

「……あれだけ走ったのに元気だなあ」

今度は逆にハクウが手を引かれるようにして走り始める。その顔には優しい笑顔が浮かんでいた。ちなみにこのあと、家に着くならクーヤは熱を出して倒れこみ、クーヤがスノーに謝るよりも先にハクウがクーヤに謝る展開になった。実にこの家族らしい結末の形である。

25・にかいめのはじまり

「えー、ただいまより緊急きょうだい会議を開始します」

「はい」

「……うん」

あの喧嘩から数日後。ハクウの甲斐甲斐しい世話のおかげもありクーヤの風邪はすっかり治ったので、さっそく子供さんにんの秘密会議が始まった。こういう問題は早めに解決しておくべきである。スノーは真剣な面持ちで、クーヤは目線を逸らしながらもハクウの声に応えた。返事を聞いて、まずはハクウから話し始める。

「まずはオレからクーヤに。この前、風邪を引かせちゃって、ごめんなさい。他にも手段はあったはずなんだ」

「んーん、僕、ああしてもらえてあたまひえた。あににとめられてなかったら、みんなにケガさせてたかも」

「風邪はきみが想像しているよりも危険なものだから……なのにみすみす病気にさせるなんて、オレは兄として失格だよ」

「む、こどもはびょうきをのりこえてつよくなるものだよ？ かえってめんえきがつくのさー」

「その意見も否定しないけど……」

「はいもうおしまい！ いいかげんしつこーい！ 僕がいいっていつてるんだからいいの」

くちびるを尖らせながら不満げな表情を見せたクーヤの言葉を受けて、ハクウはようやく笑みを浮かべた。自己満足のための謝罪は続ける意味がない。

「うん、じゃあ、次の話に行くね。んーと、どうしようかな……あー、スノーに聞きたいことがあるんだ」

「えと、なあに？」

「スノーってさ、アーティアは好き？」

「……実は、あんまり好きじゃないの」

「そっか、あれには独特の辛味があるから仕方ないね」

「……え？」

「え？」

うん、やっぱりそうだったんだ。と、ハクウは苦笑いしながら驚きの声を上げた二人の顔を見つめた。なんてことはない、単純な行き違いである。好きなものをいつ食べるかという問題だ。スノーはいい気分で食事を終えるために、最初に嫌いなものを食べて最後に好きなものを食べる派で、クーヤはまともな食生活をしてこなかったせいか真っ先に好きなものに手をつける派なのだ。

「スノーの食べ方にも問題があった気もするかな……。だって、嫌いなものをあんなに勢いよく食べるなんて思わないよ」

「い、一気じゃないと飲み込めないんだもん！」

「食事のときはずっと笑顔で黙ってるから、スノーが何を好きで何を嫌いかわからなくて」

「……僕みたいにちゃんといえればいいのに」

「そういう意味では、クーヤは本当にわかりやすいね」

好きなものなら笑顔、苦手なものは渋々といった顔をしながらも完食する。食事に関しては例の侍女が平均以上のものを提供し続けていたために意外と舌は肥えているクーヤは、あまり子供らしくなく薄めの味付けや癖のある食材を好んでいるのである。よって香草の一種であるアーティアも言うまでもなく好物のうちの一つ。好物を分け与えることで関係の改善を図っていたのだが、それが逆に作

用していたのだった。誤解が解けてなんとなく雰囲気が和やかになったところでハクウは椅子から立ち上がった。

「よし、これでとりあえず二人とも話し合う気になれたかな。オレは出ていくから、あとは二人で話し合っておいて」

「あに……」

「お兄ちゃん、私、ちゃんと向き合うから！」

「……あれ、スノー？」

「なんか、スノーも変わったね。大人になったみたい」

ぐつと拳を作って宣言したスノーを見たハクウは彼女の成長に驚いていた。ネイアになにか言われたらしく、ここ数日部屋の中に閉じこもっていたと思えば、こうして明るい場所で向き合うと心なしか顔つきが変わったかのように見える。子供の成長は早いものだ、とハクウが考えたかどうかは定かではないが、それはともかく、ハクウに頼りつきりだったスノーが自分で自分の面倒を見ようとしているのだから応援するより他にない。上手くいけばクーヤにも良い影響が出るだろう。

「そうだ、喧嘩になる前に言っておくけど、スノーとクーヤは同じ年つてことになってるから。どっちが上とか下とかはないよ」

「え、ほんとに？」

「本当。じゃ、今度こそ行くね」

ハクウは手をひらひらと振って二人のいる部屋から退出した。あとは二人に任せるとしよう。こういうトラブルの解決には基本的に第三者はいないほうがいいのである。なんとなく全部が全部上手くいくような気分になって、ハクウは鼻歌を歌いながら弾むような足取りで広い廊下を歩いていく。窓の外からはきらきらとした光が差し込んでいた。

今請け負っている仕事もないし、ネイアはひとりで母親へのお土産について考えているようだった。あまり装飾品の類については詳しくもない。それにネイアのほうがいいものを見て育ってきたはずなので、ハクウは自分の得意とするところ、つまりは絵を描いて渡すことにした。気に入ってもらえればよし、気に入ってもらえなくてもいかにもお金持ちが好きそうな絵を描くつもりだからきつと高値で売り払うという処理法があるはず。完璧だ。ハクウはひとりで領いた。

そういえば、ティユファダはどうしているのだろうか。視界の端に入った橙色を見て、下書き途中だったキャンバスに布を掛け、ハクウは部屋の外に出てみることにした。突発的に仕事がしなくなつたとかで屋敷から飛び出していったティユファダも帰ってきていると記憶している。

ネイアはなんだかんだで父親として扱われているのに対し、ティユファダの立ち位置は歳の離れた姉といったところだろうか。ハクウよりも長く人間として生活を送っているはずなのに、あまりにも中身が幼すぎて母親としてのポジションを得られていない。あくまで偽装家族なのでどうでもいいような気もするが、それでは子供の教育には好ましくないような気がしないでもない、と長々と考えたハクウは、今度はティユファダの様子を見に行くことにしたのである。

ノックをしても、扉の外から声をかけても返事がない。まさかと思つて扉を開ければ案の定、すうすうと寝息を立てながらティユフアダは書類を書いている途中でうたたねをしていたようだ。ハクウは目の前の光景に呆れながらも、せつかく中身が半分ほど埋まっている書類を駄目にしないためにそつと片付けてからティユフアダの肩を揺らした。瞼の下から現れた萌黄色の瞳は夢の波間を漂っているかのようだ。

「私、寝てません……あれ、私、んう、じゃなくて、あたし……？」

「これ、完全に寝ぼけてる反応だろ」

「ねてません……すやり」

「ああもう、言ってるそばから！寝るならちゃんとベッドで寝なさい！」

「はい……」

どっちが親だかわかりやしない。ティユフアダはゆらゆらとふらつきながら立ち上がり、そのままベッドに倒れこむように突っ伏した。数分もしないうちに聞こえてくる寝息。本当に、一体どれほど疲れていたのだろうか。ハクウは朝から早起きしてスノーとクーヤの仲を取り持ち、それを終えたら自主的に仕事、休憩代わりに昼過ぎからはティユフアダのところに来たのだが、化け物並みに体力のあるティユフアダがうたたねをしてしまうほどに疲れてしまっているのだ。

動機はともかくとして、従者である彼女がきちんと自分の出来る仕事をしてきたのなら、彼女が倒れたりしないように支えてやるのも主君の務めだとして、ハクウは自らの知識と照らし合わせなが

ら報告書の空白を埋めていくことにした。もちろん、筆跡も偽造して。

ティユファダが目を覚ましたとき、すでに茜色の太陽は地平線の彼方へと落ちていた。彼女は二、三瞬きをして、天井を見上げたまま一言。

「知らない天井だ」

「いや、それはないだろ」

「ご丁寧に、すばやく片手を振りぬくタイプのツツコミである。呆れ顔のまま、ハクウは首をこきこきと鳴らしている自分の従者に声をかけた。

「あのさ、なんでそういうよくわからないことを言ったりするの？」

「こういうときはそういう風に言うのだと、むしろ言わなければならぬのだと、ネーさんに教わったからです」

「元凶はあいつか……」

遠い目をしたハクウのそばに、服装を正したティユファダが近寄ってくる。

「あとは私がやります、この度は我が君にお手数をおかけしまして何の申し開きもございません。今は只、我が君の御慈悲に感謝するばかりです。今後はこのようなことがないよう誠心誠意勤めますので平に御容赦くださいますようお願いいたします」

と、まあ、やけに腰が低い上に長つたらしい謝罪の言葉を告げて頭を下げたティユファダに対し、ハクウは「う、うん……？」と気の抜けた返事をするだけでも精一杯だったのであった。そんなに謝るくらいならハクウが手伝いを申し出る前にすべての仕事を終わらせておけばよかったのではないか、ということが頭の端をちらりと掠めたがあえて口にする意味もないような気がして黙っておいた。

「そっか、わかった。もしかして、最初は敬語から始めた？」

「はい？」

「ああうん、人間の言葉のことね。今使っている言語についての勉強の仕方」

「わあ、おっしゃるとおりです！ どうしてわかったんですか？」

一度休憩を挟んだティユファダは手際よく書類を仕上げ、ご自慢の竜に持たせて飛ばした。現在は夕食までの空いた時間をハクウと過ごしている最中である。首を傾げたティユファダへ、ハクウはどこか自慢げに笑っている。

「普段は『あたし』を使ってるみたいだけど、気を抜くと『私』って言ってるからね。ところで、別に普段から私って言ってもおかしくないのに、どうしてわざわざ一人称を変える必要があるの？」

「それはですね……面倒だからです！」

「一々変えるほうが面倒だと思うよ」

わかつちゃいないとばかりに首を振るティユファダにハクウは一

瞬イラつとしたものの、そこは主君の余裕を持ってスルーした。ティユファダはぴこんと人差し指を立てて神妙な顔をしてみせる。

「私って言うよりあたしって言ったほうが、なんていうかこう、人間に好かれやすいのですよ」

「ふうん」

「仕事が出来るとその分あんまり強くない連中に恨まれやすいわけですし、かといってそういう奴らでも一応味方に属するわけなので、戦う相手にするのは面倒じゃないですか」

「確かに味方を減らすのは得策ではないな。弱い奴らの中には当然資金提供要員も含まれてるだろうし」

「戦って面白い相手ならむしろ戦いたいんですけどね。それでまあ、あたしも微妙に困ってしまつてネーさんに相談したのですよ」

「で、解決策がそれ？」

「はい。当時、あたしが敬語しか使えなかったことを知ったネーさんが色々教えてくれたんです。そりゃあもう、効果は劇的でしたよ」

もちろん不必要に語尾を伸ばしてみたり、妙なことばかり口走っていたりするだけでそれほど効果が出るわけでもなく、ネイア自身も使っている『言葉の印象を強める魔法』の力である。変な言葉使いをしていればそのまま『変な印象』を与えることができるし、逆に丁寧な言葉使いをしていれば『礼儀正しい印象』を強く与える。そうして相手に与える印象を発言者側がある程度選別することで思考を誘導するという、実に扇動に向いている魔法である。ちなみに人間にしか効果はない。

もうひとつ、『印象を上方修正する魔法』もいつしよにティユファダがチェーンに通して首から下げている指輪に籠められているのだが、そんなネイアの親切心を露とも知らずティユファダは今日も能天気な笑みを浮かべているのである。ハクウも『ネイアが言わな

いだから別にティユファダが知ってても知らなくてもどうでもいいんだろっ』と判断し、話題を変えることにした。

「話は変わるけど、出発は明後日だったよね」

「そうなんですよお！ 久しぶりにあの方に会えると思うと、あたしはもう楽しみで楽しみで夜しか眠れません！」

「さっきも寝てたでしょ」

「てへ。ばれちゃいましたか」

「……うん。ばれちゃってる」

こういう冗談もネイアから教わった手法なのだろう。しかしなんとなく腹が立つ言葉である。時折妙な冗談やら突飛な発現やらにやらが飛び出してくることも少しは、いやそれなりに、というか数多くあったが、そこは無視という華麗な対処法で乗り越えてティユファダから情報を集めることに専念したのだった。

日付も飛んで出発の日。あれからスノーとクーヤは仲直りをしたようで、今は距離を測りつつもお互いに興味を持っている状態なのでこれ以上ハクウが心配する必要もなさそうだった。そんな彼らの一方はすでにこれから待ち受けている空の旅に怯えて涙目になりつつ、そしてもう一方は慰めるかのように不器用ながらも優しい言葉をかけている。実に麗しい思いやりである。そしてネイアは胃の辺りを押さえており、ティユファダは輝くような笑顔を浮かべている。

「よーし！ そろそろ出発しましょーか」

「……そうだね、そろそろ腹を決めなくちゃな……」

「父さんはびくびくしすぎ。男は度胸って自分で言ってただろ」

「お、おんなのこも度胸が必要だね……」

「……どうでもいいけど、あんまりむりしないでよ？」

「うっ……私、がんばるから」

見た目相応の微笑ましいやりとりを繰り返す少年少女の背を押しつつ、竜による空の旅は順調な滑り出しを見せたかのように思えた。

しかし、しかしだ。そんな快適な空の旅もあつというまに終わりを告げた。悠然と美しい翼を動かしていたはずの竜の羽ばたきが乱れ、ぐらりぐらりと空中を彷徨い、そして不時着のような形で町から数刻ほどの開けた草原に降り立つこととなってしまったのだ。竜の背に捕まっているだけでも精一杯だったハクウが、竜が地面に足をつけて動かなくなったところで声を上げた。

「母さん、大丈夫!？」

「ああ……うぐっ……!」

「いきなり、どうして……」

「……ハクウさまあ、聞こえないんです、か」

「か、母さん？」

転がり落ちるように竜から降りてきたティユファダは頭を、というより耳を抱えるようにして、身体を丸めて地面に倒れこんだ。あまりにも唐突過ぎる展開に皆が固まっているとき————ついに、それは起きたのだった。

『報告致します』

声。声が聞こえた。耳の裏を撫ぜるような、背筋を冷たい何かが走りぬけるような、絶対的で暴力的な、それでいて酷く無機質な声。

『本日、ミシュテプの月、第二ヨウラフの日、午前七時二十八分、被験体ナンバー1726の死亡が確認されました』

頭が割れるように痛む。ハクウはそれでも、もしものことを考えて周りを見渡した。ティユファダは先程よりも悲痛な叫びを上げているし、ネイアも握り締めた手の爪が表面の皮膚を突き破ってしまったようで掌から血を流しながら木に持たれかかっている。クーヤは右目を押さえて声ならぬ声を出して蹲って、スノーは目の前の惨状に何も言えずに立ちすくんでいるばかりだった。天空から響く声は流れるように続いていく。

『被験体の死亡数が1000を超えましたので、新たに情報が開示されます——』

かちりとパズルのピースが填まる音がする。それから、認識出来ない音の集合体。延々と続くなにかの塊。

『——それではこれより、世界の改変を行います』

そして、世界中にファンファーレが鳴り響いた。

25・にかいめのはじまり（後書き）

第一章はこれにて終了です。

XX・へびのあし（前書き）

読まなくていい鬱話。誰も得しない過去のこと。

XX・へびのあし

水溜りの中に白く輝く月が浮いている。天上を映し、月と星の光で彩られた水の鏡は、輝く夜空だけでなく興味深そうに水の中の月を見つめている子狐の顔も鮮明に映し出していた。つやつやとした水色の毛並みは明らかに現実的なものではなく、しかしてこの世界ではそれほど目立たない部類に入るものである。

その子狐が幼いことを示す短い手足の先はまるで靴下でも履いているかのように白く、尻尾の先も修正液にべっとりと浸かったかのごとく白い。ふかふかした腹の部分も白い毛が生えており、正面から見たら水色よりも白の占める面積のほうが多いくらいだ。

周囲を囲むのは森。冷たく湿った息を吐き、天高く伸ばした枝に大きな葉を付けて空を覆い隠し、人の近寄れぬ場所を作り出す自然の結界。何の音もしない暗闇。そのすべてがこの子狐の味方であり、彼がこの地を駆けるには何の障害にもならない。

両親が仕事のために遠くの国へ帰ってしまった、この言葉の使い方はこの地で生まれ育った彼にとつては少々受け入れがたい、ので彼はひとり、この土地で魔獣としての訓練を続けていた。周囲には彼を支えてくれる優秀な魔獣たちがいる。しかし彼らはあくまで部下というくくりであり、子狐が彼らの好意に甘えてしまつて凭れ掛かつてもいいとは思えなかった。

夜は天狐族の時間。しかし他の種族にとつてはそうではなく、昼間でなければ全力で動けないものもある。なので子狐はこの空いた休憩時間をふらふらと散歩することで過ごしていた。退屈と、少し

の寂しさをどこかへ放り捨てるように。

そして見つけたのがこの水溜りである。彼が住む森に生えている木はどれも、雨が降ればあつという間に水を根に溜め込んでしまうので、このように水溜りが残っていることすら稀である。だからこそ彼は興味深そうに水溜りの匂いを嗅いでみたりしているのだが前足を出して水面に触れるようなことは決してしなかった。

魔獣にとって鏡とは自らを映すものであり、別の世界との境を示すものでもあった。それが金属の磨かれたものであるか水であるかなどは関係せず、ただ鏡として使えるもの、特にそれを覗き込んでいる魔獣の身体全体が入れそうな大きさならば勝手にどこか別の場所と繋がってしまうのである。鏡の向こう側にある世界は物質しか存在することは出来ないで、鏡の向こうに足を伸ばしたものは、そこからはいじき出されるようにしてこちら側の世界の別の場所へと移動する。

この転移には規則性があり、今では魔獣たちはそれを十分に利用してこの世界で暮らしている。しかしこのように自然に出来てしまった『鏡』がどこに繋がっているかはわからない。下手したら人間の家の風呂場に出るかもしれない。なのでこの子狐が覗き込んでいる大きな水溜りは彼にとって十分危険な存在であることは間違いないかった。

だからこそ彼はその水溜りを迂回して進もうとしたのだ。しかし彼は突如として体勢を崩し水溜りの向こうに姿を消す。まるで水の中から出てきた見えない腕に引きずり込まれるような、そんな奇怪な動きだった。

白い足だ。暗闇の中に足枷のつけられた白い足がこちらに向かつて投げ出されている。天井近くにある窓から吹き込んだ風が静かにカーテンを揺らしていた。ぱちぱちと瞬きをして周囲を見渡せばどう見ても人間の住処である証拠しか見当たらない。毛の長い絨毯、大きな寝具、子狐の背後にある嵌め込み式の大鏡、それ以外に何もなく、取っ手のない扉、これまた嵌め込み式の窓。

足音を忍ばせつつ子狐は部屋の中を歩き回る。出入り口の扉を確認してみればどうやら引き戸のようであった。窓もすっかりと嵌め込まれており、室内には何もないので叩き割ることも出来そうになかった。寝具も止め具で固定されており動かせそうにない。逃げ道は一つとしてない。

なぜ、この人間は閉じ込められているのだろう。好奇心が首をもたげた。心の赴くまま爪を立てて寝具の上に登り、足以外のすべてが掛け布団に隠されている人間の横を歩く。横から見た限りではまだ幼い少女だろう。ということは恋愛絡みのごたごたかもしれない。特に面白みもない事態にわずかに落胆しつつも子狐は寝ている人間の頭があるあたりに座り込み、そっと前足を使って布団をずらした。そして現れる顔。

黒い髪。そんなことはありえない。この世界の人間には黒い髪を持つ者はいないはず。ならばこの人間はいったい何なのだ。混乱の渦に巻き込まれた子狐はじっと人間の少女の顔を見つめることしかできなかった。肌の色は黄味を帯びていて、顔立ち自体は幼げ、涙の跡。はつきりわかることは只一つ。これは見るからに――
――弱者である。

人間の瞼が震える。開かれた先にあつた色は、当然のごとく黒。彼女の顔を覗き込んでいた子狐を見て、唇を動かす。喉が潰されているようで声は出なかったが、その口の動きもこの世界の人間の使う言語に当てはまらなかった。だから彼は、この人間を自分の住む場所へと連れ帰ることにしたのだ。『ころして』やるつもりなど、彼にはなかった。そんなことに意味も理由もないのだから。

足枷を外し、そばに落ちていたくしゃくしゃのワンピースを拾って、ふらつく足取りを支えながら鏡をくぐる。水溜りは疾うに消えかけていた。どうやらぎりぎりで帰ることが出来たようだ。あれ以上あの場に居たら少々困った事態になっていたかもしれない。他の魔獣にこの人間の存在が見つからないように、色々と気を配りながら子狐は自らの巣に向かって歩いていく。月明かりが彼らを穏やかに照らしていた。

身を清めてやっても、手当てをしているあいだも少女はまともな反応を返さなかった。僅かに震えるだけ。ただ、それだけ。

怪しい少女。誰かに報告をせねばならない存在。だのに彼は誰かに言うつもりは欠片もなかった。理由はそう、ただの勘。何の保障もない、生まれてから数年も経っていない、人にあらざるものの勘だ。それは果たして正しかったのか。今となつては論じようもないことである。

子狐は日々の合間合間に少女に向かって話しかけた。洞窟の中に

布が張り巡らされた、外の暑さや寒さとは無縁の自慢の巣で膝を抱えた少女に外の話をする。無反応だった少女がやがて反応を返すようになり、ようやく表情を変えるようになったころのことだ。

少女が嘔吐した。原因はわかっている。妊娠だ。こちらに連れ帰ったときにはすでに彼女の胎の中に命が宿っていたのだった。体調を崩すようになった少女の声なき罵倒も子狐は甘んじて受けた。生きていくことで必ず乗り越えられると信じていたから。

季節は巡る。少女は安定期に入った。ますます膨れていく腹部に錯乱状態になることもままあったが、子狐は辛抱強く少女をなだめた。食料も様々なものを集めた。時には人間の食べるような料理も用意した。そうしていくうちに、ついには笑顔すら浮かべるようになった。彼は安心していった。……油断していたのだ。

名前も知らない少女は死んだ。自殺だ。いつものように食料を集めて帰ってきたら巣の近くの木で首を吊っていた。

だから子狐は喰らったのだ。死んでしまえばただの肉の塊にすぎない。骨の一片も残さず、胎の中でまだ生きていたそれも、すべてすべて食べた。

青白い炎が宙に浮いている。

XX・へびのあし（後書き）

『じぶん って ものは きおく の つみかさね

じぶん が できあがって いない ころ に
ほかの じぶん を もらって しまったら
とうぜん ふたつ が まじって しまっ
よ

べつに そうぞう してなかった わけ じゃない けど
』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1136v/>

狐印の冒険譚

2011年12月24日18時51分発行